



宇治田原町の野生生物

レッドデータブック



宇治田原町



は じ め に

宇治田原町は、大峰山や鷲峰山をはじめとする美しい山々の緑に囲まれた自然豊かなまちです。その緑を源とする田原川などの清流に恵まれ古くからお茶づくりが盛んで、茶祖永谷宗円翁が現在の日本緑茶であります青製煎茶（宇治製法緑茶）を作り出し

てからは、全国的にお茶の産地として名声をはくしてまいりました。

私たちの先人は、この長いお茶づくりの歴史の中で、良質で香り高いお茶が豊かな自然の恵みであることに感謝し、自然と共生することを大切にする茶文化を育んできました。

私たちが美しい緑に囲まれた和やかで潤いのある環境に暮らすことができるのも、ひとえに先人が守り続けてくれた茶文化が今も息づいているからにほかなりません。

しかしながら、現在、世界的にも生活構造の影響により、これまでに見られなかった速さと規模で、野生生物種の絶滅や生態系の消滅などの自然破壊が進んでいるといわれています。これは、宇治田原町内においても同じことで、人々と自然との関わりが薄れた結果、知らず知らずのうちに、住民にとって大切な自然が失われつつあります。

先人が大切に守ってきた自然との関係をもう一度見直していき、先人の知恵や伝統を生かしつつ、将来の住民に豊かな自然を引き継いでいくために、平成 15 年度より 3 ヶ年にわたり野生生物調査を行い、ここに「宇治田原町の野生生物」としてとりまとめました。

本書が多くの住民の皆様にも宇治田原町のすばらしい自然について関心を持っていただくきっかけとなり、各地域で行われる自然環境保全の取り組みの基礎資料として活用されることを願っています。

あとになりましたが、調査の実施並びに本書の作成にご尽力賜りました「宇治田原環境生物研究会」の会員の皆様をはじめ、並びに幅広い視点から御意見をいただきました関係各位の皆様にも心からお礼申し上げます。

平成 18 年 3 月

宇治田原町長 奥 田 光 治

も く じ

1. はじめに	1
2. もくじ	2
3. 宇治田原環境生物研究会の紹介	3
4. 宇治田原町の位置、地形、気象	4
5. レッドデータブックのカテゴリー	6
6. 宇治田原町の哺乳類	7
7. 宇治田原町の鳥類	14
8. 宇治田原町のは虫類	41
9. 宇治田原町の両生類	46
10. 宇治田原町の淡水魚類	53
11. 宇治田原町の陸棲昆虫	63
12. 宇治田原町の水棲昆虫	83
13. 宇治田原町の甲殻類、淡水産貝類	86
14. 宇治田原町の植物	89
15. 宇治田原町の菌類	104
16. さくいん	123

宇治田原環境生物研究会は、町内外の有識者により平成 15 年 5 月 23 日に設立しました。宇治田原の自然環境の調査・環境保全活動を主な活動としています。具体的な活動としては、平成 15 年度から宇治田原町の調査保全事業の委託をうけ、野生生物の生息・分布状況調査、野生生物の生息環境保全方法の検討・実施等を行っています。



阪 本 伊三雄 (さかもと いさお) 水棲昆虫・甲殻類・淡水産貝類・植物担当

宇治田原環境生物研究会会長、エコパートナーシップうじたわら会長、ふるさと歴史クラブ会長、文化財保護委員、民生児童委員、社会福祉協議会委員、むく福祉会理事等。宇治田原町岩山在住。



中 川 宗 孝 (なかがわ むねたか) 哺乳類・鳥類・は虫類・両生類担当

巨椋(おぐら)野外鳥類研究会代表、日本鳥学会員、鳥類標識調査員、日本カメ自然誌研究会員。ナチュラリストとして環境学習の指導に携わり、愛鳥思想の啓蒙と自然保護運動に取り組んでいる。ライフワークは鳥類目録と生き物リストの作成。城陽市在住。



小 森 雅 夫 (こもり まさお) 淡水魚類担当

城陽市文化協会勤務、元洛南タイムス記者、山野草の研究家、青少年活動の指導者として自然と交流を続け、男の料理教室主宰、地域フォーラムでの講演などアウトドアの達人として活躍中。宇治市在住。



岩 崎 仁 (いわさき のぶ) 陸棲昆虫担当

愛知県出身。主に宇治市立小学校に勤務。山城教育局指導主事、宇治市立南小倉小学校長、同菟道小学校長で定年退職。その後、嘱託として宇治市教育委員会学校教育指導主事として勤務。その間、宇治川水域採集会昆虫の部の講師を約 47 年間担当、現在に至る。宇治田原町岩山在住。



岩 瀬 剛 二 (いわせ こうじ) 菌類(きのこ)担当

京都大学大学院理学研究科博士課程中退、理学博士。
(株)環境総合テクノス生物環境研究所(宇治市)に勤務、所長、京都大学非常勤講師。日本菌学会理事。菌類を利用した里山再生、植林、環境浄化等の研究を展開中。宇治田原町銘城台在住。

1. 宇治田原町の概要

京都府の東南部に位置し、北東部は滋賀県大津市、東部は同県甲賀市、南部は相楽郡和束町、西部は綴喜郡井手町と城陽市、北西部は宇治市と接しています。

東西約 11 km、南北約 9 kmの広がりを持ち、面積は 58.26 km²です。また、東経は 135 度 51 分、北緯は 34 度 51 分、海拔は 118m（町役場）です。



位置図

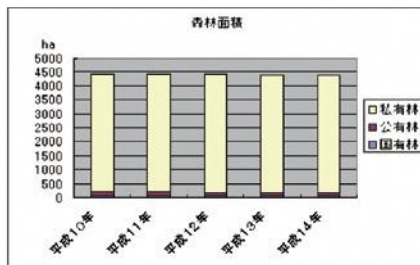
2. 宇治田原町の自然環境

自然林の他、植林地や農地・茶園及びその付近の里山等の二次的自然環境も含めて、豊かな自然環境が残っており、ヤマセミやオシドリ、カワガラス、カリガネ草といった希少野生生物も数多く確認されています。

人々が自然とふれあえる施設として、やすらぎの道や末山・くつわ池自然公園等が整備されています。

人口増加による住宅地の増加に伴い農地面積は減少する傾向にあることから、住宅地需要と農地保全を調整することが課題となっています。

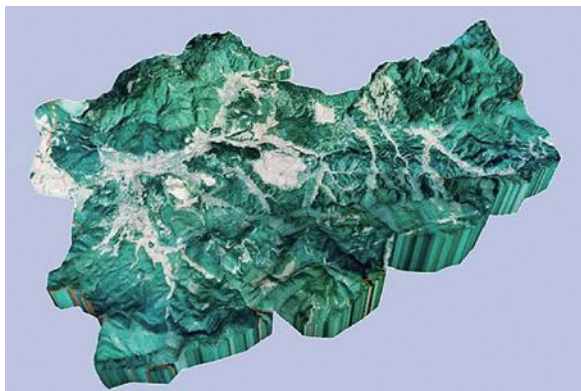
森林面積はほぼ横ばいですが、大半がスギ・ヒノキ植林であることから、水源を涵養し多様な野生生物の生息地となる落葉広葉樹林の保全とスギ・ヒノキ植林による営林とのバランスをとることが課題となっています。



3. 宇治田原町の地形

地形は、北西部の大峰山（506.4m）を中心とする山地と、南端の鷲峰山（681.2m）から北東及び南西に連なる山地が大部分を占めています。

そして、南部山地から広がる標高 200m ～ 250m の丘陵部と、河川沿いの平地部からなり、そこに多くの谷が組み合わさって、陰影に富んだ地形を作り出しています。山地部と丘陵部の大部分が、傾斜 22.5 度以上の急傾斜であり、周辺からの交通の障壁となっており、そこを訪れるものに、日本の原風景ともいえる印象を与えています。



地 形 図

4. 宇治田原町の気象

気候は、瀬戸内気候地域に属しますが、本町は内陸部にあるため夏は暑く、冬は降雪は少ないもののやや寒い傾向にあります。

	降水量 mm	最大日降水量 mm	平均気温 ℃	最高気温 ℃	最低気温 ℃
1月	17.5	14.0	3.7	8.3	-0.6
2月	49.5	19.5	3.9	8.6	-0.6
3月	76.5	30.0	7.4	12.4	2.2
4月	97.0	39.0	12.9	18.7	7.0
5月	276.0	48.0	17.7	23.4	12.1
6月	127.0	31.0	21.8	26.6	17.4
7月	46.0	30.5	25.5	30.2	21.6
8月	142.5	44.5	26.6	31.8	22.4
9月	152.5	64.5	22.6	27.5	18.4
10月	242.5	82.0	16.4	21.8	11.8
11月	105.0	33.5	10.8	16.2	6.1
12月	62.0	32.5	5.8	10.9	1.3

資料：降水量・最大日降水量…宇治田原町統計書
平均・最高・最低気温…京都地方気象台（京田辺市参照）

5. レッドデータブックカテゴリー

【京都府と環境省のレッドデータブックカテゴリー】

京都府 RDB カテゴリー (野生生物種 2002)	環境省 RDB カテゴリー (1997)	解 説
絶滅種	絶滅 (EX)	すでに絶滅したと考えられる種
—	野生絶滅 (EW)	飼育・栽培下でのみ存在している種
絶滅寸前種	絶滅危惧	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
—		絶滅危惧ⅠA類 (CR)
—		絶滅危惧ⅠB類 (EN)
絶滅危惧種		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
準絶滅危惧種	準絶滅危惧 (NT)	存続基盤が脆弱な種
要注目種	情報不足 (DD)	情報が不足している種、京都府 RDB においては生息生育状況について今後の動向を注目すべき種を含む
要注目外来種	—	京都府内において、生態系に特に悪影響を及ぼしていると考えられる種で、今後の動向を注目すべき種

哺乳類

【調査結果の概要】

観察が困難な哺乳類の生息調査では、マスコミ報道記録や地元住民からの情報を重視した文献調査・聴取調査に沿って、宇治田原町に生息する可能性のある動物をリストアップした。野外での調査では、生息の実証となる糞や足跡、食痕などのフィールドサイン・痕跡の発見に努め、交通事故によるへい死体の確認からも情報を得た。また、一部の動物においては生体の捕獲を試みた。

こうした結果、全 21 種類の生息を確認できた。大型・中型哺乳類では、ツキノワグマが交通事故死によって確認され、狩猟獣のシカとイノシシ、農業に被害を及ぼすニホンザル、キツネ、タヌキの生息を確認できた。草食性や小型肉食獣では、テンとイタチ 2 種、ノウサギにニホンリス、ムササビ、アブラコウモリが確認され、カヤネズミ、アカネズミ、ハツカネズミ、ドブネズミ、クマネズミが捕獲などによって確認された。モグラの仲間のヒミズが観察され、屍からはコウベモグラと同定した。その他、参考記録として野イヌ・野ネコが山間部で見られ、要注目外来種のアライグマの目撃例が報告された。

今後の課題として、特に生息の可能性の高い種の継続調査と情報収集が求められ、サルなどの有害獣との共存の道を探り、生息が確認されている希少動物への具体的な保全対策が問われている。

	科	和 名	学 名	カテゴリー		頁
				京都府 RDB	環境省 RDB	
1	シカ科	ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i>	—	—	10
2	イノシシ科	ニホンイノシシ	<i>Sus leucomystax</i>	—	—	
3	オナガザル科	ニホンザル	<i>Macaca fuscata</i>	要注目種	—	10
4	イヌ科	ホンドギツネ	<i>Vulpes vulpes</i>	—	—	11
5	イヌ科	ホンドタヌキ	<i>Nyctereutes procyonoides</i>	—	—	11
6	イタチ科	ホンドテン	<i>Martes melampus</i>	—	—	
7	イタチ科	ニホンイタチ	<i>Mustela itatsi</i>	—	—	12
8	イタチ科	チョウセンイタチ	<i>Mustela sibirica</i>	要注目外来種	—	
9	クマ科	ニホンツキノワグマ	<i>Selenarctos thibetanus</i>	絶滅寸前種	—	8
10	リス科	ニホンリス	<i>Sciurus lis</i>	—	—	
11	リス科	ムササビ	<i>Petaurista leucogenys</i>	準絶滅危惧種	—	9
12	ネズミ科	ハタネズミ	<i>Microtus montebelli</i>	—	—	
13	ネズミ科	カヤネズミ	<i>Micromys minutus</i>	準絶滅危惧種	—	12
14	ネズミ科	アカネズミ	<i>Apodemus speciosus</i>	—	—	13
15	ネズミ科	ドブネズミ	<i>Rattus norvegicus</i>	—	—	
16	ネズミ科	クマネズミ	<i>Rattus rattus</i>	—	—	
17	ネズミ科	ハツカネズミ	<i>Mus musculus</i>	—	—	
18	ウサギ科	ノウサギ	<i>Lepus brachyurus</i>	—	—	13
19	ヒナコウモリ科	アブラコウモリ	<i>Pipistrellus abramus</i>	—	—	
20	モグラ科	コウベモグラ	<i>Mogera robusta</i>	—	—	
21	モグラ科	ヒミズ	<i>Urotrichus talpoides</i>	—	—	
22	アライグマ科	アライグマ	<i>Procyon lotor</i>	要注目外来種	—	

分類：クマ科

学名：*Selenarctos thibetanus*

全長：110～130cm

◎京都府カテゴリー：絶滅寸前種

◎環境省カテゴリー：－



（撮影：竹本 正雄）

解説：平成 16 年 11 月 19 日、本来の生息地から餌不足で里に出てきたツキノワグマが、国道 307 号線で交通事故死した。特徴である胸の「月ノ輪」がなく、近似種のヒマラヤグマなどの飼育個体が脱走した可能性があった。背景には、国際商取引が禁止されているにもかかわらず、依然薬用として珍重される「熊の胆（い）」の密輸入の現状がある。体に 3 cm もの大きなダニが着き、飼育個体に見られるという足裏の角質化や、檻を咬む歯の摩耗や爪の変化が見られないことと大きさから、当歳のメスのツキノワグマと鑑定した。これまで猟が盛んな当地での記録もなく、宇治市などで目撃された迷いグマと判断した。京都府では、最も絶滅の恐れのある絶滅寸前種として狩猟も自粛されており、貴重な標本を得た宇治田原町では、環境学習の教材として活用されている。

哺乳類

ムササビ (鼯鼠)

分類：リス科

学名：*Petaurista leucogenys*

体長：27～48cm

◎京都府カテゴリー：準絶滅危惧種

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：柏木 勢二)

解説：夜行性のムササビは、昼間に活動するリスと時間的棲み分けをし、生息地における観察例もごく少ないのが通常である。生息を裏付けるフィールドサインでは、果実や松かさなどの食跡のほか、杉の表皮の「ささくれ」や「止め爪」の跡が手がかりとされている。植物食も、季節によって種子から葉や花、冬芽や樹皮など多岐にわたっている。繁殖期にあたる冬期には、「ギャルルゥーッ」と猫のケンカのような声を発することからも、ムササビの生息を確認することができる。各地で「バンドリ」の俗称で呼ばれる日本の固有種は、キツツキの巣穴のほか、リスや鳥の巣を利用し、神社やお寺の屋根裏にも棲み着いている。京都府の準絶滅危惧種であるムササビの特徴的な長い滑空は観察できにくいものの、宇治田原町では主に山間部といくつかの神社で生息が確認されている。

哺乳類

ニホンジカ（日本鹿）

分類：シカ科

学名：*Cervus nippon*

全長：♂90～190cm・♀90～150cm

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



（撮影：中川 宗孝）

解 説

ニホンジカは7亜種に分類され、当地にはホンシュウジカが生息している。生息環境の悪化から、絶滅が危惧される動物が多いなか、シカは深刻な林業被害や農作物被害をもたらすまでに増加した。有害獣駆除の対象となり、オスに次いでメスの狩猟が認められた所もある。オスの角は毎年生え替わり、一年ごとに枝分かれする。宇治田原町では、山間部で単独のオスと、仔鹿を連れたメスの群れがよく見られ、夜間には平野部にも降りてきている。

哺乳類

ニホンザル（日本猿）

分類：オナガザル科

学名：*Macaca fuscata*

体長：♂53～60cm・♀47～55cm

◎京都府カテゴリー：要注目種

◎環境省カテゴリー：－



（撮影：二村 一男）

解 説

近年、深刻な農業被害を与えているニホンザルは、単独から数十頭の群れまで観察されている。昔は餌が乏しくなる季節にだけ人里近くに出現したと聞かぐ、近年の状況は、個体数の増加に伴う生息域の拡大なのか、生息環境の悪化による餌不足が原因なのかは分かっていない。日本固有種で、世界最北に生息するニホンザルは、学術的にも貴重な動物として保護されてきた反面、餌付けによる被害も指摘されている。最も高等な野生生物との共存が求められている。

哺乳類**ホンドギツネ（本土狐）**

分類：イヌ科
学名：*Vulpes Vulpes*
全長：52～76cm

◎京都府カテゴリー：－
◎環境省カテゴリー：－



（撮影：二村 一男）

解 説

昔から親しまれてきた日本を代表する野生動物に、キツネとタヌキがいる。キツネは野ネズミや鳥、昆虫類を主食とするため、雑食性のタヌキに比べて自然環境の豊かな地に生息している。個体数もはるかに少なく、環境指標生物としての両者には大きな隔りがある。ファミリーで暮らすタヌキに対し、繁殖期以外は単独生活をする。宇治田原町で頻繁に目撃されるキツネも、へい死体の割合は低く、過去5年間で2例の記録が残るだけである。

哺乳類**ホンドタヌキ（本土狸）**

分類：イヌ科
学名：*Nyctereutes procyonoides*
体長：50～60cm

◎京都府カテゴリー：－
◎環境省カテゴリー：－



（撮影：岡井 勇樹）

解 説

漢字名のとおり、里の獣を代表するタヌキは、思いのほか人里にたくさん生息している。市街地でも、下水道を「獣道」とし、残飯などを求めて出没する。最も顕著なフィールドサインに、共同便所「溜め糞」の習性がある。宇治田原町では全域で観察され、特に夜間に道路を横切る姿がよく見られる。交通事故に遭う確率も高く、へい死体でも約4割を占めていた。全身の毛が抜けた疥癬病（かいせん）のタヌキの報道記事に、感染が危惧された時期もあった。

哺乳類 ニホンイタチ (日本鼬)

分類：イタチ科

学名：*Mustela itatsi*

全長：♂29～37cm・♀20～26cm

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：二村 一男)

解説

絶滅種のニホンカワウソを彷彿させる水辺のハンター・イタチは、時に大きなコイを獲ることで知られている。河川敷や水田、丘陵地でよく出会うイタチには、在来のホンDOIタチと要注目外来種のチョウセンイタチがいる。人里に出没し、鶏やウサギ小屋を襲う主のチョウセンイタチは、やや小型のホンDOIタチを駆逐し、生息域を拡げている。宇治田原町でも、既にチョウセンイタチが侵入しており、今後の生息分布が注目されている。

哺乳類 カヤネズミ・巢 (萱鼠)

分類：ネズミ科

学名：*Micromys minutus*

全長：5～8cm

◎京都府カテゴリー：準絶滅危惧種

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：脇坂 英弥)

解説

ネズミ類で唯一、レッドデータブック掲載の準絶滅危惧種のカヤネズミは、鳥の巣と間違えソフトボール大の巣を造ることで知られる日本最小のネズミである。河川敷のヨシやオギ、草原のススキの他、休耕田の稲などを巣材として、産室やネグラ用に利用し、冬は土中の穴で過ごしている。葦原の減少に代表される生息環境の悪化により、各地で減少傾向が伝えられている。宇治田原町では田原川の河川敷と水田地帯で巣が確認されている。

哺乳類 アカネズミ (赤鼠)

分類：ネズミ科
学名：*Apodemus speciosus*
体長：9～14cm

◎京都府カテゴリー：－
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：中川 宗孝)

解 説

日本一美しいと称される日本固有のアカネズミは、宇治田原町の丘陵部に生息し、田原川河川敷や農耕地でも多く見られた。カヤネズミやハツカネズミ、ハタネズミなどを狙ったトラップ・罠には、ことごとくアカネズミが入った。生息地が重なる類似種のヒメネズミは、主に樹上生活することから、地上性の当種と棲み分けをしている。豊かな自然環境を実証する猛禽類や肉食動物の生息も、餌となるネズミ類の存在を抜きには語れない。

哺乳類 ノウサギ (野兎)

分類：ウサギ科
学名：*Lepus brachyurus*
全長：45～54cm

◎京都府カテゴリー：－
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：二村 一男)

解 説

日本固有のノウサギは、4 亜種に分けられ、当地にはキュウシュウノウサギが分布する。ウサギを見慣れている人にとって、ノウサギの耳の短さは一見異様に映り、ペットが野生化した飼育ウサギとは形態的相違がある。観察しようとしてもなかなかできないノウサギも、山では足元から飛び出して来ては驚かされる。生息の実証となるフィールドサインでは、特徴ある斜めの食痕跡や、平らで円い糞、雪に残った一方が棒状の足跡など、判別は容易である。

鳥 類

【調査結果の概要】

京都府南部・南山城地方では、1983年からこれまでに18目・53科・255種類の野鳥と、26種類の帰化鳥・籠抜け鳥の生息が記録されている。宇治田原町では、17目・39科・174種類の野鳥と、14種類の帰化鳥・籠抜け鳥数の記録がある。

本来は帰化鳥であるドバトを含めた174種類の野鳥のうち、1年中生息している留鳥が44種類、繁殖のために渡来する夏鳥が17種類、越冬のために渡来する冬鳥が50種類、北方で繁殖し南方で越冬する旅鳥が53種類、本来の生息環境外で観察されたり、渡りのルートから外れ飛来するまれな「迷鳥」が10種類記録されている。これらの記録は、宇治田原町が自然環境豊かな郷であり、野鳥たちにとっては欠かせない繁殖の地、厳しい季節を生き抜く越冬地、貴重な渡りの中継地であることを表している。

絶滅指標のレッドデータブックに照らし合わせてみても、105種類もの野鳥が該当し、希少鳥類の占める割合が高いことも特徴のひとつである。内訳では、京都府版レッドデータブック全104種のうち70種、近畿版全160種類のうち95種、国・環境省版全121種のうち15種を占めている。分類別では、留鳥12種、夏鳥12種、冬鳥28種、旅鳥46種、迷鳥6種となっている。

京都府版に限っては、最も絶滅の危機に瀕する「絶滅寸前種」8種のうち4種、「絶滅危惧種」49種のうち33種、「準絶滅危惧種」45種のうち31種、「要注目種」2種のうち1種が記録されている。

今回の調査では、宇治田原町を主要な環境で16区分したフィールド毎に記録をとり、希少鳥類における生息地と生息環境の把握に努めた。その結果、『宇治田原町鳥類目録』全174種類の野鳥のうち、85%にあたる37科・147種を確認することができた。また、環境省の標識足環を装着する「鳥類標識調査」を実施し、オシドリ、ヤマセミ、カワセミ、アオジなどのレッドデータブックに記載されている希少鳥類たちの生息を実証することができた。

内訳では、カイツブリ、タマシギなど1科1種の野鳥は計12種類、1科2～3種は13科33種類、1科4～6種は4科18種類、最も多いヒタキ科は4亜種計25種類、カモ科、シギ科はそれぞれ13種類12種類、タカ科は8種類、サギ科、ホオジロ科、アトリ科は7種類、特筆すべきは猛禽類計13種類で、水鳥から草索性・森林性の野鳥まで変化に富んだ自然環境を実証する結果となった。

今後の課題として、「環境省・鳥類観測宇治川ステーション」に属し、主要調査地として登録されている宇治田原町の、さらなる継続調査が求められている。今後郷土の環境資料として、これらの資料が野鳥保護と環境保全に役立つことを願っている。

	科	和 名	学 名	分類	カテゴリー		頁
					京都府 RDB	環境省 RDB	
1	カイツブリ科	カイツブリ	<i>Podiceps ruficollis</i>	留鳥	準絶滅危惧種	—	29
2	ウ科	カワウ	<i>Phalacrocorax carbo</i>	留鳥	—	—	
3	サギ科	ゴイサギ	<i>Nycticorax nycticorax</i>	留鳥	—	—	
4	サギ科	ササゴイ	<i>Butorides striatus</i>	夏鳥	準絶滅危惧種	—	29
5	サギ科	アマサギ	<i>Bubulcus ibis</i>	夏鳥	—	—	
6	サギ科	ダイサギ	<i>Egretta alba</i>	留鳥	—	—	
7	サギ科	チュウサギ	<i>Egretta intermedia</i>	留鳥	準絶滅危惧種	準絶滅危惧	30
8	サギ科	コサギ	<i>Egretta garzetta</i>	留鳥	—	—	
9	サギ科	アオサギ	<i>Ardea cinerea</i>	留鳥	—	—	
10	カモ科	オシドリ	<i>Aix galericulata</i>	冬鳥	絶滅危惧種	—	19
11	カモ科	マガモ	<i>Anas platyrhynchos</i>	冬鳥	—	—	
12	カモ科	カルガモ	<i>Anas poecilorhyncha</i>	留鳥	—	—	
13	カモ科	コガモ	<i>Anas crecca</i>	冬鳥	—	—	
14	カモ科	トモエガモ	<i>Anas formosa</i>	冬鳥	準絶滅危惧種	準絶滅危惧	
15	カモ科	ヨシガモ	<i>Anas falcata</i>	冬鳥	—	—	
16	カモ科	オカヨシガモ	<i>Anas strepera</i>	冬鳥	—	—	
17	カモ科	ヒドリガモ	<i>Anas penelope</i>	冬鳥	—	—	
18	カモ科	オナガガモ	<i>Anas acuta</i>	冬鳥	—	—	
19	カモ科	ハシビロガモ	<i>Anas clypeata</i>	冬鳥	—	—	
20	カモ科	ホシハジロ	<i>Aythya ferina</i>	冬鳥	—	—	
21	カモ科	キンクロハジロ	<i>Aythya fuligula</i>	冬鳥	—	—	
22	カモ科	ミコアイサ	<i>Mergus albellus</i>	冬鳥	—	—	
23	タカ科	ミサゴ	<i>Pandion haliaetus</i>	冬鳥	絶滅危惧種	準絶滅危惧	30
24	タカ科	ハチクマ	<i>Pernis apivorus</i>	旅鳥	絶滅危惧種	準絶滅危惧	
25	タカ科	トビ	<i>Milvus migrans</i>	留鳥	—	—	
26	タカ科	オオタカ	<i>Accipiter gentilis</i>	留鳥	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅱ類	20
27	タカ科	ツミ	<i>Accipiter gularis</i>	留鳥	絶滅危惧種	—	
28	タカ科	ハイタカ	<i>Accipiter nisus</i>	冬鳥	準絶滅危惧種	準絶滅危惧	31
29	タカ科	ノスリ	<i>Buteo buteo</i>	冬鳥	準絶滅危惧種	—	31
30	タカ科	サシバ	<i>Butastur indicus</i>	夏鳥	絶滅危惧種	—	
31	ハヤブサ科	ハヤブサ	<i>Falco peregrinus</i>	留鳥	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅱ類	
32	ハヤブサ科	チョウゲンボウ	<i>Falco tinnunculus</i>	冬鳥	準絶滅危惧種	—	
33	キジ科	コジュケイ	<i>Bambusicola thoracica</i>	留鳥	—	—	
34	キジ科	ヤマドリ	<i>Phasianus soemmerringi</i>	留鳥	準絶滅危惧種	—	21
35	キジ科	キジ	<i>Phasianus colchicus</i>	留鳥	—	—	32
36	クイナ科	クイナ	<i>Rallus aquaticus</i>	冬鳥	絶滅危惧種	—	32
37	クイナ科	ヒクイナ	<i>Porzana fusca</i>	夏鳥	絶滅危惧種	—	33
38	クイナ科	バン	<i>Gallinula chloropus</i>	留鳥	—	—	
39	タマシギ科	タマシギ	<i>Rostratula benghalensis</i>	夏鳥	絶滅危惧種	—	33
40	チドリ科	コチドリ	<i>Charadrius dubius</i>	留鳥	—	—	
41	チドリ科	イカルチドリ	<i>Charadrius placidus</i>	留鳥	準絶滅危惧種	—	
42	チドリ科	シロチドリ	<i>Charadrius alexandrinus</i>	留鳥	絶滅危惧種	—	
43	チドリ科	ムナグロ	<i>Pluvialis dominica</i>	旅鳥	準絶滅危惧種	—	34
44	チドリ科	ケリ	<i>Microsarcops cinereus</i>	留鳥	—	—	
45	チドリ科	タゲリ	<i>Vanellus vanellus</i>	冬鳥	—	—	
46	シギ科	ウスラシギ	<i>Calidris acuminata</i>	旅鳥	準絶滅危惧種	—	
47	シギ科	ハマシギ	<i>Calidris alpina</i>	旅鳥	—	—	
48	シギ科	アオアシシギ	<i>Tringa nebularia</i>	旅鳥	準絶滅危惧種	—	

	科	和 名	学 名	分類	カテゴリー		頁
					京都府 RDB	環境省 RDB	
49	シギ科	クサシギ	<i>Tringa ochropus</i>	旅鳥	準絶滅危惧種	—	34
50	シギ科	タカブシギ	<i>Tringa glareola</i>	旅鳥	準絶滅危惧種	—	
51	シギ科	キアシシギ	<i>Tringa brevipes</i>	旅鳥	準絶滅危惧種	—	
52	シギ科	イソシギ	<i>Tringa hypoleucos</i>	留鳥	準絶滅危惧種	—	
53	シギ科	チュウシャクシギ	<i>Numenius phaeopus</i>	旅鳥	準絶滅危惧種	—	35
54	シギ科	ヤマシギ	<i>Scolopax rusticola</i>	冬鳥	絶滅危惧種	—	
55	シギ科	タシギ	<i>Gallinago gallinago</i>	旅鳥	—	—	
56	シギ科	チュウジシギ	<i>Gallinago megala</i>	旅鳥	準絶滅危惧種	—	
57	シギ科	オオジシギ	<i>Gallinago hardwickii</i>	旅鳥	準絶滅危惧種	準絶滅危惧	
58	カモメ科	ユリカモメ	<i>Larus ridibundus</i>	冬鳥	—	—	
59	カモメ科	コアジサシ	<i>Sterna albifrons</i>	夏鳥	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅱ類	
60	ハト科	キジバト	<i>Streptopelia orientalis</i>	留鳥	—	—	
61	ハト科	アオバト	<i>Sphenurus sieboldii</i>	冬鳥	絶滅危惧種	—	22
62	ホトトギス科	ジュウイチ	<i>Cuculus fugax</i>	旅鳥	絶滅危惧種	—	
63	ホトトギス科	カクコウ	<i>Cuculus canorus</i>	旅鳥	準絶滅危惧種	—	
64	ホトトギス科	ツツドリ	<i>Cuculus saturatus</i>	旅鳥	準絶滅危惧種	—	
65	ホトトギス科	ホトトギス	<i>Cuculus poliocephalus</i>	旅鳥	—	—	35
66	フクロウ科	コノハズク	<i>Otus scops</i>	迷鳥	絶滅寸前種	—	
67	フクロウ科	アオバズク	<i>Ninox scutulata</i>	夏鳥	準絶滅危惧種	—	
68	フクロウ科	フクロウ	<i>Strix uralensis</i>	留鳥	準絶滅危惧種	—	
69	ヨタカ科	ヨタカ	<i>Caprimulgus indicus</i>	夏鳥	絶滅危惧種	—	24
70	アマツバメ科	ハリオアマツバメ	<i>Chaetura caudacuta</i>	旅鳥	—	—	
71	アマツバメ科	ヒメアマツバメ	<i>Apus affinis</i>	留鳥	絶滅危惧種	—	
72	アマツバメ科	アマツバメ	<i>Apus pacificus</i>	旅鳥	—	—	
73	カワセミ科	ヤマセミ	<i>Ceryle lugubris</i>	留鳥	絶滅危惧種	—	25
74	カワセミ科	カワセミ	<i>Alcedo atthis</i>	留鳥	—	—	
75	キツツキ科	アオゲラ	<i>Picus avokera</i>	留鳥	—	—	26
76	キツツキ科	アカゲラ	<i>Dendrocopos major</i>	留鳥	準絶滅危惧種	—	
77	キツツキ科	オオアカゲラ	<i>Dendrocopos leucotos</i>	留鳥	絶滅危惧種	—	
78	キツツキ科	コゲラ	<i>Dendrocopos kizuki</i>	留鳥	—	—	
79	ヒバリ科	ヒバリ	<i>Alauda arvensis</i>	留鳥	—	—	
80	ツバメ科	ショウドウツバメ	<i>Riparia riparia</i>	旅鳥	—	—	
81	ツバメ科	ツバメ	<i>Hirundo rustica</i>	夏鳥	—	—	
82	ツバメ科	コシアカツバメ	<i>Hirundo daurica</i>	夏鳥	—	—	
83	ツバメ科	イワツバメ	<i>Delichon urbica</i>	旅鳥	準絶滅危惧種	—	
84	セキレイ科	セキレイ	<i>Motacilla cinerea</i>	留鳥	—	—	
85	セキレイ科	ハクセキレイ	<i>Motacilla alba</i>	留鳥	—	—	
86	セキレイ科	セグロセキレイ	<i>Motacilla grandis</i>	留鳥	—	—	
87	セキレイ科	ビンズイ	<i>Anthus hodgsoni</i>	冬鳥	—	—	
88	セキレイ科	タヒバリ	<i>Anthus spinoletta</i>	冬鳥	—	—	
89	ヒヨドリ科	ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i>	留鳥	—	—	
90	モズ科	モズ	<i>Lanius bucephalus</i>	留鳥	—	—	
91	モズ科	アカモズ	<i>Lanius cristatus</i>	旅鳥	—	準絶滅危惧	
92	レンジャク科	キレンジャク	<i>Bombycilla garrulus</i>	旅鳥	—	—	
93	レンジャク科	ヒレンジャク	<i>Bombycilla japonica</i>	旅鳥	—	—	
94	カワガラス科	カワガラス	<i>Cinclus pallasii</i>	留鳥	—	—	
95	ミソサザイ科	ミソサザイ	<i>Troglodytes troglodytes</i>	旅鳥	—	—	36
96	イワヒバリ科	カヤクグリ	<i>Prunella rubida</i>	旅鳥	—	—	

	科	和 名	学 名	分類	カテゴリー		頁
					京都府 RDB	環境省 RDB	
97	ツグミ亜科	ノゴマ	<i>Erithacus calliope</i>	旅鳥	—	—	37
98	ツグミ亜科	コルリ	<i>Erithacus cyane</i>	旅鳥	絶滅危惧種	—	
99	ツグミ亜科	ルリビタキ	<i>Tarsiger cyanurus</i>	冬鳥	—	—	
100	ツグミ亜科	ジョウビタキ	<i>Phoenicurus aureoreus</i>	冬鳥	—	—	37
101	ツグミ亜科	ノビタキ	<i>Saxicola torquata</i>	旅鳥	—	—	
102	ツグミ亜科	トラツグミ	<i>Turdus dauma</i>	冬鳥	準絶滅危惧種	—	
103	ツグミ亜科	クロツグミ	<i>Turdus cardis</i>	旅鳥	準絶滅危惧種	—	38
104	ツグミ亜科	アカハラ	<i>Turdus chrysolaus</i>	旅鳥	—	—	
105	ツグミ亜科	シロハラ	<i>Turdus pallidus</i>	冬鳥	—	—	
106	ツグミ亜科	マミチャジナイ	<i>Turdus obscurus</i>	旅鳥	—	—	38
107	ツグミ亜科	ツグミ	<i>Turdus naumanni</i>	冬鳥	—	—	
108	ウグイス亜科	ヤブサメ	<i>Cettia squameiceps</i>	夏鳥	—	—	
109	ウグイス亜科	ウグイス	<i>Cettia diphone</i>	留鳥	—	—	38
110	ウグイス亜科	オオヨシキリ	<i>Acrocephalus arundinaceus</i>	夏鳥	—	—	
111	ウグイス亜科	メボソムシクイ	<i>Phylloscopus borealis</i>	旅鳥	—	—	
112	ウグイス亜科	エソムシクイ	<i>Phylloscopus tenellipes</i>	旅鳥	—	—	39
113	ウグイス亜科	センダイムシクイ	<i>Phylloscopus occipitalis</i>	旅鳥	—	—	
114	ウグイス亜科	キクイタダキ	<i>Regulus regulus</i>	冬鳥	—	—	
115	ウグイス亜科	セッカ	<i>Cisticola juncidis</i>	留鳥	—	—	39
116	ヒタキ亜科	キビタキ	<i>Ficedula narsissina</i>	旅鳥	—	—	
117	ヒタキ亜科	オオルリ	<i>Cyanoptila cyanomelana</i>	夏鳥	—	—	
118	ヒタキ亜科	サメビタキ	<i>Muscicapa sibirica</i>	旅鳥	—	—	28
119	ヒタキ亜科	エソビタキ	<i>Muscicapa griseisticta</i>	旅鳥	—	—	
120	ヒタキ亜科	コサメビタキ	<i>Muscicapa latirostris</i>	旅鳥	絶滅危惧種	—	
121	カササギヒタキ亜科	サンコウチョウ	<i>Terpsiphone atrocaudata</i>	夏鳥	準絶滅危惧種	—	39
122	エナガ科	エナガ	<i>Aegithalos caudatus</i>	留鳥	—	—	
123	シジュウカラ科	ヒガラ	<i>Parus ater</i>	留鳥	—	—	
124	シジュウカラ科	ヤマガラ	<i>Parus varius</i>	留鳥	—	—	40
125	シジュウカラ科	シジュウカラ	<i>Parus major</i>	留鳥	—	—	
126	メジロ科	メジロ	<i>Zosterops japonica</i>	留鳥	—	—	
127	ホオジロ科	ホオジロ	<i>Emberiza cioides</i>	留鳥	—	—	40
128	ホオジロ科	ホオアカ	<i>Emberiza fucata</i>	冬鳥	—	—	
129	ホオジロ科	カシラダカ	<i>Emberiza rustica</i>	冬鳥	—	—	
130	ホオジロ科	ミヤマホオジロ	<i>Emberiza elegans</i>	冬鳥	—	—	40
131	ホオジロ科	アオジ	<i>Emberiza spodocephala</i>	冬鳥	—	—	
132	ホオジロ科	クロジ	<i>Emberiza variabilis</i>	冬鳥	絶滅危惧種	—	
133	ホオジロ科	オオジュリン	<i>Emberiza schoeniclus</i>	冬鳥	—	—	40
134	アトリ科	アトリ	<i>Fringilla montifringilla</i>	冬鳥	—	—	
135	アトリ科	カウラヒワ	<i>Carduelis sinica</i>	留鳥	—	—	
136	アトリ科	マヒワ	<i>Carduelis spinus</i>	旅鳥	—	—	40
137	アトリ科	ベニマシコ	<i>Uragus sibiricus</i>	冬鳥	—	—	
138	アトリ科	ウソ	<i>Pyrrhula pyrrhula</i>	旅鳥	—	—	
139	アトリ科	イカル	<i>Eophona personata</i>	冬鳥	—	—	40
140	アトリ科	シメ	<i>Coccothraustes coccothraustes</i>	冬鳥	—	—	
141	ハチオドリ科	スズメ	<i>Passer montanus</i>	留鳥	—	—	
142	ムクドリ科	コムクドリ	<i>Sturnus philippensis</i>	旅鳥	絶滅危惧種	—	40
143	ムクドリ科	ムクドリ	<i>Sturnus cineraceus</i>	留鳥	—	—	
144	カラス科	カケス	<i>Garrulus glandarius</i>	留鳥	—	—	

	科	和 名	学 名	分類	カテゴリー		頁
					京都府 RDB	環境省 RDB	
145	カラス科	ハシボソガラス	<i>Corvus corone</i>	留鳥	－	－	
146	カラス科	ハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos</i>	留鳥	－	－	
147	ハト科	ドバト（帰化鳥）	<i>Columba livia</i>	留鳥	－	－	

鳥 類 オ シ ド リ (鴛鴦)

分 類：カモ科

学 名：*Aix galericulata*

全 長：45cm

◎京都府カテゴリー：絶滅危惧種

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：村上 良博)

解 説：狩猟鳥が多いカモの仲間にあつて、古くから歌に詠まれ、絵画に描かれてきたオシドリも、かつては、オスの銀杏羽と呼ばれる橙色の飾り羽を添えた大名料理としてもてはやされた過去がある。ドログモと称される身近なカルガモに対し、山地の池や溪流で見られ、木の実を好物とする植物食のオシドリは、カモのなかでも一番の美味とされてきた。地味なメスと共にペアで観察されることが多く、「オシドリ夫婦」に名を残すも、つがい相手は毎年替わることが知られている。また、オスの優美な姿も、繁殖期を過ぎるとエクリプスと呼ばれるメスと区別がつかない羽色に変わってしまう。カモ類唯一の「絶滅危惧種」である希少なオシドリは、宇治田原町では11月上旬から4月半ばまで、ため池や田原川でよく観察されている。宇治川流域では、300羽を超える大群も観察されている。

鳥 類 オ オ タ カ (蒼鷹)

分 類：タカ科

学 名：Accipiter gentilis

全 長：♂50cm・♀56.5cm

◎京都府カテゴリー：絶滅危惧種

◎環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類



(撮影：山中 十郎)

解 説：宇治田原町の豊かな自然を実証する環境指準鳥に、オオタカの生息がある。食物連鎖の頂点に位置する猛禽類にあって、夜行性のフクロウとは「時間的棲み分け」を、他のタカ類とは主に餌による棲み分けをしている。キジやカモなどの大型の鳥類やノウサギなどの中型哺乳類を捕食しているオオタカも、オスはメスより若干小さく、キジバトやヒヨドリ、時にアブラコウモリを捕らえているのも観察されている。昔から鷹狩に利用され、羽根を欠損したオオタカは、夏鳥のサシバから「差し羽」を得ていた。かつてエセダカと呼ばれたサシバに、マグソダカと呼ばれていた冬鳥のノスリも、共に身近に見られるタカではなくなっている。オオタカは、国・環境省のレッドデータリストでも「絶滅危惧種」に記載され、宇治田原町では昔から生息が知られ、繁殖も確認されている。

鳥 類 ヤ マ ド リ (山鳥)

分 類：キジ科

学 名： *Phasianus soemmerringi*

全 長：♂125cm・♀55cm

◎京都府カテゴリー：準絶滅危惧種

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岡本 猛)

解 説：日本固有のヤマドリは、その名の通り山地に一年中生息する留鳥で、南山城各地で「山雉(きじ)」や「赤雉」と呼ばれている。オスの特徴的な尾羽は、時に1mに達し、「尾長雉」や「三尺」といった俗称もある。ヤマドリの尾羽は、古くから装飾品や縁起物・魔除けに用いられ、「準絶滅危惧種」の現在も狩猟鳥に指定されている。同じく狩猟鳥である近似種のキジとは、山間部の森林地帯と人里の草原や雑木林に代表される「環境的棲み分け」をしている。宇治田原町では、全域で見られるキジに対し、ヤマドリは鷲峰山や大峰山などの限られた環境でまれに観察されている。一夫多妻のキジに対し、個体数でもはるかに少ないヤマドリは、一夫一妻である。鳴くこともなく、オスは「母衣(ほろ)打ち」と呼ばれる翼を激しく羽ばたき「ドドドッ」という音をたてて求愛する。

鳥 類 ア オ バ ト (緑鳩)

分 類：ハト科

学 名：*Sphenurus sieboldii*

全 長：33cm

◎京都府カテゴリー：絶滅危惧種

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：山中 十郎)

解 説：かつて「山鳩」と呼ばれていたキジバトは、人里に生息地を拡げ、帰化鳥のドバトと共に「都市鳥」の仲間入りをしている。かたや「森鳩」と呼ばれるアオバトは、深山で繁殖し、冬期も里山の丘陵地や山林に生息している。キジバトが主に地上で採食するのにに対し、アオバトは樹上性で木の実を主食とする。また、海岸の岩場に海水を飲むために飛来し、波にさらわれて溺死する個体もいるなど、不思議な習性をもつことでも知られている。狩猟鳥のキジバトと混獲や密猟され、美味なる鳥としても伝えられている。植林された単相な森林には棲まないことから、山林環境の指標鳥としても高ランクにある。今や「絶滅危惧種」にまでなってしまった希少なアオバトも、宇治田原町の山間部では、数羽から30羽ほどの群れを、10月下旬から5月の上旬まで見ることができる。

鳥 類 コノハズク (木葉木菟)

分 類：フクロウ科
学 名：*Otus scops*
全 長：18.5～21.5cm

◎京都府カテゴリー：絶滅寸前種
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：中川 宗孝)

解 説：京都府において最も絶滅の危機に瀕する「絶滅寸前種」の野鳥には、全 8 種類が掲載されている。宇治田原町では、そのうち 4 種類がこれまでに観察され、近年では冬鳥のウズラと旅鳥のコノハズクの記録がある。かつてはよく見られたウズラに対し、まれな旅鳥であるコノハズクの記録は数えるほどしかなかった。やはり「絶滅寸前種」に名前を連ねるブッポウソウに対し、コノハズクは「声の仏法僧」と呼ばれ、特徴ある鳴き声による生息確認が通常である。平成 16 年 5 月 6 日の夕刻に、御栗栖神社の東の森で、渡り途中と思われるコノハズクを、鳴き声で確認した。情報が得られにくい夜行性の希少種・コノハズクも、標識調査では多くの捕獲記録が報告されている。また、まれな確認記録しかない宇治田原町でも、思いのほか多くの個体が飛来している可能性もあり、今後の課題となっている。

鳥 類 フ ク ロ ウ (梟)

分 類：フクロウ科

学 名：*Strix uralensis*

全 長：48～52cm

◎京都府カテゴリー：準絶滅危惧種

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：谷川 智一)

解 説：里山環境にある宇治田原町を代表する野鳥のひとつに、夜の猛禽類のフクロウがいる。食物連鎖の頂点にあるフクロウは、餌となる鳥や小動物が生息する豊かな自然のなかでしか生きていけず、繁殖に適した大木の洞(ろう)の減少など、生息環境の悪化が取りざたされている。めったに姿を見る機会のない夜行性のフクロウ類も、その鳴き声から生息を確認することができる。混同されがちな夏鳥のアオバズクが「ホーッホーッ」であるのに対し、フクロウは「ボロ着て奉公」と聞こえる「ゴロスクホッホー」と鳴く。また、子別れの時期にあたる秋には、「ギャウーッ」という獣のような鳴き声も発する。かつて十指に余るペアが繁殖し、巣間距離も最短で500mという高密度繁殖地帯を誇っていた宇治田原町も、近年は減少傾向にあり、多くの場所で繁殖を確認できなくなっている。

鳥 類 ヤマセミ (山翡翠)

分 類：カワセミ科
学 名： *Ceryle lugubris*
全 長：37.5cm

◎京都府カテゴリー：絶滅危惧種
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：谷川 智一)

解 説：清流のシンボル鳥であるカワセミの仲間に、渓流を生息の地とするヤマセミがいる。白黒のシンプルな鹿の子模様で、大きなくちばしを持つハトほどの大きさのヤマセミは、他の鳥と見誤ることはない。それでも、「1河川1ペア」といわれるほどの希少種で、警戒心も非常に強く、観察できる機会のごく少ない。水中にダイビングし、イワナやモツゴのほか、底棲魚のドンコやドジョウ類も捕らえる。繁殖場所は、外敵のヘビやイタチが侵入できない3m以上の急傾斜の崖に、1m余りの横穴を掘って巣にする。繁殖期間は3月から8月までと長期にわたり、通常4～6個を産卵し、雌雄交代で抱卵する。メスは翼の裏に、オスは胸に朱色の斑紋が入ることで、識別できる。宇治田原町では、宇治川流域や田原川などの河川のほか、ため池でも観察され、毎年巣立ち雖も確認されている。

鳥 類 カワセミ (翡翠)

分 類：カワセミ科

学 名：*Alcedo atthis*

全 長：17cm

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：村上 良博)

解 説：空飛ぶ宝石と称され、翡翠の名をもつカワセミは、かつては「幻の鳥」といわれるほどの希少種だった。日本経済の高度成長に反比例し、全国の河川からカワセミの姿は消えていった。濁った水は餌となる魚の姿を隠し、汚染された川には魚も棲めず、洗剤や油膜はカワセミの天然のウエットスーツを破壊した。さらに、土手に巣穴を掘って繁殖するカワセミにとって、河川改修に伴うコンクリート化が追い打ちをかけ、絶滅が危惧されるまでに激減した。やがて、自然環境が見直され、各地で河川の美化運動が展開された結果、カワセミたちは戻ってきた。たくましく復活した自然保護のシンボル鳥は、環境への適応能力を進化させ、確実に生息域を広げている。宇治田原町では、田原川で同時に4羽のカワセミが標識されたこともあり、当地を代表する野鳥となっている。

鳥 類 ア カ ゲ ラ (赤啄木鳥)

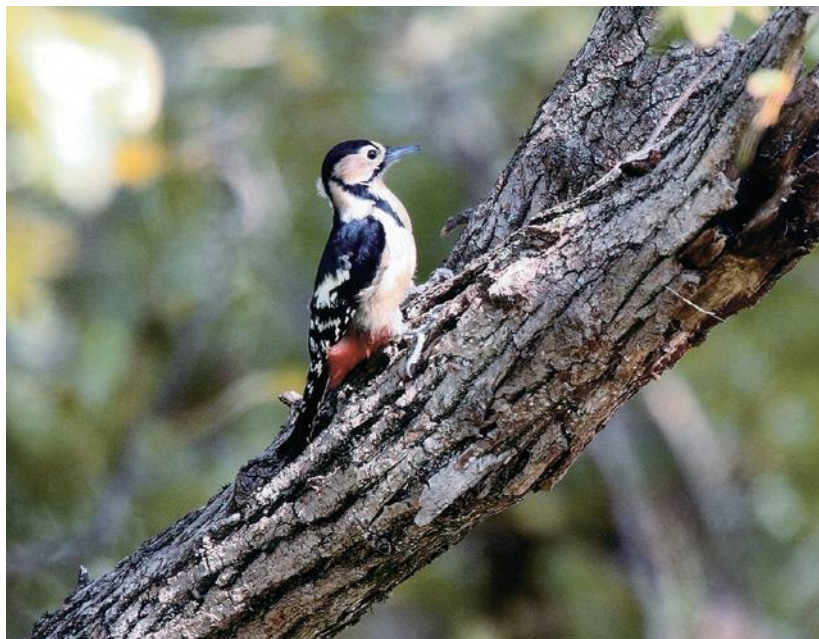
分 類：キツツキ科

学 名：*Dendrocopos major*

全 長：23.5cm

◎京都府カテゴリー：準絶滅危惧種

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：山中 十郎)

解 説：木をつつく・啄(ついば)むに由来するキツツキには、啄木の漢字が当てられている。また、キツツキの仲間は、鳴き声と虫ケラ食の二通りの説から、「ケラ」とも呼ばれている。代表的なアカゲラ、アオゲラ、コゲラでは、それぞれ主として落葉広葉樹林と常緑広葉樹林、人里環境に留鳥として生息し、「環境的棲み分け」を行っている。最も山間部に生息するアカゲラは、ムクドリほどの大きさで、オスは頭部が赤い。豊かな森林環境を実証する環境指準鳥としても高ランクに位置し、「準絶滅危惧種」に指定されている。主食の虫を捕るために樹皮を傷め、樹木に穴を開けて巣をつくるキツツキ類は、一見環境破壊者とも映るものの、健全な森林育成に大きな役割を果たしていることが分かっている。宇治田原町の山林では、「キョッキョッ」と良く通る鳴き声で存在を教えている。

鳥 類

サンコウチョウ（三光鳥）

分 類：ヒタキ科カササギヒタキ亜科

学 名： *Terpsiphone atrocaudata*

全 長：♂44.5cm・♀17.5cm

◎京都府カテゴリー：準絶滅危惧種

◎環境省カテゴリー：－



（撮影：村上 良博）

解 説：「月・日・星・ホイホイホイ」と鳴くことから、三光鳥と呼ばれるバードウォッチャーに人気の高い夏鳥がいる。スズメほどの体に、オスは30cmもの尾羽根を持ち、蝶を思わせるヒラヒラした飛び方で空中の虫を捕らえる。雑木林の代表種とされたサンコウチョウも、急激な個体数の減少と生息地の環境の悪化から、今では里山環境にある宇治田原町でさえ山間部でしか見られなくなった。越冬地が東南アジアであることから、減少の要因にベトナム戦争の枯れ葉剤の影響が指摘されてきた。餌が豊富な密林を奪われ、食物連鎖による体内に蓄積される毒性物質から、多くの鳥や動物たちが人知れず死滅していった。終戦後30年を経て、越冬地の自然も徐々に回復しつつあり、京都でもサンコウチョウが再び雑木林で見られ、「準絶滅危惧種」が解除されることを期待したい。

鳥 類 カイツブリ (鴛)

分類：カイツブリ科
学名：*Podiceps ruficollis*
全長：26cm

◎京都府カテゴリー：準絶滅危惧種
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：村上 良博)

解 説

かつては池や川で普通に見られたカイツブリも、近年は減少傾向にあり、宇治田原町でも身近な水鳥ではなくなってきた。水面から飛び込むような仕草から、鴛の漢名がつけられ、水草や新建材の発砲スチロールなどで造られる「ニオの浮巢」は、和歌や俳句の題材となってきた。ハトよりもやや小さく、水棲生物を餌とする潜水の名手も、水質汚染やため池の減少といった生息環境の悪化から、準絶滅危惧種に記載されるまでになった。

鳥 類 サ サ ゴ イ (笹五位)

分類：サギ科
学名：*Butorides striatus*
体長：52cm

◎京都府カテゴリー：準絶滅危惧種
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岡林 猛)

解 説

サギの仲間のササゴイは、近似種のゴイスギと混同されてきた。かたや狩猟鳥で有害鳥獣駆除の対象であるゴイスギに対し、準絶滅危惧種のササゴイは、近畿版レッドデータブックでも、「絶滅危惧種」指定の希少種である。夏鳥として飛来し、宇治田原町では本来夜行性の本種が、田原川や宇治川流域で魚を採る姿が観察されている。巣立ち若鳥と思われる幼羽の残ったササゴイも観察されており、近隣部で繁殖している可能性も高い。

鳥 類 チュウサギ (中鷺)

分 類：サギ科
学 名：*Egretta intermedia*
全 長：68.5cm

◎京都府カテゴリー：準絶滅危惧種
◎環境省カテゴリー：準絶滅危惧 (NT)



(撮影：中川 宗孝)

解 説

京都府には4種類の白鷺の仲間が生息している。越冬地の南方から飛来する夏鳥のチュウサギでは、京都府のレッドデータブックのほか、近畿版・環境省共々、希少な種として「準絶滅危惧種」に掲載されている。かたや近似種で留鳥のコサギやダイサギ、夏鳥のアマサギは、有害鳥として駆除されている所もある。混同しがちなダイサギとは、大きさのほか、くちばしの幅や切れ込みで判別する。宇治田原町では、一部が越冬もしている。

鳥 類 ミ サ ゴ (鵜)

分 類：タカ科
学 名：*Pandion haliaetus*
体 長：♂54cm・♀64cm

◎京都府カテゴリー：絶滅危惧種
◎環境省カテゴリー：準絶滅危惧 (NT)



(撮影：村上 良博)

解 説

鷹の仲間では珍しいミサゴという魚食性の鳥がいる。空中の一点から狙いを定め、鋭い爪で水の中の魚をワシづかみする豪快なハンティングで、大きなボラなどを捕らえている。本来海鳥であり、海岸の岩棚などに営巣するミサゴが、近年内陸部の河川にも進出してきた。海が荒れ、漁ができない冬場に限られていた観察記録も、1年を通して見られるようになり、繁殖定着が期待されている。宇治田原町では、主に宇治川域で観察されている。

鳥 類 ハイ タ カ (灰鷹)

分 類：タカ科
学 名：Accipiter nisus
全 長：♂31.5cm・♀39cm

◎京都府カテゴリー：準絶滅危惧種
◎環境省カテゴリー：準絶滅危惧 (NT)



(撮影：田中 寿樹)

解 説

かつてハイタカは小鷹と呼ばれ、オオタカやさらに小型の雀鷹と呼ぶツミと区別されてきた。タカ類の多くに見られる通り、メスがオスより大きい。ハイタカのメスはオオタカのオスと、オスはツミのメスと同じくらいの大きさで混同されやすく、眉斑や飛翔時の翼の先端の羽の形と枚数で識別する。冬鳥として渡来し、主に中型の鳥などを捕らえ、他の猛禽類と餌による棲み分けをしている。宇治田原町は渡りのルート上にあり、秋季によく観察されている。

鳥 類 ノ ス リ (野鷹)

分 類：タカ科
学 名：Buteo buteo
全 長：54cm

◎京都府カテゴリー：準絶滅危惧種
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：山中 十郎)

解 説

朝鮮語の鷹・スリを表すとされるノスリは、平地の農耕地や河川敷、山里から森林までのあらゆる環境に生息し、かつては「馬糞鷹」と呼ばれていた。最も身近な鷹であったノスリも、馬糞同様に見られなくなり、「準絶滅危惧種」として保護が求められるまでに減少している。それでも、本来冬鳥として渡来するノスリが、宇治田原町では繁殖期にあたる季節にも観察されており、兵庫・大阪に次ぐ関西３例目の繁殖記録が期待されている。

鳥 類 丰 ジ (雉子)

分 類 : キジ科
学 名 : *Phasianus colchicus*
体 長 : ♂80cm ・ ♀60cm

◎京都府カテゴリー：－
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：山中 十郎)

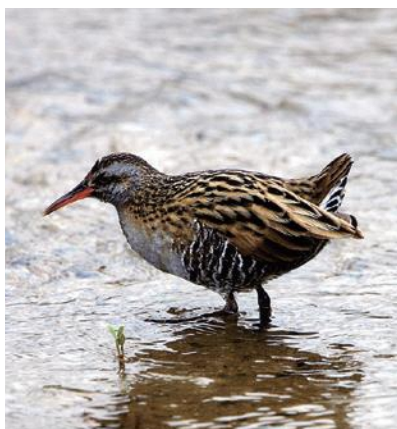
解 説

古くから身近な野鳥として親しまれてきたキジは、狩猟鳥であり、日本固有の学術的貴重種であるという相反する面を併せ持っている。オスは美しい羽と勇壮な「ケッケーン」との鳴き声から、「国鳥」に指定されている。また、本種は平地から山間部まで広域に分布している。かつては、数亜種に分類されていたが、放鳥の弊害によって交雑が進んでいるとの報告もある。宇治田原町ではほぼ全域に生息し、初夏には雛鳥を連れた姿もよく観察されている。

鳥 類 ク イ ナ (水鶏)

分 類 : クイナ科
学 名 : *Rallus aquaticus*
全 長 : 29cm

◎京都府カテゴリー：絶滅危惧種
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：山中 十郎)

解 説

俳句の夏の季語にある「水鶏」と書くクイナは、水田地帯で繁殖するヒクイナのことであり、本家のクイナは越冬するために飛来する冬鳥である。河川や池などの湿地に生息するも、警戒心の強い隠遁（いんとん）性の為、その姿はめったに見られない。クイナは、クイナ類の特徴である大きな脚と、赤っぽいクチバシに腹部にシマウマ模様のある、ハトよりやや小さい水鳥である。ため池や良好な湿地が多い宇治田原町では、主に早朝と夕刻によく観察されている。

鳥 類 ヒ ク イ ナ (緋水鶏)

分 類 : クイナ科
学 名 : *Porzana fusca*
全 長 : 22.5cm

◎京都府カテゴリー：絶滅危惧種
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：山中 十郎)

解 説

クイナと混同されてきた夏鳥のヒクイナは、水田や湿地で繁殖し、「キョッキョッキョ」と次第に早くなる鳴き声から、「戸叩き」と呼ばれ、昔から親しまれてきた。共に「絶滅危惧種」の冬鳥のクイナとの違いは、生息時期が異なる「季節的棲み分け」をし、大きさも 22 cm とずっと小さく、赤茶色の単色羽をしていることである。宇治田原町では、田植えのころの夕方と早朝によく鳴き声が聞かれ、夏場には雛鳥を連れた姿も観察されている。

鳥 類 タ マ シ ギ (玉鳴)

分 類 : タマシギ科
学 名 : *Rostratula benghalensis*
全 長 : 23cm

◎京都府カテゴリー：絶滅危惧種
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：中島 昭)

解 説

梅雨を迎える頃の水田地帯で、「コォーツ、コォーン」と響く鳴き声は、一妻多夫で知られるメスのタマシギのオスへの求愛である。繁殖活動を逆転し、羽色も地味なオスが、抱卵から子育てを担当する夏鳥のタマシギは、水田を代表する野鳥のひとつであった。絶滅危惧種のタマシギは、減少が非常に懸念されており、かつての鳴き声も聞かれなくなってきたが、宇治田原町では渡りの時期に観察も多く、少数繁殖し、越冬する個体もいることが判明した。

鳥 類 ム ナ グ ロ (胸黒)

分 類：チドリ科
学 名： *Pluvialis dominica*
全 長：24cm

◎京都府カテゴリー：準絶滅危惧種
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：山中 十郎)

解 説

顔から腹まで、名は体を表すチドリの仲間のムナグロは、北方で繁殖し、南方で越冬する旅鳥の代表種として、渡りの途中に羽を休めている姿を観察することができる。ムクドリほどの大きさで、水田から湿地のほか、畑や草原などに、数羽からときに100羽を超える大群で飛来する。繁殖地に向かう春季に対し、秋季は滞在期間も長く、胸が黒くない幼鳥も見られる。「準絶滅危惧種」の当種は、宇治田原町では水田で餌を採る姿がよく観察できる。

鳥 類 イ ソ シ ギ (磯鳴)

分 類：シギ科
学 名： *Tringa hypoleucos*
全 長：20cm

◎京都府カテゴリー：準絶滅危惧種
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：山中 十郎)

解 説

最も身近なシギの仲間に、全長20cmと小型のイソシギがいる。海辺の磯はもちろん、内陸部の河川や湖沼でも、冬期には普通に見ることができるが、今や絶滅が危惧されるまでになった。北極圏で繁殖し、南方で越冬するのが大半のシギ類にあって、イソシギは北日本でも繁殖している。冬鳥として渡来する当種が、夏場にも観察されるようになり、木津川河川敷では繁殖も確認されている。宇治田原町でも、繁殖定着が期待されている。

鳥 類 ヤ マ シ ギ (山嶋)

分類：シギ科
学名：*Scolopax rusticola*
全長：34cm

◎京都府カテゴリー：絶滅危惧種
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：谷川 智一)

解 説

タシギと共に狩猟鳥に指定されているヤマシギは、希少な「絶滅危惧種」であり、半夜行性であることから、その姿を見ることはめったにない。「フタシギ」の俗称がある丸々と太ったハトほどの大きさのヤマシギは、「シギ団子」にされる泥臭いタシギに対し、美味なる鳥肉として珍重されてきた歴史がある。食習慣が途絶えてなお、減少傾向にある冬鳥のヤマシギも、越冬に適した環境の宇治田原町では、毎年何力所かで生息が確認されている。

鳥 類 ホ ト ト ギ ス (不如帰)

分類：ホトトギス科
学名：*Cuculus poliocephalus*
全長：27.5cm

◎京都府カテゴリー：－
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：村上 良博)

解 説

「特許許可局」と鳴くカッコウの仲間のホトトギスは、子育てを放棄した「托卵鳥」として知られている。繁殖地では、体長も半分のウグイスやホオジロなどの巣に托卵し、それぞれ卵の色や模様を似せる進化を果たしてきた。「環境指準鳥」として最高のランクにあり、南山城地方では主に山間部に飛来し、初夏には夜間でも鳴き声を確認することができる。宇治田原町では、渡り時に長期にわたって滞在しているが繁殖は確認されていない。

鳥 類

ヒレンジャク・キレンジャク（下）（緋連雀）

分類：レンジャク科
学名：*Bombycilla japonica*
全長：17.5cm

◎京都府カテゴリー：－
◎環境省カテゴリー：－



（撮影：村上 良博）

解 説

キレンジャクとともに「宿り木鳥」と呼ばれるヒレンジャクは、ヤドリギなどの実を好んで食べ、種子を運ぶことに由来している。やや大きいキレンジャクとは尾羽の色で区別し、生息域も極東アジアの一部に限られるヒレンジャクは、世界的な希少鳥類の一種である。宇治田原町では、かつて越冬個体群が確認されていたが、現在は旅鳥に改められている。春の渡り時によく見られ、「チュリチュリ」「ヒーッ」と鳴く賑やかな声が聞かれる。

鳥 類

カワガラス（河鳥）

分類：カワガラス科
学名：*Cinclus pallasii*
全長：22cm

◎京都府カテゴリー：－
◎環境省カテゴリー：－



（撮影：山中 十郎）

解 説

黒褐色の羽色から、鳥の名を持つカラスとは程遠いカワガラスは、水に潜って川底の水棲昆虫を捕らえる。餌が豊富で、水がきれいな川を生息地とすることから、環境指標生物としても高ランクにある。「ビッビッ」と鳴きながら水面近くを飛び、川の中の岩に止まっては翼をパッパッと半開きにすることから、他種と見誤ることはない。宇治田原町では、田原川をはじめとする河川で生息確認されており、良好な環境が裏付けられている。

鳥 類 コ ル リ (小瑠璃)

分 類：ヒタキ科ツグミ亜科
学 名：*Erithacus cyane*
全 長：14cm

◎京都府カテゴリー：絶滅危惧種
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：中島 昭)

解 説

瑠璃色をした「青い鳥」には、コルリとオオルリがいる。オオルリが樹上性の夏鳥であるのに対し、旅鳥のコルリは地上性のツグミの仲間であり、体型で区別できる。またコルリは、観察記録もずっと少なく希少性も高い。春の渡り時には、「ピョンツルルゥ」とさえずる声が聞かれ、秋季にはメスと同じオリーブ褐色をしたその年生まれ若鳥も見られる。宇治田原町では、笹や下草がある山間部の林のほか、林縁部の畑などでも観察されている。

鳥 類 ト ラ ヅ グ ミ (虎鶉)

分 類：ヒタキ科ツグミ亜科
学 名：*Turdus dauma*
全 長：29.5cm

◎京都府カテゴリー：準絶滅危惧種
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：村上 良博)

解 説

「1 尺ツグミ」とよばれる虎斑模様的大型ツグミは、冬鳥として山林や雑木林に渡来し、まれに平地の公園や墓地などにも出没する。希少なトラツグミの生息環境に適した宇治田原町では、林の中を低く飛ぶ姿や、林縁部の茶畑などで採食する姿を見ることができる。春の渡りの季節には、妖怪・ヌエ伝説となった「ヒーッ、ヒーッ」と口笛のような細い鳴き声が夜間に聞かれる。夏期の観察記録もあり、近辺での繁殖記録が期待されている。

鳥 類 クロツグミ (黒鶇)

分 類：ヒタキ科ツグミ亜科

学 名： *Turdus cardis*

全 長：21.5cm

◎京都府カテゴリー：準絶滅危惧種

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：谷川 智一)

解 説

かつて密猟の憂き目にあい、「ヤキトリ」の代名詞とされたツグミ類は、年間 300 万羽にものぼるといわれてきた。冬鳥の代表種である本家のツグミに対し、クロツグミは日本で繁殖する夏鳥である。南山城地域では、春と秋の渡りの季節にまれに観察されるだけの希少な「準絶滅危惧種」であり、記録も山間部に限られている。宇治田原町はクロツグミの渡りのルート上にあり、春季には「キョロイ」と続ける特徴ある長いさえずりが聞かれる。

鳥 類 オオヨシキリ (大葎切)

分 類：ヒタキ科ウグイス亜科

学 名： *Acrocephalus arundinaceus*

全 長：18.5cm

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：村上 良博)

解 説

鳴き声から「行行子」や、「ふくら雀」と呼ばれてきたオオヨシキリは、地味な羽色をしたスズメほどの大きさの夏鳥で、一夫多妻で知られている。繁殖地となる葎原の減少から、生息域が限られ、個体数も減少傾向にある。里山環境の宇治田原町でも、大声で鳴くオオヨシキリの存在は昔から知られ、河川やため池などに点在する葎原で繁殖してきた。年によつての飛来数に増減があり、田原川の河川敷では増水による繁殖失敗例も多い。

鳥 類 コサメビタキ (小鮫鵜)

分類：ヒタキ科ヒタキ亜科
学名： *Muscicapa latirostris*
全長：13cm

◎京都府カテゴリー：絶滅危惧種
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：田中 寿樹)

解 説

地味で名も知らぬ野鳥のなかにも、絶滅が危惧される鳥たちがいる。コサメビタキという、およそバードウォッチャー以外その名を知らぬスズメよりやや小さい旅鳥もそんな鳥の一種である。良く似たサメビタキは胸が白くなく、エゾビタキの胸には縦斑が入ることで区別される。北で繁殖を終えた彼らは、巣立ちした若鳥共々、南方の越冬地をめざす秋の渡り期によく観察される。渡りの中継地にあたる宇治田原町では、春季にもよく見られる。

鳥 類 メ ジ ロ (目白)

分類：メジロ科
学名： *Zosterops japonica*
全長：11.5cm

◎京都府カテゴリー：－
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：柏木 勢二)

解 説

宇治田原町の鳥であるメジロは、身近な野鳥として和歌山県や長岡京市など、全国各地のシンボル鳥として親しまれている。椿や梅、桜などに飛来し、花の蜜を吸うほか、昆虫の卵や幼虫なども捕食する。冬場には、餌台のミカンやオレンジジュースに集まり、愛鳥家たちの目を楽しませている。「長兵衛・忠兵衛・長忠兵衛」と聞き成す複雑な鳴き声から、鳴鳥として飼育されてきた長い歴史があり、現在も違法な密猟や飼育が後を絶たない。

鳥 類 ク ロ ジ (黒鷯)

分 類：ホオジロ科
学 名： *Emberiza variabilis*
全 長：17cm

◎京都府カテゴリー：絶滅危惧種
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：谷川 智一)

解 説

よく知られたホオジロの仲間にも、希少なクロジという冬鳥がいる。スズメよりやや大きく、薄墨色をしたオスに対し、地味なメスは他のホオジロ類に似ているが、尾羽の外側が白くないことで区分できる。冬期によく茂った林床で採餌する姿が見られるほか、渡りの季節には農耕地や河川敷など、開けた所でも観察される。ホオジロ類唯一の絶滅危惧種、クロジは、宇治田原町では毎年9月下旬に飛来し、梅の季節を境に観察頻度も減少する。

鳥 類 コ ム ク ド リ (小椋鳥)

分 類：ムクドリ科
学 名： *Sturnus philippensis*
全 長：19cm

◎京都府カテゴリー：絶滅危惧種
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：山中 十郎)

解 説

北日本で繁殖し、フィリピンなどで越冬する旅鳥のコムクドリは、かつては渡りの季節によく観察された。留鳥のムクドリよりも、ひと回り小さく、桜の季節に数羽から数十羽の群れが飛来し、賑やかに「キュルキュルリ」と鳴いては「ギャーッ」との警戒音を発して慌ただしく飛び去る姿も、近年はめっきり見ることもなくなった。宇治田原町では、秋季の観察記録は継続されているものの、春季の記録は途絶えがちで、不特定な神出鬼没型となっている。

は 虫 類

【調査結果の概要】

は虫類・両生類の調査では、宇治田原町における地理的要因・環境的要因などから、生息する可能性のある種をリストアップし、マスコミ報道記録や地元住民からの情報を参考にした。こうした事前の文献調査・聴取調査に沿った野外調査では、生息の証となる生体の捕獲を目的とし、ヘビ類の抜け殻やカエルのお卵塊といった生息を裏付けるフィールドサイン・痕跡の発見に努めた。

その結果、は虫類ではカメ類4種、トカゲ類3種、ヘビ類8種の全15種類をリストアップし、そのうち13種類の生息を確認した。カメ類では、クサガメとイシガメが河川やため池に広く分布し、スッポンも宇治川で確認された。

外来種のミシシippアカミミガメ、幼体のミドリガメも確認されているが、繁殖は不明である。トカゲ類では、ニホントカゲ、カナヘビ、ニホンヤモリが普通に見られた。ヘビ類では、京都府内で正式な生息記録が無いとされてきたタカチホヘビを捕獲確認した。シマヘビ、アオダイショウは広域で見られ、発見がまれなヒバカリも捕獲確認されている。その他、過去に於いてジムグリ捕獲記録や外来種のカミツキガメが田原川で見つかり、保護飼育されている記録が得られた。

今後の課題として、ミシシippアカミミガメの繁殖定着と外来クサガメの侵入に留意し、在来種のカメの生息に影響のない水辺環境を守る必要がある。直接的な保護策を講じることができないヘビ・トカゲの仲間では、食物連鎖の高位にある肉食性動物として、下層の餌となる動物たちの生息を把握し、間接的に生息環境を守る必要が求められる。

	科	和 名	学 名	カテゴリー		頁
				京都府 RDB	環境省 RDB	
1	イシガメ科	クサガメ	<i>Chinemys reevesii</i>	要注目種	—	42
2	イシガメ科	ニホンイシガメ	<i>Mauremys japonica</i>	—	—	43
3	イシガメ科	ミシシippアカミミガメ	<i>Trachemys scripta elegans</i>	要注目外来種	—	43
4	スッポン科	スッポン	<i>Pelodiscus sinensis</i>	要注目種	—	
5	ヤモリ科	ヤモリ	<i>Gekko japonicus</i>	—	—	
6	トカゲ科	ニホントカゲ	<i>Eumeces latiscutatus</i>	要注目種	—	
7	トカゲ科	ニホンカナヘビ	<i>Takydromus tachydromoides</i>	—	—	
8	ナミヘビ科	タカチホヘビ	<i>Achalinus spinalis</i>	要注目種	—	44
9	ナミヘビ科	シマヘビ	<i>Elaphe quadrivirgata</i>	要注目種	—	45
10	ナミヘビ科	アオダイショウ	<i>Elaphe climacophora</i>	要注目種	—	
11	ナミヘビ科	ヒバカリ	<i>Amphiesma vibakari vibakari</i>	要注目種	—	44
12	ナミヘビ科	ヤマカガシ	<i>Rhabdophis tigrinus tigrinus</i>	要注目種	—	
13	クサリヘビ科	マムシ	<i>Gloydus blomhoffii</i>	要注目種	—	45

は 虫 類

クサガメ (日本在来種) (臭亀・草亀)

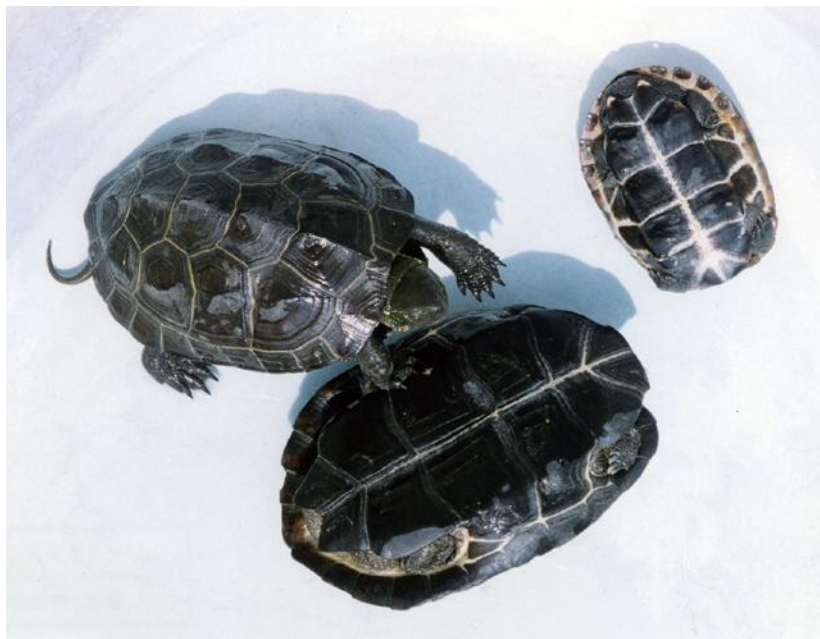
分 類：イシガメ科

学 名： *Chinemys reevesii*

全 長：♂20cm・♀30cm

◎京都府カテゴリー：要注目種

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：中川 宗孝)

解 説：在来のクサガメ、イシガメ、スッポンの3種のうち、平地から丘陵地まで、最も広く分布するクサガメは、ドロガメの俗称で呼ばれてきた。名前の由来には、捕らえると異臭を発することと顔の唐草模様によることの2通りがある。背中にキールと呼ばれる三本の隆起があることで見分けられ、甲らの黄色い縁取りや目が黄色いことでもイシガメと区分できる。両種ともに甲らに刻まれる年輪から年齢が推測でき、長寿といえど寿命はせいぜい数十年といわれている。オスは20cm、メスは30cmにまでなり、年を経るとメスは頭が肥大化し、オスはメラニズム個体と呼ばれる黒化が進んで真っ黒になる。ペットとして大陸産のクサガメが、金線亀や赤亀の名で大量輸入され続け、野生化したものが日本在来種のクサガメと交雑する「DNA 汚染」の問題が取りざたされている。

は虫類

ニホンイシガメ（日本石亀）

分類：イシガメ科
学名：*Mauremys japonica*
全長：♂14cm・♀22cm

◎京都府カテゴリー：－
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：中川 宗孝)

解 説

日本固有のイシガメは、頭と甲らの色が黄土色で、目と腹が黒く、後部がギザギザであることで識別できる。オス 14 cm、メス 22 cmと雌雄差があり、オスは尻尾の付け根が太い。かつては平地から山地まで広く分布していたが、水質汚染とアカミガメ侵入などによる生息環境の悪化から、個体数は確実に減少している。南山城の各地で、甲らに子どもの名前を書き、お酒やお米、昆布などを食べさせて放生した風習も今は昔となっている。

は虫類

ミシシippアカミミガメ（ミシシipp赤耳亀）

分類：イシガメ科
学名：*Trachemys scripta elegans*
全長：♂20cm・♀27cm

◎京都府カテゴリー：要注目外来種
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：中川 宗孝)

解 説

ペットのミドリガメとして、北米原産のアカミミガメの仔亀を輸入し続けて半世紀が経った。成長するに伴って狂暴となり、鮮やかな緑色からくすんだ褐色となる外来のカメは、遺棄されても強い生命力で生き抜き、日本中の池や河川に定着した。側頭部が赤い当種には、ミシシippなど数亜種がいるが、個体変異も多く、日本では区別がつかない程雑種化が進んでいる。宇治田原町では、成体・仔亀とも少数が捕獲確認されたが、繁殖は不明。

分 類：ナミヘビ科
学 名：*Achalinus spinalis*
全 長：30cm～60cm

◎京都府カテゴリー：要注目種
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：中川 宗孝)

解 説：タカチホヘビ、シロマダラ、ジムグリの3種は、限られた環境で隠遁（いんとん）生息する夜行性のため、情報の不足から京都府内における正式な生息記録がないヘビとされてきた。宇治田原町では、これまでにジムグリの捕獲記録とタカチホヘビと思われるへい死体（れき死）の未公認記録があり、シロマダラを含め3種類の珍蛇が生息している可能性が高いものと考えられた。そして、平成16年8月に、タカチホヘビ2匹が捕獲確認された。背中に1本黒い筋が入る小型のヘビで、全長は30～55cm、鱗と鱗が重なり合わず、地中生活に適応した小さな頭も特徴のひとつである。写真のヒバカリの幼蛇は、やはり地中性のジムグリと混同されがちであるが、頭の形から両種を区分することができる。生息が実証された要注目種・タカチホヘビの希少性は、「絶滅危惧種」ランクにある。

は虫類

シマヘビ・カラスヘビ（縞蛇・烏蛇）

分類：ナミヘビ科

学名：*Elaphe quadrivirgata*

全長：8cm～200cm

◎京都府カテゴリー：要注目種

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：脇坂 英弥)

解 説

もっとも普通に見られるシマヘビは、水田から山地にまで生息する。毒は無いものの、気性が荒くすぐに咬みつこうとする。宇治田原町では、カラスヘビと呼ばれる色素異常の黒化のシマヘビがよく見られる。同じくカラスヘビには、有毒のヤマカガシの黒化個体もあり、野外観察での識別は困難も、側頭部や顎の光沢、鱗の配列などから両種を区別することができる。これら京都府内に生息する全種のヘビが、「要注目種」に指定されている。

は虫類

マ ム シ（蝮）

分類：クサリヘビ科

学名：*Gloydus blomhoffii*

全長：40cm～650cm

◎京都府カテゴリー：要注目種

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：山中 十郎)

解 説

日本固有の毒蛇として知られ、あらゆる環境に生息するマムシも、減少傾向にある「要注目種」である。全長 40～65 cm で太短く、銭型斑紋と三角形をした頭で識別できる。卵胎生で、4～6 匹産まれる全長 18 cm ほどの仔蛇も、尾の先が橙色であることでマムシと判る。昔から薬用としての利用価値が高く、特に赤色型の「赤マムシ」が好まれた。マムシ酒の他、生血や生き胆（心臓・たんのう）に、皮をはいで、日乾しした骨肉も食されてきた。

両 生 類

【調査結果の概要】

両生類の調査でも、は虫類同様、文献・聴取調査による情報を参考に、野外での生体の捕獲確認とフィールドサインの発見に努めた。

その結果、両生類ではサンショウウオ類 5 種、カエル類 14 種の全 19 種類をリストアップし、そのうち 15 種類の生息を確認した。サンショウウオの仲間では、イモリを多数、広範囲で生息確認しているほか、山間の渓流ではヒダサンショウウオを、湿地などの止水地ではカスミサンショウウオを捕獲確認すると共に、卵嚢と幼生も確認した。

カエル類では、モリアオガエル、シュレーゲルアオガエル、カジカガエルのアオガエル 3 種類を、それぞれ森林、水田、渓流で確認した。アマガエルは広域で数多く生息確認しているが、ヒキガエルの仲間は確認できなかった。アカガエルの仲間では、山間の渓流にタゴガエル、丘陵の湿地にヤマアカガエル、平地にはニホンアカガエルを生息確認し、水田地帯にはトノサマガエル、ツチガエル、ヌマガエルが多くみられ、局地的にダルマガエルの生息が確認できた。

今後の課題として、府内に於いても生息地が限定されつつあるヒダサンショウウオとカスミサンショウウオの保護のため、繁殖環境の保全を目標とした継続的調査が求められる。安易な飼育や薬用目的といった捕獲の禁止のほか、外敵やウシガエルなどの捕食者の侵入に留意し、カジカガエルや「絶滅寸前種」のダルマガエルともども、生息環境の監視と具体的な保全対策が求められている。

	科	和 名	学 名	カテゴリー		頁
				京都府 RDB	環境省 RDB	
1	サンショウウオ科	カスミサンショウウオ	<i>Hynobius nebulosus</i>	絶滅寸前種	地域個体群	47 48
2	サンショウウオ科	ヒダサンショウウオ	<i>Hynobius kimurae</i>	準絶滅危惧種	—	47 48
3	イモリ科	ニホンイモリ	<i>Cynopus pyrrhogaster</i>	要注目種	—	
4	アマガエル科	ニホンアマガエル	<i>Hyla japonica</i>	—	—	50
5	アカガエル科	ニホンアカガエル	<i>Rana japonica</i>	要注目種	—	50
6	アカガエル科	タゴガエル	<i>Rana tagoi tagoi</i>	—	—	
7	アカガエル科	ヤマアカガエル	<i>Rana ornativentris</i>	要注目種	—	
8	アカガエル科	トノサマガエル	<i>Rana nigromaculata</i>	要注目種	—	
9	アカガエル科	ダルマガエル	<i>Rana porosa brevipoda</i>	絶滅寸前種	絶滅危惧Ⅱ類	49
10	アカガエル科	ツチガエル	<i>Rana rugosa</i>	要注目種	—	51
11	アカガエル科	ヌマガエル	<i>Rana limnocharis</i>	要注目種	—	
12	アカガエル科	ウシガエル	<i>Rana catesbeiana</i>	要注目外来種	—	51
13	アオガエル科	シュレーゲルアオガエル	<i>Rhacophorus schlegelii</i>	要注目種	—	52
14	アオガエル科	モリアオガエル	<i>Rhacophorus arboreus</i>	要注目種	—	52
15	アオガエル科	カジカガエル	<i>Buergeria buergeri</i>	要注目種	—	

両生類

カスミサンショウウオ (ヒダサンショウウオ・下)

分類：サンショウウオ科

学名：*Hynobius nebulosus*

全長：♂8.5~10.5cm・♀9~10cm

◎京都府カテゴリー：絶滅寸前種

◎環境省カテゴリー：地域個体群（LP）



(撮影：中川 宗孝)

解説：全長7～12cmで、尾の上下に黄色っぽい筋があることで見分けられるカスミサンショウウオは、かつて平地から丘陵地の水田や湿地に広く生息していた。同じくアカハラと呼ばれるイモリと共に、身近な両生類の代表として知られる当種も、生息環境の悪化によって分布域を狭められている。生息地の移動が限定される両生類にとって、開発による直接的な被害と、圃場整備などによる影響は大きい。コンクリートで舗装された水路やため池など、隔離された環境での繁殖は難しく、今日の危機的な個体数減少を招いている。宇治田原町では、水田と湿地、池において、カスミサンショウウオの成体と幼生のほか、卵のうと呼ばれる卵塊を確認することができた。聴取調査から、本来夜行性の当種も繁殖期にあたる2～5月には数多く目撃されていることが分かった。

両生類

カスミサンショウウオ・卵のう（霞山椒魚）

分類：サンショウウオ科

学名：*Hynobius nebulosus*

全長：♂8.5~10.5cm・♀9~10cm

◎京都府カテゴリー：絶滅寸前種

◎環境省カテゴリー：地域個体群（LP）



（撮影：脇坂 英弥）

解 説

カスミサンショウウオの産卵は、2月の寒い時期から始まるとされ、流れのない湿地や水田、池などにコイル状の卵塊を産む。他のサンショウウオとは産卵場所の環境の違いで、生息地が重なるイモリとは単卵を産み付けることで区別できる。また、ヒキガエルの卵塊はヒモ状で、卵数もはるかに多い。宇治田原町では、3ヶ所の異なる環境で確認できたが、生息地が局所的であり、絶滅指標最高ランクにある絶滅寸前を実証する結果となった。

両生類

ヒダサンショウウオ・卵のう（飛騨山椒魚）

分類：サンショウウオ科

学名：*Hynobius nebulosus*

全長：♂12cm・♀13cm

◎京都府カテゴリー：準絶滅危惧種

◎環境省カテゴリー：－



（撮影：中川 宗孝）

解 説

止水性のカスミサンショウウオに対し、流水性のヒダサンショウウオは、丘陵地の渓流を代表する環境指標の高い両生類である。宇治田原町では、昔から「黒焼き」などの薬用にされてきた当種も、近年は生息地・個体数とも激減傾向にある。3～4月ごろが産卵期で、渓流の岩床に卵のうと呼ばれる袋を生み付ける。カスミサンショウウオがコイル状であるのに対し、バナナ状で光沢があり、丈夫で卵数も少ないことで区別することができる。

両生類

ダルマガエル（達磨蛙）

分類：アカガエル科

学名：*Rana porosa brevipoda*

全長：♂3.5～7.5cm・♀4.5～8.5cm

◎京都府カテゴリー：絶滅寸前種

◎環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU）



（撮影：竹内 康）

解説：南山城地方の水田では、昔から白と青（緑）と茶色のトノサマガエルが生息するといわれてきた。そのなかでも、最も数多く見られた小型の茶色タイプがダルマガエルである。トノサマガエルと混同され、雌雄の白・緑タイプより多いとされてきた当種は、ダルマ名に由来する後ろ足が短いズングリ型で、黒斑模様が水玉のように離れ、鼻先から背中にかけての中央線がないというトノサマガエルとの相違点がある。体色での雌雄差はなく、オス5cmに対しメスは6cmの体長差が見られる。近年、絶滅が危惧されるまでに激減した要因には、農薬の影響と水田の圃場整備や農業の変化などが挙げられる。水路のコンクリート化によって移動が阻まれ、ため池や湿地を必要としなくなった乾田化した生息環境の悪化に加え、ウシガエルの侵入による駆逐、トノサマガエルとの交雑問題まで浮上している。

両生類

ニホンアマガエル (色素異常青色個体) (日本雨蛙)

分類：アマガエル科
学名： *Hyla japonica*
全長：2~4cm

◎京都府カテゴリー：－
◎環境省カテゴリー：－



(提供：洛南タイムス社)

解 説

ほとんどが絶滅の危機にある両生類のなかで、唯一指定のないのがアマガエルである。僅か 3 cm の愛らしい姿も、大きなチョウやトンボなどを捕食する名ハンターと、目に入ると炎症を起こす毒を皮膚から分泌する「危険な生物」の一面を持っている。普段は黄緑色も、周りに合わせて体色変化し、冬眠時には雲形模様の灰褐色になる。平成 16 年 8 月宇治田原町で酸性雨の影響と囁かれる色素異常の青いアマガエルが発見されて話題となった。

両生類

ニホンアカガエル (日本赤蛙)

分類：アカガエル科
学名： *Rana japonica*
全長：3~7.5cm

◎京都府カテゴリー：要注目種
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：脇坂 英弥)

解 説

宇治田原町では、主な生息地として平地の水田で見られるニホンアカガエル、丘陵地の湿地に生息するヤマアカガエル、山地の溪流に生息するタゴガエルの 3 種類のアカガエルの仲間が環境的棲み分けをしている。かつて南山城地方で広く見られたニホンアカガエルの生息地も、現在は局所的な島状分布となってきている。分布が重なるヤマアカガエルとは、目の後方に走る線が平行で、のどに黒斑がないことなどで見分けることができる。

両生類 ツチガエル (土蛙)

分類：アカガエル科
学名：*Rana rugosa*
全長：♂3～5cm・♀4.5～6cm

◎京都府カテゴリー：要注目種
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：脇坂 英弥)

解 説

イボガエルの名で知られるツチガエルは、捕まると皮膚から臭い毒液を出し、『触るとイボができる』と伝えられてきた。大きさはオス3～5cm、メス4～6cmで、市街地の池や川から山地の溪流まで、幅広い水辺環境に生息する最も身近なカエルのひとつである。一度に二千個以上もの卵を産み、親が冬眠するのに対し、オタマジャクシのまま冬を越す。よく似たヌマガエルとは、イボが少なくて腹部が白く、両目を結ぶV字模様で区別できる。

両生類 ウシガエル・食用ガエル (牛蛙)

分類：アカガエル科
学名：*Rana catesbeiana*
全長：10～18cm

◎京都府カテゴリー：要注目外来種
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：中川 宗孝)

解 説

牛の鳴き声に由来する別名食用ガエルのウシガエルは、1918年に北米から輸入されたものの、日本人の舌には合わず養殖業も成りたたなかった。全長18cmにもなり、動くものならなんでも捕食する強い生命力で、全国各地に分布を広げていった。帰化生物を代表するウシガエルは、共食いをするどう猛な性質から、在来のカエルや水棲生物を駆逐する脅威の存在となっている。宇治田原町にも生態系を乱す環境インベーダーは深く根付いている。

両生類 シュレーゲルアオガエル（シュレーゲル青蛙）

分類：アオガエル科
学名：*Rhacophorus schlegelii*
全長：♂3～4cm・♀4～5.5cm

◎京都府カテゴリー：要注目種
◎環境省カテゴリー：－



（撮影：脇坂 英弥）

解 説

シュレーゲルアオガエルは、樹上に産卵するモリアオガエルに対し、水田の畦などに泡状の卵塊を産みつける。オスの喉が黒っぽいことから、雌雄判別は容易である。オスは3～4cm、メスは4～5cmと小型で、混同されやすいアマガエルとは目の後ろに黒い斑紋がないことで、モリアオガエルとは目の虹彩が赤くなく金色であることで両種を区別できる。日本固有の種で、繁殖期の鳴き声は古くから里山の風物詩として人々に親しまれてきた。

両生類 モリアオガエル（森青蛙）

分類：アオガエル科
学名：*Rhacophorus arboreus*
全長：♂4～6cm・♀6～8cm

◎京都府カテゴリー：－
◎環境省カテゴリー：－



（提供：洛南タイムス社）

解 説

日本固有のモリアオガエルは、水辺に垂れ下がった木の枝に、綿アメのような泡に包まれた卵塊を産み付けることで知られ、全国各地で繁殖地が天然記念物の指定を受けている。森林性で単独生活する当種は、オスが4～6cmであるのに対し、メスは6～8cmとかなりの雌雄差がある。宇治田原町では他にシュレーゲルアオガエルとカジカガエルの生息も確認されており、共に豊かな自然環境を実証する環境指標の高いアオガエルの仲間である。

淡水魚類

【調査結果の概要】

十数年前から、地元の小学生たちを主に河川調査を実施してきましたが、ポイ捨てごみや家庭雑排水の流入が目につくわりには、生息する魚類の種類が水質の良い場所を好む種類が多かった。

これは、本・支流を問わず川底からの湧き水が豊富で、水質悪化を多少なりとも遅らせてきたようだ。ただ、周辺の山林が荒れ、山の保水力がこれ以上低下すれば、湧き水の枯渇にもつながるため水質悪化は確実。魚は、鳥たちや小動物のような移動による危険回避もままならず、人の手で守るしかないことを、今一度考える時が来ている。

	科	和 名	学 名	カテゴリー		頁
				京都府 RDB	環境省 RDB	
1	サケ科	アマゴ	<i>Oncorhynchus masou</i>	要注目外来種	—	56
2	キュウリウオ科	アユ	<i>Plecoglossus altivelis</i>	—	—	56
3	コイ科	アブラハヤ	<i>Phoxinus lagowskii</i>	絶滅寸前種	—	57
4	コイ科	タカハヤ	<i>Phoxinus oxycephalus</i>	—	—	57
5	コイ科	オイカワ	<i>Zacco platypus</i>	—	—	57
6	コイ科	カワムツ	<i>Zacco temmincki</i>	準絶滅危惧種	—	58
7	コイ科	ヌマムツ	<i>Cyprinus carpio</i>	—	—	
8	コイ科	コイ	<i>Cyprinus carpio</i>	—	—	58
9	コイ科	ギンブナ	<i>Carassius auratus</i>	—	—	59
10	ドジョウ科	シマドジョウ	<i>Cobitis biwae</i>	—	—	59
11	ドジョウ科	スジシマドジョウ	<i>Cobitis taenia</i>	絶滅寸前種	絶滅危惧ⅠB類	54
12	ギギ科	アカザ	<i>Liobagrus reinii</i>	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅱ類	55
13	メダカ科	メダカ	<i>Oryzias latipes</i>	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅱ類	60
14	カダヤシ科	カダヤシ	<i>Gambusia affinis</i>	要注目外来種	—	60
15	サンフィッシュ科	オオクチバス	<i>Micropterus salmoides</i>	要注目外来種	—	61
16	サンフィッシュ科	ブルーギル	<i>Lepomis macrochirus</i>	要注目外来種	—	61
17	ハゼ科	ドンコ	<i>Odontobutis obscura</i>	—	—	62
18	ハゼ科	カワヨシノボリ	<i>Rhinogobius flumineus</i>	—	—	62

分類：ドジョウ科

学名：*Cobitis sp*

体長：♂6cm・♀8cm

◎京都府カテゴリー：絶滅寸前種

◎環境省カテゴリー：絶滅危惧ⅠB類（EN）



（撮影：沖本 竜幸）

解説：田原川で確認したのは、成熟サイズが小さい琵琶湖型で、シマドジョウ同様に極めて水質汚濁には弱く、生息数も限られていることから、今後の保護対策が重要と思われる。田原川では、随所で川底などから湧き水が確認されており、それらに助けられてなんとか生息している状態である。

淡水魚類 アカザ（赤刺）

分類：ギギ科

学名：*Liobagrus reini*

体長：10cm

◎京都府カテゴリー：絶滅危惧種

◎環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU）



（撮影：林 博之）

解説：ピンク色の可愛いギギ...といった装い。日本では一種一属の固有種で、水のきれいな場所にしか生息できない。宇治川支流の志津川にも生息していたが、近隣では大福川のみでしか確認されていない。非常に希少な魚種で保護の必要性が最も高い魚種である。

淡水魚類

アマゴ (サツキマス) (雨子)

分類：サケ科
学名：*Oncorhynchus masou*
体長：25cm～50cm

◎京都府カテゴリー：要注目外来種
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：小森 雅夫)

解 説

日本固有の亜種で、河川に残留するものをアマゴ、降海するものをサツキマスと呼び分けている。田原川のアマゴは、以前から地元の漁業組合が放流したものが居残ったもので、個体数も少なく産卵行動などは確認されていない。調査の中では、犬打川上流の龍王の滝近くで確認。夏場、水温の上昇とともに天ヶ瀬ダム湖（鳳凰湖）へ降下しているようだ。

淡水魚類

アユ (鮎)

分類：キュウリウオ科
学名：*Plecoglossus altivelis*
体長：10cm～30cm

◎京都府カテゴリー：－
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：中川 宗孝)

解 説

一年で稚魚から成魚まで成長し、一生を終えるため「年魚」とも表現される。大阪湾や琵琶湖で冬を越した稚魚が田原川までソ上するのは不可能で、毎年春に地元の漁業組合が稚魚・成魚を放流。稚魚時代は、動物プランクトンを捕食するが、成長とともに食性は植物食へとかわり、川底の石や岩盤に付着するケイ藻やラン藻を摂餌する。そのため、自らの餌場を守るため“なわばり”を形成するのが他の魚種と大きく異なる特徴である。

淡水魚類 タカハヤ (高鰈)

分類：コイ科
学名：*Phoxinus lagowskii*
体長：13cm

◎京都府カテゴリー：絶滅寸前種
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：林 博之)

解説 田原川本流には少ないが犬打川上流や山間地に点在する山池など水温の低い環境を好み、多数生息していることが確認されている。雑食性で、どんな餌でも釣れることから、地元では“ボケ”というありがたくない呼び名をもらっている。なお、近縁種のアブラハヤも町内の河川で確認されている。

淡水魚類 オイカワ (追河)

分類：コイ科
学名：*Zacco platypus*
体長：15cm

◎京都府カテゴリー：－
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：中川 宗孝)

解説 雑食性で、姿の美しさから釣り人にも好まれる。もとは、淀川水系の固有種だったが、琵琶湖産の稚鮎放流が始まった昭和初期から全国の河川に進出。昭和8年ごろから見られるようになった地域では「ショウハチ」、人絹工業が盛んな頃に、銀色に輝く美しい姿から「ジンケン」など地方での呼び名は多い。田原川のオイカワも鮎の放流によるものらしい。

淡水魚類 カワムツ (河鯉)

分類：コイ科
学名：*Zacco temminckii*
体長：15cm

◎京都府カテゴリー：準絶滅危惧種
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：小森 雅夫)

解 説

田原川では生息数も多く、昔から子どもたちの水遊びの相手として親しまれている。同属のオイカワより上流域を好み、餌場をめぐる激しく争うこともある。これまでは、カワムツをA型とB型の2種類に区別していたが近年、A型を「ヌマムツ」と呼びわけている。田原川には、両種が生息しており、「ヌマムツ」は、準絶滅危惧種として保護していくことを考えなければならない。

淡水魚類 コイ (鯉)

分類：コイ科
学名：*Cyprinus carpio*
体長：60cm～1cm

◎京都府カテゴリー：－
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：中川 宗孝)

解 説

毎年、地元の漁業組合が放流しており、野生型に比べてやや体高のある野外に定着した飼育型と思われる。カワナやモノアラガイなど底生動物を中心に食べており、住民体育館周辺や町役場周辺の深みに群れている姿が目撃されている。

淡水魚類

ギンブナ（銀鮒）

分類：コイ科

学名：*Carassius auratus*

体長：15cm

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：中川 宗孝)

解 説

日本固有の亜種で、フナ類のなかでは最も小さい。川の淀みを好み、ユスリカ(幼虫は赤ムシとして釣具店などで売られている)やイトミミズなど水生動物を餌にしており、田原川の中流域から下流域に生息。近年、釣り人が放流したものらしいゲンゴロウブナ(ヘラブナ)も確認されている。

淡水魚類

シマドジョウ（縞泥鰌）

分類：ドジョウ科

学名：*Cobitis biwae*

体長：♂8cm・♀10cm

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：沖本 竜幸)

解 説

宇治田原町役場裏や蛍小橋周辺の砂底で数多く生息を確認。水質汚染に弱い魚種ではあるが、上流部よりは役場裏から下流域の深みで見られ、川底の湧き水など特定の場所に集まるようだ。小型種のスジシマドジョウも確認されており、今後も注目していかなければならない魚種といえる。

淡水魚類

メダカ（目高）

分類：メダカ科
学名：*Oryzias latipes*
体長：最大4cm

◎京都府カテゴリー：絶滅危惧種
◎環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU）



（撮影：中川 宗孝）

解 説

日本だけで地方名は 5000 をこえるといわれるほど、日本人には馴染みの魚。近年、水質汚染や蚊の駆除のため移入されたカダヤシとの競争などで生息数を減らし、平成 11 年 2 月 18 日に環境庁が「絶滅危惧Ⅱ類（VU）」に指定した。田原川では、町住民体育館周辺から下流にかけて確認されており、これからも注目していかなければならない。

淡水魚類

カダヤシ（蚊絶）

分類：カダヤシ科
学名：*Gambusia affinis*
体長：♂3cm・♀5cm

◎京都府カテゴリー：要注目外来種
◎環境省カテゴリー：－



（撮影：中川 宗孝）

解 説

「蚊絶やし」の名の通り、台湾を経由して 1916 年に移入された。卵を産むメダカとは違って卵胎生で繁殖力も強く、日本中に広がった。水質汚染にも強く、在来種のメダカの生息を脅かし問題となっている。田原川では、蛍橋近くの下流で確認されており、ペットとして飼育されていたものが勝手に放流され増殖したもののらしい。

淡水魚類

オオクチバス(ブラックバス)

分類：サンフィッシュ科

学名：*Micropterus salmoides*

体長：35cm～50cm

◎京都府カテゴリー：要注目外来種

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：中川 宗孝)

解説

1925年に箱根の芦ノ湖に「門外不出」として移入されたのがはじめて。その後、釣りブームから釣り人の勝手な放流で全国の湖沼や河川で大繁殖し、在来の魚種や甲殻類に大きな影響を与えている。田原川では、山間の農業用ため池などに勝手に放流されたものが、池干しなどの際に流れ出たものと思われ、大雨などで河川が増水すると下流の天ヶ瀬湖(鳳凰湖)へと流されているようだ。

淡水魚類

ブルーギル

分類：サンフィッシュ科

学名：*Lepomis macrochirus*

体長：25cm

◎京都府カテゴリー：要注目外来種

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：中川 宗孝)

解説

1960年に北米から移入されたのが最初で、特に琵琶湖で大繁殖し、在来種のタナゴ類や甲殻類に多大な被害を与えている。田原川では、オオクチバス同様に山間の農業用ため池などに勝手に放流されたものが、池干しなどの際に流れ出たものと思われ、大雨などで河川が増水すると下流の天ヶ瀬湖(鳳凰湖)へと流されているようだ。

淡水魚類

ドンコ（鈍甲）

分類：ハゼ科

学名：*Odontobutis obscura*

体長：25cm

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



（撮影：小森 雅夫）

解説

水質の悪化にもっとも影響を受けやすい種類。見た目は可愛らしいが、夜に活動して生きた魚や甲殻類など捕食する。田原川では、本流・支流を問わず多数生息するが、家庭排水で汚れが目立つようになった支流では、その姿を消しつつある。宇治田原町内では、田原川のほか「くつわ池」にも生息。ドンコは、一般のハゼ類と違って孵化した稚魚は、成魚とほとんど同じ形になっており、成魚とほぼ同様の底生生活に入ることができる。年々、富栄養化が進み、水質汚染が問題化している淀川水系の中でも、田原川で貴重なドンコがいつまでも暮らせるように水清き環境を守っていきたい。

淡水魚類

カワヨシノボリ（河蔭登）

分類：ハゼ科

学名：*Rhinogobius flumineus*

体長：6cm

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



（撮影：小森 雅夫）

解説

日本固有種で全国の河川に生息。ヨシノボリ属は、種類も多くて分類も難しく、調査中にはゴクラクハゼと思われるものも目撃されており、今後もヨシノボリ属に絞って調査が必要。田原川では、上流域から下流域、支流域にまで生息しているが、川底の石裏に産卵するためヘドロなどの流入があるとフ化に悪影響を与える。

陸 棲 昆 虫

【調査結果の概要】

当地域は、関西系・関東系の接点で、昆虫の種の数が多いとされている。なかでも、蝶類は年1回発生のもの、春発生、夏眠し再び出現するもの、春と夏と2回発生し色彩を変化するもの、春と夏と秋と3回発生するもの、冬も生き残っているもの、種々多様である。特に年1回発生する蝶は、よほど注意していないと時期を逸し確認できない。

そこで、以下の事項に心がけ調査にあたった。

①宇治田原町内全域をくまなく数回にわたって調査すること。

②年間を通じて調査すること。

③多く昆虫のいる場所等は、重点的に時間、天候等を配慮して調査すること。

しかし、一人の調査であるため、確認できていない種も多くいると思う。今後の調査で補っていきたい。

一方、宇治田原町をとりまく山々から流れ出る清流がトンボのヤゴの生育に深く関わり、カワトンボ類の種や個体数が多い。

この様に、多くのトンボや野生生物が生息している豊かな自然環境を保護することが大切である。そのことが今後の課題である。

	科	和 名	学 名	カテゴリー		頁
				京都府 RDB	環境省 RDB	
1	アゲハチョウ科	ジャコウアゲハ	<i>Atrophaneura alcinous</i>	—	—	69
2	アゲハチョウ科	キアゲハ	<i>Papilio machaon</i>	—	—	
3	アゲハチョウ科	アゲハチョウ	<i>Papilio xuthus</i>	—	—	
4	アゲハチョウ科	クロアゲハ	<i>Papilio protenor</i>	—	—	
5	アゲハチョウ科	ナガサキアゲハ	<i>Papilio memnon</i>	—	—	67
6	アゲハチョウ科	ミヤマカラスアゲハ	<i>Papilio maackii</i>	—	—	68
7	アゲハチョウ科	モンキアゲハ	<i>Papilio helenus</i>	—	—	
8	アゲハチョウ科	アオスジアゲハ	<i>Graphium sarpedon</i>	—	—	
9	シロチョウ科	キチョウ	<i>Eurema hecabe</i>	—	—	
10	シロチョウ科	モンキチョウ	<i>Colias erate</i>	—	—	
11	シロチョウ科	ツマキチョウ	<i>Anthocharis scolymus</i>	—	—	69
12	シロチョウ科	モンシロチョウ	<i>Pieris rapae</i>	—	—	
13	シロチョウ科	スジグロシロチョウ	<i>Pieris melete</i>	—	—	
14	シジミチョウ科	ウラギンシジミ	<i>Curetis acuta</i>	—	—	
15	シジミチョウ科	ムラサキシジミ	<i>Narathura japonica</i>	—	—	
16	シジミチョウ科	アカシジミ	<i>Japonica lutea</i>	—	—	
17	シジミチョウ科	ベニシジミ	<i>Lycaena phlaeas</i>	—	—	
18	シジミチョウ科	クロシジミ	<i>Niphandia fusca</i>	準絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅰ類	
19	シジミチョウ科	ヤマトシジミ	<i>Pseudozizeeria maha</i>	—	—	
20	テングチョウ科	テングチョウ	<i>Libythea celtis</i>	—	—	
21	タテハチョウ科	アサギマダラ	<i>Parantica sita</i>	—	—	70

	科	和 名	学 名	カテゴリー		頁
				京都府 RDB	環境省 RDB	
22	タテハチョウ科	メヌグロヒョウモン	<i>Damora sagana</i>	—	—	70
23	タテハチョウ科	ミドリヒョウモン	<i>Argynnis paphia</i>	—	—	71
24	タテハチョウ科	ツマグロヒョウモン	<i>Argyreus hyperbius</i>	—	—	
25	タテハチョウ科	イチモンジチョウ	<i>Limenitis camilla</i>	—	—	71
26	タテハチョウ科	コミスジ	<i>Neptis sappho</i>	—	—	
27	タテハチョウ科	ホシミスジ	<i>Neptis pryri</i>	—	—	72
28	タテハチョウ科	サカハチチョウ	<i>Araschnia burejana</i>	—	—	72
29	タテハチョウ科	キタテハ	<i>Polygonia c-aureum</i>	—	—	
30	タテハチョウ科	エルタテハ	<i>Nymphalis vaualbum</i>	—	—	
31	タテハチョウ科	ヒオドシチョウ	<i>Nymphalis xanthomelas</i>	—	—	73
32	タテハチョウ科	ルリタテハ	<i>Kaniska canace</i>	—	—	
33	タテハチョウ科	アカタテハ	<i>Vanessa indica</i>	—	—	73
34	タテハチョウ科	ヒメアカタテハ	<i>Cynthia cardui</i>	—	—	
35	タテハチョウ科	コムラサキ	<i>Apatura metis</i>	—	—	74
36	タテハチョウ科	ゴマダラチョウ	<i>Hestina japonica</i>	—	—	74
37	タテハチョウ科	ヒメウラナミジヤノメ	<i>Ypthima argus</i>	—	—	
38	ジャノメチョウ科	クロヒカゲ	<i>Lethe diana</i>	—	—	
39	セセリチョウ科	ダイミョウセセリ	<i>Daimio tethys</i>	—	—	
40	セセリチョウ科	イチモンジセセリ	<i>Parnara guttata</i>	—	—	
41	ヤママユガ科	ヤママユガ	<i>Antheraea yamamai</i>	—	—	
42	フタオガ科	キンモンガ	<i>Psychostrophia melanargia</i>	—	—	
43	コガネムシ科	カブトムシ	<i>Allomyrina dichotoma</i>	—	—	
44	コガネムシ科	マメコガネ	<i>Popillia japonica</i>	—	—	
45	コガネムシ科	コアオハナムグリ	<i>Oxycetonia jucunda</i>	—	—	
46	コガネムシ科	カナブン	<i>Rhomborrhina japonica</i>	—	—	
47	コガネムシ科	アオカナブン	<i>Rhomborrhina unicolor</i>	—	—	
48	コガネムシ科	センチコガネ	<i>Geotrupes laevistriatus</i>	—	—	
49	クワガタムシ科	ノコギリクワガタ	<i>Prosopocoilus inclinatus</i>	—	—	
50	クワガタムシ科	ミヤマクワガタ	<i>Lucanus maculifemoratus</i>	—	—	
51	クワガタムシ科	コクワガタ	<i>Macrodercas rectus</i>	—	—	
52	ハンミョウ科	ハンミョウ	<i>Cicindela chinensis</i>	—	—	75
53	オサムシ科	オオゴミムシ	<i>Lesticus magnus</i>	—	—	
54	ホタル科	ゲンジボタル	<i>Luciola cruciata</i>	要注目種	—	
55	ホタル科	ヘイケボタル	<i>Luciola lateralis</i>	要注目種	—	
56	タマムシ科	ウバタマムシ	<i>Chalcophora japonica</i>	—	—	
57	カミキリムシ科	ヘビカミキリ	<i>Purpuricenus temminckii</i>	—	—	
58	スズメバチ科	キロスズメバチ	<i>Vespa similima xanthoptera</i>	—	—	
59	スズメバチ科	セグロアシナガバチ	<i>Polistes jadvigae</i>	—	—	
60	ハナアブ科	ハナアブ	<i>Eristalis tenax</i>	—	—	
61	セミ科	アブラゼミ	<i>Graptopsaltria nigrofuscata</i>	—	—	
62	セミ科	ヒグラシ	<i>Tanna japonensis</i>	—	—	75
63	セミ科	ツクツクボウシ	<i>Meimuna opalifera</i>	—	—	
64	セミ科	クマゼミ	<i>Cryptotympana fucialis</i>	—	—	
65	セミ科	ミンミンゼミ	<i>Oncotympana maculaticollis</i>	—	—	
66	セミ科	ニイゼミ	<i>Platyleura kaempferi</i>	—	—	
67	オオヨコバイ科	ツマグロヨコバイ	<i>Bothrogonia ferruginea</i>	—	—	

	科	和 名	学 名	カテゴリー		頁
				京都府 RDB	環境省 RDB	
68	バッタ科	ショウリョウバッタ	<i>Acrida cinerea</i>	—	—	
69	バッタ科	トノサマバッタ	<i>Locusta migratoria</i>	—	—	
70	イナゴ科	イナゴ	<i>Oxya japonica</i>	—	—	
71	バッタ科	オンブバッタ	<i>Atractomorpha lata</i>	—	—	
72	キリギリス科	クサキリ	<i>Homorocoryphus lineosus</i>	—	—	
73	キリギリス科	キリギリス	<i>Gampscoleis buergeri</i>	—	—	
74	コオロギ科	エンマコオロギ	<i>Teleogryllus emma</i>	—	—	
75	コオロギ科	ミツカドコオロギ	<i>Loxoblemmus doenitzi</i>	—	—	
76	マツムシ科	マツムシ	<i>Xenogryllus marmoratus</i>	—	—	
77	マツムシ科	アオマツムシ	<i>Calyptotrypes hibernonis</i>	—	—	
78	カネタタキ科	カネタタキ	<i>Ornebius kanetataki</i>	—	—	
79	カンタン科	カンタン	<i>Oecanthus indicus</i>	—	—	
80	スズムシ科	スズムシ	<i>Homoeogryllus japonicus</i>	—	—	
81	カマドウマ科	カマドウマ	<i>Diestrammena japonica</i>	—	—	
82	カマキリ科	チョウセンカマキリ	<i>Tenodera angustipennis</i>	—	—	
83	カマキリ科	オオカマキリ	<i>Tenodera sinensis</i>	—	—	
84	ナナフシムシ科	エダナナフシ	<i>Phraortes illepidus</i>	—	—	
85	ナナフシムシ科	トゲナナフシ	<i>Neohirasea japonica</i>	—	—	
86	ナナフシムシ科	ナナフシ	<i>Phraortes elongatus</i>	—	—	
87	アメンボ科	アメンボ	<i>Gerris paludum japonicus</i>	—	—	
88	イトトンボ科	キイトンボ	<i>Ceriatrion melanurum</i>	—	—	
89	イトトンボ科	セスジイトンボ	<i>Cercion hieroglyphicum</i>	—	—	
90	モノサシトンボ科	モノサシトンボ	<i>Copera annulata</i>	—	—	
91	アオイイトンボ科	アオイイトンボ	<i>Lestes sponsa</i>	—	—	
92	アオイイトンボ科	ホソミオツネイトンボ	<i>Indolestes peregrinus</i>	—	—	77
93	カワトンボ科	オオカワトンボ	<i>Mnais nawai</i>	—	—	77
94	カワトンボ科	ハグロトンボ	<i>Calopteryx atrata</i>	—	—	
95	カワトンボ科	ミヤマカワトンボ	<i>Calopteryx cornelia</i>	—	—	78
96	カワトンボ科	アオハダトンボ	<i>Calopteryx japonica</i>	—	—	
97	サナエトンボ科	ヤマサナエ	<i>Asiagomphus melaenops</i>	—	—	
98	サナエトンボ科	コサナエ	<i>Trigomphus melampus</i>	—	—	
99	サナエトンボ科	コオニヤンマ	<i>Sieboldius albardae</i>	—	—	
100	オニヤンマ科	オニヤンマ	<i>Anotogaster sieboldii</i>	—	—	
101	ヤンマ科	コシボソヤンマ	<i>Boyeria maclachlani</i>	—	—	78
102	ヤンマ科	ギンヤンマ	<i>Anax parthenope</i>	—	—	79
103	エゾトンボ科	カラカネトンボ	<i>Cordulia aenea</i>	—	—	
104	トンボ科	ハラビロトンボ	<i>Lyriothemis pachygastra</i>	—	—	79
105	トンボ科	シオカラトンボ	<i>Orthetrum albistylum</i>	—	—	
106	トンボ科	ムギワラトンボ	<i>Orthetrum albistylum</i>	—	—	
107	トンボ科	シオヤトンボ	<i>Orthetrum japonicum</i>	—	—	
108	トンボ科	オオシオカラトンボ	<i>Orthetrum triangulare</i>	—	—	
109	トンボ科	コフキトンボ	<i>Deileia phaon</i>	—	—	80
110	トンボ科	ヨツボシトンボ	<i>Libellula quadrimaculata</i>	—	—	80
111	トンボ科	ショウジョウトンボ	<i>Crocothemis servilla</i>	—	—	
112	トンボ科	ヒメアカネ	<i>Sympetrum parvulum</i>	—	—	81
113	トンボ科	ナツアカネ	<i>Sympetrum darwinianum</i>	—	—	

	科	和 名	学 名	カテゴリー		頁
				京都府 RDB	環境省 RDB	
114	トンボ科	アキアカネ	<i>Sympetrum frequens</i>	—	—	
115	トンボ科	ミヤマアカネ	<i>Sympetrum pedemontanum</i>	準絶滅危惧種	—	76
116	トンボ科	ネキトンボ	<i>Sympetrum speciosum</i>	—	—	81
117	トンボ科	ノシメトンボ	<i>Sympetrum infuscatum</i>	—	—	
118	トンボ科	ウスバキトンボ	<i>Pantala flavescens</i>	—	—	
119	トンボ科	コシアキトンボ	<i>Pseudothemis zonata</i>	—	—	82
120	トンボ科	チョウトンボ	<i>Phythemis fuliginosa</i>	—	—	82

分類：アゲハチョウ科
学名： *Papilio memmon*

◎京都府カテゴリー：－
◎環境省カテゴリー：－



（撮影：徳留 洋二）

解説：本種は、オス・メスともに無尾であり、シーボルトが長崎で発見したので、この名がつけられた。九州では全県下の平地から低い山地帯にかけて見られるが、現在では温暖化に伴い東海地方にも見られ、北限が移動しているようである。メスは大きく地味なものが一般的であるが、本種は後ばねが大きく美しい。オスはほとんどが黒一色である。春型はツツジ類、ミカン類の花を訪れるものが多く、幼虫の食草はミカン類である。

分類：アゲハチョウ科
学名： *Papilio maackii*

◎京都府カテゴリー：－
◎環境省カテゴリー：－



（撮影：徳留 洋二）

解説：カラスアゲハをひときわメタリックにしたのが、このチョウの特徴で、オスは前翅（ぜんし）表にビロウド状性斑を持つので、オス・メスは一見して区分できる。関東及び以南の地域では主として山地にのみ生息し、平地では極めてまれである。暖地では、春型は4月～5月、夏型は7月～8月に発生、習性はカラスアゲハと同様、春はツツジ類、アザミ類の花に訪れることが多く、オスは集団性が強く、しばしば湿地に大集団をつくることもある。幼虫の食草はキハダ、ヒロハノキハダ、カラスザンジョウ、ハマセンダンなどのミカン科である。

陸棲昆虫

ジャコウアゲハ（麝香揚羽）

分類：アゲハチョウ科

学名：*Atrophaneura alcinous*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：徳留 洋二)

解 説

オスの翅表は黒色、絹糸状の光沢あり。メスの翅表は黄灰色、暗灰色、絹糸状光沢を欠く。夏型は春型より一般に大形で、通年３回の発生。捕まえるとじゃ香のような香気を出すことから、この名がついた。飛翔は、最も緩慢、道路や草地を低く飛び採集は容易である。

陸棲昆虫

ツマキチョウ（棲黄蝶）

分類：シロチョウ科

学名：*Anthocharis scolymus*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：徳留 洋二)

解 説

オスは、翅端部が橙黄色、メスはこの色彩を欠く。年１回早春に発生、本州西南部では３月下旬～４月になる。地上を一定の高さを保ち、翅をこきざみに動かしてまっすぐに飛び性質がある。飛び立つとなかなか止まらず、時に休んだり風をよけたりする時には、翅をたたんで止まり、裏面の淡い大理石模様が保護色となる。

分類：タテハチョウ科

学名：*Parantica sita*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩崎 仁)

解 説

開張 100 mm。斑紋は浅葱（あさぎ）というよりも、水浅葱色。はねの青白いところには、鱗粉はない。ゆったりと、ほとんど羽ばたかず、鱗粉が退化したはねに青空を透かしながら飛び、上昇気流に乗って舞い上がる。夏になると北または高地へ、秋になると南または低地へ移動する。種子島から福井県まで、直線距離で 1,000 km 以上の長距離飛行が確認されている。

分類：タテハチョウ科

学名：*Damora sagana*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩崎 仁)

解 説

色彩斑紋は、オス、メスによって全く相違し、一見したところ、これが同種のオス、メスとは思われない。この種は他のヒョウモン類に比べると、一般に個体数は少なく、年 1 回発生し、オスは日当たりのよい樹林周辺の草むらにすみ、メスははね色と同様、やや暗い環境を好む。

陸棲昆虫

ミドリヒョウモン（緑豹紋）

分類：タテハチョウ科
学名： *Argynnis paphia*

◎京都府カテゴリー：－
◎環境省カテゴリー：－



（撮影：岩崎 仁）

解 説

年1回6～7月に羽化。低山地では一時夏眠した後、9～10月に再び活動。後ばねの裏は、草色の地に銀色の縞が3本走っている。この種はやや森林性、林緑を好み、沢沿いでもよく見られる。食草はスミレ科スミレ属各種である。

陸棲昆虫

イチモンジチョウ（一文字蝶）

分類：タテハチョウ科
学名： *Limenitis camilla*

◎京都府カテゴリー：－
◎環境省カテゴリー：－



（撮影：徳留 洋二）

解 説

開張 65 mm。ふつう年2～3回発生。5～10月に見られる。はねを広げると黒い地色に白い一文字。すっきりとした仕上がり of チョウ。明るい林縁や林の中を、あまり羽ばたくことなく飛び、低い木に止まる。花のほか腐った果物、糞尿にもよく集まり、地上で吸水する。幼虫は食草の葉を巻いて巣をつくり、冬を越す。

分類：タテハチョウ科

学名：*Neptis pryeri*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩崎 仁)

解 説

開張 60 mm。ふつう年 1 回、6～7 月発生。暖地では年 2～3 回発生。後ばねの裏を見ると、つけ根のところに星のように小さな黒斑が散らばっているので、この名前がついた。生息地から遠く離れることなく、はねを水平にして、すべるように軽やかに飛ぶ。地上に降りて止まることは、あまりない。

分類：タテハチョウ科

学名：*Araschnia burejana*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩崎 仁)

解 説

春型と夏型は、一見別種と思われるほど、著しく相違し、季節的変異の最も顕著な 1 例として世界的に知られている。夏は黒褐色の地に白く描かれた逆「八」の字が浮きたつ。春型は黒褐色の地に橙色の斑紋で、せわしく羽ばたいて滑空をくり返し、地面によくとまる。春型は 5～6 月、夏型は 7～8 月に発生し、トラノオ類の花に集まるものが多い。

陸棲昆虫

ヒオドシチョウ（緋緋蝶）

分類：タテハチョウ科

学名：*Nymphalis xanthinomelas*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩崎 仁)

解 説

色彩斑紋はオス、メス同様。外見のみによる性の判別は、殆ど不可能である。年1回の発生、暖地では5月下旬～6月上旬ごろに羽化し、羽化当時はやや盛んに活動するが、間もなく休眠に入る。幼虫の食草はエノキ、ヤナギ類、卵はかためて塊状に産付され、幼虫は群生する。

陸棲昆虫

アカタテハ（赤タテハ）

分類：タテハチョウ科

学名：*Vanessa indica*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：徳留 洋二)

解 説

開張 67 mm、年 2～4 回、5～11 月に見られる。おもに成虫で越冬。オスは夕方、山頂や尾根でなわばりをつくる。秋には柿の実によく集まり、晩秋や早春には、ひなたぼっこをする姿をみかけることも多い。食草は、イラクサ科のカラムシ、ヤブマオ、ニレ科のケヤキ、ハルニシなど。

分類：タテハチョウ科

学名：*Apatura metis*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩崎 仁)

解 説

開張 70 mm。山地や寒冷地では年 1 回、暖地では年 3 回発生。河川敷などヤナギ類の生えている所で見られる。光の当たる角度によって、オスの表面にきらめく紫色が浮き上がることから、「隠し紫」の名もある。はつらつと飛び、樹液に集まるが、概ねはねを閉じたり、開いたり忙しそうにしている。

分類：タテハチョウ科

学名：*Hestina japonica*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩崎 仁)

解 説

色彩斑紋は、オス・メス大差はないが、メスは翅幅広く丸味を帯び、黒色部の発達は、オスに比べて弱い。春型は、一般に大形である。通常年 2～3 回発生。春型は 5～6 月、夏型は 7～8 月。幼虫はエノキ類で樹上、樹間を旋回して飛翔する。

陸棲昆虫

ハンミョウ (斑蝥・斑猫)

分類：ハンミョウ科

学名： *Cicindela chinensis*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩崎 仁)

解 説

体長 20 ～ 22 mm。山道などで人の歩く前を飛んではとまり、逃げていく姿が道案内をしているように見えるために、「ミチシルベ」、「ミチオシエ」ともよばれる。前ばねにはビロード状の光沢があり美しい。ハンミョウ類はみな小形で、足が長く、大あごが発達している。幼虫は、固い地面に垂直に坑道を掘って隠れ、近くを通る昆虫を捕食する。

陸棲昆虫

ヒグラシ (蝸・日暮蟬)

分類：セミ科

学名： *Tanna japonensis*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩崎 仁)

解 説

体長 38 mm。6 ～ 9 月にかけて発生。鳴き声から「カナカナ」とよばれることもあるセミで、さわやかな鳴き声である。うす暗い林を好み、早朝と夕方、曇りの日を好んで鳴くが、うす暗い林のなかでは、1 日中、鳴いている。日本産のセミはオスとメスが V 字形に並んで交尾する種類が多いが、ヒグラシはオスとメスが頭を反対向けて交尾する。

分 類：トンボ科

学 名： *Sympetrum pedemontanum*

◎京都府カテゴリー：準絶滅危惧種

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：徳留 洋二)

解 説：オスは翅の先から少しなかに入ったところに褐色の帯、また、メスは翅の斑がやや黒色で、体色もややくすんだ色を特徴的とするアカトンボである。名前は、「深山」とあるが、里山のふもとでよく見かけられる。アカトンボの仲間は、止水性のものが多く、ミヤマアカネは緩やかな流れのある場所にすむ。しかし、最近はコンクリートブロック等で護岸されているので、すっかり減ってしまった。見られる時期は6～11月ごろで、大きさは32～38mm。

陸棲昆虫

ホソミオツネントンボ (細身越年蜻蛉)

分類：アオイトトンボ科
学名： *Indolestes peregrinus*

◎京都府カテゴリー：－
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩崎 仁)

解 説

成虫で越冬するイトトンボ。冬、日当たりのよい崖下などで、ササ、シダ、枯れ枝などに頭をくっつけるようにとまり、寒さをしのいでいる。越冬中は目立たない褐色ですが、春になると鮮やかな青色にかわり、交尾、産卵する。

陸棲昆虫

オオカワトンボ (大河蜻蛉)

分類：カワトンボ科
学名： *Mnais nawai*

◎京都府カテゴリー：－
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩崎 仁)

解 説

丘陵地、平地の中流域のヨシ等が多い緩やかな流れのところで、底質は小石、砂が多い、少し汚れた水の環境、水温は中ぐらいに生息。翅の色は、オスは橙赤色、淡いオレンジ色、無色の3タイプ、メスでは淡い橙褐色、無色の2タイプがいる。オスは激しい闘争をし、なわばりを守る。4～7月に見られ、大きさは49～63 mm。

陸棲昆虫

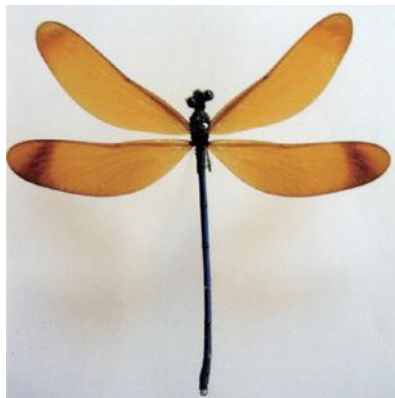
ミヤマカワトンボ (深山河蜻蛉)

分類：カワトンボ科

学名： *Calopteryx cornelia*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩崎 仁)

解 説

山地・丘陵地の溪流の上流で川幅が広く、底質は、頭大の石、小石、瀬があり、きれいな水質の環境、水温は低いところを好む。オス、メスとも、赤褐色の翅に幅の広い濃色帯が入る。日本の均翅亜目のなかでは最大で、世界ランキングのなかでも上位に入る。メスは完全に水中に潜って産卵。体中に生える細かい毛に空気が閉じこめられ、空気の膜に覆われた状態となり、呼吸することができる。大きさは 62 ～ 78 mm。

陸棲昆虫

コシボソヤンマ (腰細蜻蜒)

分類：ヤンマ科

学名： *Boyeria maclachlani*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩崎 仁)

解 説

腹長 55 mm。腹部第 3 節が極端に細くくびれているので、「腰細ヤンマ」と呼ぶ。幼虫は水中に生える植物の根ぎわなどにつかまっている。捕まえると体をそらせて死んだふりをする。成熟した個体はなわばりを決めずに広い範囲を飛ぶ。

分類：ヤンマ科

学名：*Anax parthenope*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：徳留 洋二)

解 説

腹長 50 mm。腹部にある銀白色の斑紋が名前の由来。なわばりがたいへん広く、ほかのオスが入ってくると猛烈な攻撃を行う。上空を通っただけでも、追いかけて上昇し、威嚇する。メスを見つけると素早く交尾し、連結したまま産卵を行う。オスをぎん、メスをちゃんという。春から秋まで池や水田など、明るいところにいる。

分類：トンボ科

学名：*Lyriothemis pachygastra*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩崎 仁)

解 説

名前のとおり腹部が幅広く扁平なトンボで、体は黄と黒の縞模様で、オスは成熟すると黒くなり、そのうえに青灰色の粉を吹く。幼虫はほとんど干上がったような湿地でも生きのびることができ、春に成長し、晩春から初夏にかけて羽化する。そして、草むらのなかの水たまりになわばりを確保し、ほかのオスが入ってくると、ホバリングし追い出してしまう。大きさは、32～39 mm。

分類：トンボ科

学名： *Deilelia phaon*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩崎 仁)

解 説

シオカラトンボを小さくしたようなトンボで、成熟すると体に白粉が強く生ずる。オスの翅は、無色のものと黄色の翅に褐色の帯の入るものと2タイプがある。生息地は平地から丘陵地の挺水植物の多い池沼、溝川で大きさは37～44mm。

分類：トンボ科

学名： *Libellula quadrimaculata*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩崎 仁)

解 説

はねに4つの斑紋がある黄褐色のトンボで頑丈な感じのトンボである。まれに4つの斑紋が黒く広がり、一見ベッコウトンボに似たプラエヌビラ型と呼ばれる個体が現れることがある。このトンボが見られるのは、4月～9月に平地から丘陵地の池沼、湿地で大きさは42～49mm。産卵は単独で植物の間に潜り込み浅い水面を連続打水して産卵する。

陸棲昆虫

ヒメアカネ (姫茜蜻蛉)

分類：トンボ科

学名： *Sympetrum parvulum*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩崎 仁)

解 説

腹長 20 mm。マイコアカネを小形にした感じで、日本のアカトンボ属のなかで最小種。湿地を主な生息地とするアカトンボは本種だけで、羽化は夜中に行われ、翌日昼すぎまで、脱皮殻のうえにいるものが多い。たくさんの個体が集まっている時は、連結して産卵することもある。メスの生殖弁が腹端を超えて突出している。

陸棲昆虫

ネキトンボ (根黄蜻蛉)

分類：トンボ科

学名： *Sympetrum speciosum speciosum*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩崎 仁)

解 説

翅の基部がオレンジ色で、胸の側面には中央に太く黒い筋がある。若い個体は木の枝先の高いところにとまっているのが見られるが、成熟するとオスは樹林に囲まれた池の上をパトロールする。

陸棲昆虫

コシアキトンボ（腰空蜻蛉）

分類：トンボ科

学名：*Pseudothemis zonata*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



（撮影：岩崎 仁）

解 説

腹長 30mm。黒い体のなかで、腰の部分だけが白く「空いている」ように見えるため、「腰空きトンボ」と名付けられた。羽化した個体は水辺付近の林に移り、数匹から数十匹の小群をつくって飛び回る習性がある。なわばり行動はすさまじく、他のオスが入ってくると、にらみ合ったまま数 10m も上昇して、一方が退散するまで頑張る。

陸棲昆虫

チョウトンボ（蝶蜻蛉）

分類：トンボ科

学名：*Phythemis fuliginosa*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



（撮影：岩崎 仁）

解 説

チョウのように金緑又は金紫色の翅をひらひらと舞う美しいトンボ。近年は激減した。若い個体が高い場所で滑空飛行するために、ヒコウキトンボとも呼ばれる。羽化した個体は、水辺近くの林に移動して暮らす。見られるのは6～9月で大きさは、32～41 mm。幼虫は平地・丘陵地の植生豊かな池沼。

水棲昆虫

	科	和 名	学 名	カテゴリー		頁
				京都府RDB	環境省RDB	
1	アオイトンボ科	アオイトンボ	<i>Lestes sponsa</i>	—	—	
2	アミメカゲロウ科	オオシロカゲロウ (アミメカゲロウ)	<i>Ephoron shigae</i>	要注目種	—	
3	アメンボ科	アメンボ	<i>Gerris paludum</i>	—	—	
4	イシビル科	シマイシビル	<i>Erpobdella lineata</i>	—	—	
5	イトアメンボ科	イトアメンボ	<i>Hydrometra albolineata</i>	—	—	
6	イトトンボ科	オオイトトンボ	<i>Cercion sieboldii</i>	—	—	
7	エソトンボ科	コヤマトンボ	<i>Macromia amphigena</i>	—	—	
8	カワカゲロウ科	キヨロカワカゲロウ	<i>Potamanthus kamonis</i>	—	—	
9	カワゲラ科	オオヤマカワゲラ	<i>Oyamia gibba</i>	—	—	
10	カワトンボ科	オオカワトンボ	<i>Mnais nawai</i>	—	—	
11	カワトンボ科	カワトンボ	<i>Mnais pruinosa</i>	—	—	
12	カワトンボ科	ハグロトンボ	<i>Calopteryx atrata</i>	—	—	
13	ゲンゴロウ科	クロゲンゴロウ	<i>Cybister brevis</i>	絶滅危惧種	—	84
14	コオイムシ科	コオイムシ	<i>Appasus japonicus</i>	準絶滅危惧種	準絶滅危惧	
15	コオイムシ科	タガメ	<i>Lethocerus deyrollei</i>	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅱ類	84
16	コカゲロウ科	サホコカゲロウ	<i>Baetis sahoensis</i>	—	—	
17	コカゲロウ科	フタバカゲロウ	<i>Baetiella japonica</i>	—	—	
18	サナエトンボ科	コオニヤンマ	<i>Sieboldius albardae</i>	—	—	
19	シマトビケラ科	コガタシマトビケラ	<i>Cheumatopsyche brevilineata</i>	要注目種	—	85
20	タイコウチ科	ミズカマキリ	<i>Ranatra chinensis</i>	—	—	
21	トビイロカゲロウ科	ヒメトビイロカゲロウ	<i>Choroterpes trifurcata</i>	—	—	
22	トンボ科	シオカラトンボ	<i>Orthetrum albistylum</i>	—	—	
23	トンボ科	ハラビロトンボ	<i>Lyriotheis pachygastra</i>	—	—	
24	ナベプタムシ科	ナベプタムシ	<i>Aphelocheirus vittatus</i>	—	—	
25	ニンギョウトビケラ科	ニンギョウトビケラ	<i>Goera japonica</i>	—	—	
26	ヒトリカゲロウ科	ヒトリガカゲロウ	<i>Oligoneuriella rhenana</i>	—	—	
27	ヒラタカゲロウ科	エルモンヒラタカゲロウ	<i>Epeorus latifolium</i>	—	—	
28	ヒラタカゲロウ科	オビカゲロウ	<i>Bleptus fasciatus</i>	—	—	
29	ヒラタカゲロウ科	シロタニガワカゲロウ	<i>Ecdyonurus yoshidae</i>	—	—	
30	ヒラタカゲロウ科	ヒメヒラタカゲロウ	<i>Rhithrogena japonica</i>	—	—	
31	ヒラタカゲロウ科	ミヤマタニガワカゲロウ	<i>Cinygmula hirasana</i>	—	—	
32	ヒラタロムシ科	ヒラタロムシ	<i>Mataeopsephus japonicus</i>	—	—	
33	ヒロムネカワゲラ科	ノギカワゲラ	<i>Cryptoperla japonica</i>	—	—	
34	フタオカゲロウ科	ヒメフタオカゲロウ	<i>Ameletus Montanus</i>	—	—	
35	ヘビトンボ科	ヘビトンボ	<i>Protohermes grandis</i>	—	—	
36	ホタル科	ゲンジボタル	<i>Luciola cruciata</i>	要注目種	—	85
37	モノサシトンボ科	モノサシトンボ	<i>Copera annulata</i>	—	—	
38	モンカゲロウ科	モンカゲロウ	<i>Ephemera strigata</i>	—	—	
39	ヤンマ科	コシボソヤンマ	<i>Boyeria maclachlani</i>	—	—	

分類：ゲンゴロウ科
学名：*Cybister brevis*

◎京都府カテゴリー：絶滅危惧種
◎環境省カテゴリー：－



（撮影：徳留 洋二）

解 説

体は黒色の光沢があり、背面は一様に微細な点刻がある。体長は23～24mm位で、沼や池のほか清流水の常に入る水田や休耕田などに生息している。農薬の流水などにより、水質の汚染や圃場の整備により消滅の寸前である。町内での確認は極めて珍しい。

分類：コオイムシ科
学名：*Lethocerus deyrollei*

◎京都府カテゴリー：絶滅危惧種
◎環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU）



（撮影：徳留 洋二）

解 説

体は灰褐色または褐色で、日本では最大の異翅半翅類。前肢の末端に1個の爪があり、強力な捕獲肢となる。体長は50～60mmで、池沼や水田に生息している。田畑の圃場整備や農薬等で絶滅の一途をたどる。町内でも休耕田や山間地からの清流入水の所でしか確認されていない。大切に守っていききたいものである。

水棲昆虫

コガタシマトビケラ（幼虫）（小型縞螻蛄）

分類：シマトビケラ科

学名：*Cheumatopsyche brevilineata*

◎京都府カテゴリー：要注目種

◎環境省カテゴリー：－



（撮影：阪本 伊三雄）

解 説

体は 10 mm 前後で、河川や水田の間を流れる小溝に棲む。成虫は河岸近くの草木や河川敷の樹林に多く見られる。シマトビケラ属の幼虫は、水力発電などの導水トンネル内などに無数の巣を作るため、害虫として有名である。

水棲昆虫

ゲンジボタル（幼虫）（源氏螢）

分類：ホタル科

学名：*Luciola cruciata*

◎京都府カテゴリー：要注目種

◎環境省カテゴリー：指標昆虫



（撮影：阪本 伊三雄）

解 説

幼虫のう化時は約 2 mm。終齢幼虫は 20 ～ 30 mm。黒褐色で腹節に鰓（えら）器官がある。採餌はほぼ夜間で、カワニナを好んで食する。成虫は大型で、オスは美しい光を放ち、夜間 8 時ごろをピークに飛翔する。町内の田原川やその支川で楽しめるが、数を増やすには、河川の水質浄化に努めなければならない。また、最近では業者等が乱獲するので、困ったものである。

甲 殻 類

	科	和 名	学 名	カテゴリー		頁
				京都府 RDB	環境省 RDB	
1	テナガエビ科	スジエビ	<i>Palaemon paucidens</i>	—	—	87
2	ヌマエビ科	ヌマエビ	<i>Paratya compressa</i>	準絶滅危惧種	—	
3	アメリカザリガニ科	アメリカザリガニ	<i>Cambarus clarkii</i>	要注目外来種	—	
4	サワガニ科	サワガニ	<i>Geothelphusa dehaani</i>	要注目種	—	

淡 水 産 貝 類

	科	和 名	学 名	カテゴリー		頁
				京都府 RDB	環境省 RDB	
1	タニシ科	マルタニシ	<i>Cipangopaludina chinensis</i>	準絶滅危惧種	準絶滅危惧	88
2	タニシ科	ヒメタニシ	<i>Sinotaia histrica</i>	—	—	
3	カワニナ科	カワニナ	<i>Semisulcospina libertina</i>	—	—	
4	モノアラガイ科	モノアラガイ	<i>Radix auricularia japonica</i>	—	準絶滅危惧	
5	モノアラガイ科	ヒメモノアラガイ	<i>Austropeplea ollula</i>	—	—	
6	サカマキガイ科	サカマキガイ	<i>Physa acuta</i>	—	—	
7	シジミ科	マシジミ	<i>Corbicula leana</i>	—	—	

甲殻類 ヌマエビ (沼蝦)

分類：ヌマエビ科

学名：*Paratya compressa*

◎京都府カテゴリー：準絶滅危惧種

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：小森 雅夫)

解説：体長約 30 mm。河川や湖沼にて生息。たまに用水路でもみられる。川床の隙間や水生生物などに隠れて生活する。町内でもスジエビとともに、大変珍しくなっている。スジエビよりも不透明で黒いアメ色をしている。

分類：タニシ科

学名：*Cipangopaludia chinensis*

◎京都府カテゴリー：準絶滅危惧種

◎環境省カテゴリー：準絶滅危惧 (NT)



(撮影：阪本 伊三雄)

解 説

殻高 60 mm。殻径約 40～45 mm。卵円形の巻き貝で、螺層は 6 層で丸く膨らみ、縫合は深い。水田の底や河川のワンド状などで泥を被った姿で這い回る。農薬等による水質汚濁や用水路の改修などで生息数は減少してきている。

分類：モノアラガイ科

学名：*Radix auricularia japonica*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：準絶滅危惧 (NT)



(撮影：阪本 伊三雄)

解 説

殻高約 25 mm。殻径約 20 mm ぐらいの巻き貝で螺塔が低く、体層がよく発達しており、特に殻口が大きく、殻高の 4/5 を占めているものもある。殻が薄く蓋がない。河川のワンド状や淀み、池沼、水田などの水草や礫(れき)に付着している。モノアラガイ類は、ヘイケボタルの幼虫の餌になる。

植 物

【調査結果の概要】

人類の歴史の始まりとともに文明が進化し、それに伴い地球上の生態系に変化が生じた。この変化により、多くの生物が姿を消すとともに、絶滅の危機にさらされている。

約70%が山地で構成されている風光明媚な宇治田原町にも、誠に残念ながら、野生植物のなかで絶滅の危機にさらされているものがある事実は、隠しきれない。

今後は、一人ひとりが自覚を持って、なお一層自然について考え直し、復元、保全に力を注いでいきたいものである。

宇治田原町内の植物調査は京都府のレッドデータを意識しながら、3カ年と限られた期間、ほぼ一人での調査活動であったため、調査個体数がかなり限られてしまった。

また、標本としての採集は、一切さけることにした。本来は、すべての植物を網羅すべきであろうが、樹木、シダ類やコケ類については、ほとんど手をつけていない。今後に期し、未永く調査を続けていきたいと考えている。

十数年前までは、身近で観られたアツモリソウやサギソウも残念ながら、野生の状態からは絶滅してしまった。ササユリまでもが、山地の一部で密に残されているのみである。悲しいことである。

どうかコレクションのために、根こそぎ掘り起こし、持ち帰らないで頂きたい。“やはり野にあってこそそのスマイレ草”である。

	科	和 名	学 名	カテゴリー		頁
				京都府 RDB	環境省 RDB	
1	キク科	ハハコグサ	<i>Gnaphalium affine</i>	—	—	
2	キク科	チチコグサ	<i>Gnaphalium japonicum</i>	—	—	
3	キク科	タチチコグサ	<i>Gnaphalium pennsylvanicum</i>	—	—	
4	キク科	センボンヤリ	<i>Leibnitzia anandria</i>	—	—	
5	キク科	コウヤボウキ	<i>Pertya scandens</i>	—	—	
6	キク科	ブタクサ	<i>Ambrosia artemisiaefolia</i>	—	—	
7	キク科	オオナモミ	<i>Xanthium canadense</i>	—	—	
8	キク科	ヒヨドリバナ	<i>Eupatorium chinense</i>	—	—	
9	キク科	ヨメナ	<i>Aster yomena</i>	—	—	
10	キク科	ハルジオン	<i>Erigeron philadelphicus</i>	—	—	
11	キク科	ヒメジョオン	<i>Erigeron annuus</i>	—	—	
12	キク科	フキ	<i>Petasites japonicus</i>	—	—	
13	キク科	キオン	<i>Senecio nemorensis</i>	—	—	
14	キク科	ノボロギク	<i>Senecio vulgaris</i>	—	—	
15	キク科	サワオグルマ	<i>Senecio pierotti</i>	—	—	
16	キク科	タカサブロウ	<i>Eclipta prostrata</i>	—	—	

	科	和 名	学 名	カテゴリー		頁
				京都府 RDB	環境省 RDB	
17	キク科	アメリカセンダングサ	<i>Bidens frondosa</i>	—	—	
18	キク科	オケラ	<i>Atractylodes ovata</i>	要注目種	—	
19	キク科	キツネアザミ	<i>Hemistepta lyrata</i>	—	—	
20	キク科	ノアザミ	<i>Cirsium japonicum</i>	—	—	
21	キク科	コオニタビラコ	<i>Lapsana apogonoides</i>	—	—	
22	キク科	ヤブタビラコ	<i>Lapsana humilis</i>	—	—	
23	キク科	ブタナ	<i>Hypochoeris radicata</i>	—	—	
24	キク科	カンサイタンポポ	<i>Taraxacum japonicum</i>	—	—	
25	キク科	セイヨウタンポポ	<i>Taraxacum officinale</i>	—	—	
26	キク科	ニガナ	<i>Ixeris dentata</i>	—	—	
27	キク科	オオバニガナ	<i>Ixeris dentata</i>	—	—	
28	キク科	ジシバリ	<i>Ixeris stolonifera</i>	—	—	
29	キク科	オニノゲシ	<i>Sonchus asper</i>	—	—	
30	キク科	コウモリソウ	<i>Cacalia hastata</i>	—	—	
31	キク科	ヤクシソウ	<i>Paraixeris denticulata</i>	—	—	
32	キク科	ヤブタバコ	<i>Carpesium abrotanoides</i>	—	—	
33	キキョウ科	ツリガネニンジン	<i>Adenophora triphylla</i>	—	—	
34	キキョウ科	ミソカクシ	<i>Lobelia chinensis</i>	—	—	
35	キキョウ科	ホタルブクロ	<i>Campanula punctata</i>	—	—	
36	ウリ科	スズメウリ	<i>Melothria japonica</i>	—	—	
37	オミナエシ科	オミナエシ	<i>Patrinia scabiosaeifolia</i>	要注目種	—	
38	オミナエシ科	オトコヨシ	<i>Patrinia villosa</i>	—	—	
39	アカネ科	アカネ	<i>Rubia argyi</i>	—	—	
40	アカネ科	ヘクソカズラ	<i>Paederia scandens</i>	—	—	
41	アカネ科	ヤエムグラ	<i>Galium aparine</i>	—	—	
42	オオバコ科	オオバコ	<i>Plantago asiatica</i>	—	—	
43	ゴマノハグサ科	イヌノフグリ	<i>Veronica didyma</i>	—	—	
44	ゴマノハグサ科	ムラサキサギゴケ	<i>Mazus miquelii</i>	—	—	
45	ゴマノハグサ科	トキワハゼ	<i>Mazus japonicus</i>	—	—	
46	ゴマノハグサ科	オオイヌノフグリ	<i>Veronica persica</i>	—	—	
47	ゴマノハグサ科	タチイヌノフグリ	<i>Veronica arvensis</i>	—	—	
48	ナス科	ワルナスビ	<i>Solanum carolinense</i>	—	—	
49	ナス科	ヒヨドリジョウゴ	<i>Solanum lyratum</i>	—	—	
50	ナス科	ハシリドコロ	<i>Scopolia japonica</i>	準絶滅危惧種	—	99
51	シソ科	キランソウ	<i>Ajuga decumbens</i>	—	—	
52	シソ科	ニシキゴロモ	<i>Ajuga yesoensis</i>	—	—	
53	シソ科	タツナミソウ	<i>Scutellaria indica</i>	—	—	
54	シソ科	ラショウモンカズラ	<i>Meehanian urticifolia</i>	—	—	
55	シソ科	カキドオシ	<i>Glechoma hederacea</i>	—	—	
56	シソ科	ウツボグサ	<i>Prunella vulgaris</i>	—	—	
57	シソ科	オドリコソウ	<i>Lamium album</i>	—	—	
58	シソ科	ホトケノザ	<i>Lamium amplexicaule</i>	—	—	
59	シソ科	ヒメオドリコソウ	<i>Lamium purpureum</i>	—	—	
60	シソ科	ヒキオコシ	<i>Isodon japonicus</i>	—	—	
61	シソ科	オカタツナミソウ	<i>Scutellaria brachyspica</i>	—	—	
62	シソ科	ミカエリソウ	<i>Leucosceptrum stellipilum</i>	—	—	

	科	和 名	学 名	カテゴリー		頁
				京都府 RDB	環境省 RDB	
63	シソ科	アキギリ	<i>Salvia glabrescens</i>	—	—	
64	クマツツ科	カリガネソウ	<i>Caryopteris divaricata</i>	準絶滅危惧種	—	99
65	ムラサキ科	キュウリグサ	<i>Trigonotis peduncularis</i>	—	—	
66	ムラサキ科	ルリソウ	<i>Omphalodes krameri</i>	—	—	
67	ヒルガオ科	ヒルガオ	<i>Calystegia japonica</i>	—	—	
68	ヒルガオ科	コヒルガオ	<i>Calystegia hederacea</i>	—	—	
69	ヒルガオ科	ルコウソウ	<i>Quamoclit vulgaris</i>	—	—	
70	ヒルガオ科	ネナシカズラ	<i>Cuscuta japonica</i>	—	—	
71	ガガイモ科	ガガイモ	<i>Metaplexis japonica</i>	—	—	
72	リンドウ科	センブリ	<i>Swertia japonica</i>	要注目種	—	100
73	リンドウ科	アケボノソウ	<i>Ophelia bimaculata</i>	—	—	
74	リンドウ科	ツルリンドウ	<i>Tripterospermum japonicum</i>	—	—	
75	リンドウ科	<u>リンドウ</u>	<i>Gentiana scabra</i>	要注目種	—	
76	リンドウ科	<u>ハルリンドウ</u>	<i>Gentiana thunbergii</i>	絶滅寸前種	—	100
77	サクラソウ科	オカトラノオ	<i>Lysimachia clethroides</i>	—	—	
78	ツツジ科	イワナシ	<i>Epigaea asiatica</i>	—	—	
79	イチヤクソウ科	ギンリョウソウ	<i>Monotropastrum humile</i>	—	—	
80	セリ科	セリ	<i>Oenanthe javanica</i>	—	—	
81	セリ科	ドクゼリ	<i>Cicuta virosa</i>	—	—	
82	セリ科	ヤブジラミ	<i>Torilis japonica</i>	—	—	
83	セリ科	シシウド	<i>Angelica pubescens</i>	—	—	
84	セリ科	ハナウド	<i>Heracleum nipponicum</i>	—	—	
85	アカバナ科	マツヨイグサ	<i>Oenothera striata</i>	—	—	
86	ウコギ科	ウド	<i>Aralia cordata</i>	—	—	
87	アカバナ科	メマツヨイグサ	<i>Oenothera biennis</i>	—	—	
88	アカバナ科	チョウジタデ	<i>Ludwigia epilobioides</i>	—	—	
89	ミソハギ科	ミソハギ	<i>Lythrum anceps</i>	—	—	
90	スミレ科	ヒメスミレ	<i>Viola minor</i>	—	—	
91	スミレ科	<u>ノジスミレ</u>	<i>Viola yedoensis</i>	準絶滅危惧種	—	101
92	スミレ科	シロスミレ	<i>Viola patrinii</i>	—	—	
93	スミレ科	コスミレ	<i>Viola japonica</i>	—	—	
94	スミレ科	サクラスミレ	<i>Viola hirtipes</i>	—	—	
95	スミレ科	シハイスミレ	<i>Viola violacea</i>	—	—	
96	スミレ科	スミレサイシン	<i>Viola vaginata</i>	—	—	
97	スミレ科	スミレ	<i>Viola mandshurica</i>	—	—	
98	スミレ科	ナガバノスミレサイシン	<i>Viola bisseti</i>	—	—	
99	スミレ科	ニオイスミレ	<i>Viola odorata</i>	—	—	
100	スミレ科	フモトスミレ	<i>Viola sieboldii</i>	—	—	
101	スミレ科	ツボスミレ	<i>Viola verecunda</i>	—	—	
102	オトギリソウ科	オトギリソウ	<i>Hypericum erectum</i>	—	—	
103	ツリフネソウ科	キツリフネ	<i>Impatiens noli-tangere</i>	—	—	101
104	ツリフネソウ科	ツリフネソウ	<i>Impatiens textori</i>	—	—	
105	トウダイグサ科	トウダイグサ	<i>Euphorbia helioscopia</i>	—	—	
106	トウダイグサ科	ナツトウダイ	<i>Euphorbia sieboldiana</i>	—	—	
107	カタバミ科	カタバミ	<i>Oxalis corniculata</i>	—	—	
108	カタバミ科	ミヤマカタバミ	<i>Oxalis griffithii</i>	—	—	

	科	和 名	学 名	カテゴリー		頁
				京都府 RDB	環境省 RDB	
109	カタバミ科	ムラサキカタバミ	<i>Oxalis corymbosa</i>	—	—	
110	フウロンソウ科	ゲンノショウコ	<i>Geranium nepalense</i>	—	—	
111	マメ科	ネコハギ	<i>Lespedeza pilosa</i>	—	—	
112	マメ科	カラスノエンドウ	<i>Vicia angustifolia</i>	—	—	
113	マメ科	ノアズキ	<i>Dunbaria villosa</i>	—	—	
114	マメ科	クズ	<i>Pueraria lobata</i>	—	—	
115	マメ科	ノササゲ (キツネササゲ)	<i>Dumasia truncata</i>	—	—	
116	マメ科	ゲンゲ (レンゲソウ)	<i>Astragalus sinicus</i>	—	—	
117	マメ科	ヤブツルアズキ	<i>Vigna angularis</i>	—	—	
118	バラ科	ヘビイチゴ	<i>Duchesnea chrysantha</i>	—	—	
119	ユキノシタ科	ヤマネコノメソウ	<i>Chrysosplenium macrostemon</i>	—	—	
120	ユキノシタ科	ユキノシタ	<i>Saxifraga stolonifera</i>	—	—	
121	バラ科	キジムシロ	<i>Potentilla fragarioides</i>	—	—	
122	バラ科	ワレモコウ	<i>Sanguisorba officinalis</i>	—	—	
123	ユキノシタ科	ネコノメソウ	<i>Chrysosplenium grayanum</i>	—	—	
124	ユキノシタ科	ノリウツギ	<i>Hydrangea paniculata</i>	—	—	
125	アブラナ科	タネツケバナ	<i>Cardamine flexuosa</i>	—	—	
126	アブラナ科	オランダガラシ	<i>Nasturtium officinale</i>	—	—	
127	アブラナ科	イヌガラシ	<i>Rorippa indica</i>	—	—	
128	アブラナ科	ナズナ	<i>Capsella bursa-pastoris</i>	—	—	
129	アブラナ科	イヌナズナ	<i>Draba nemorosa</i>	準絶滅危惧種	—	
130	アブラナ科	マルババコンソウ	<i>Cardamine tanakae</i>	—	—	
131	ケシ科	タケニグサ	<i>Macleaya cordata</i>	—	—	
132	ケシ科	キケマン	<i>Corydalis heterocarpa</i>	準絶滅危惧種	—	
133	ケシ科	ムラサキケマン	<i>Corydalis incisa</i>	—	—	
134	ケシ科	クサノオウ	<i>Chelidonium majus</i>	—	—	
135	メギ科	イカリソウ	<i>Epimedium grandiflorum</i>	—	—	
136	キンボウゲ科	キンボウゲ	<i>Ranunculus japonicus</i>	—	—	
137	キンボウゲ科	キツネノボタン	<i>Ranunculus silerifolius</i>	—	—	
138	キンボウゲ科	センニンソウ	<i>Clematis terniflora</i>	—	—	
139	キンボウゲ科	ボタンツル	<i>Clematis apiifolia</i>	—	—	
140	キンボウゲ科	ニリンソウ	<i>Anemone flaccida</i>	—	—	102
141	キンボウゲ科	フクジュウソウ	<i>Adonis amurensis</i>	絶滅寸前種	絶滅危惧Ⅱ類	102
142	スイレン科	ヒツジグサ	<i>Nymphaea tetragona</i>	—	—	
143	ナデシコ科	カワラナデシコ	<i>Dianthus superbus</i>	—	—	
144	ナデシコ科	オランダミミナグサ	<i>Cerastium glomeratum</i>	—	—	
145	ナデシコ科	ウシハコベ	<i>Stellaria aquatica</i>	—	—	
146	ナデシコ科	フシグロセンノウ	<i>Lychnis miqueliana</i>	—	—	
147	ヒユ科	イノコズチ	<i>Achyranthes bidentata</i>	—	—	
148	ヤマゴボウ科	マルミヤマゴボウ	<i>Phytolacca japonica</i>	—	—	
149	ヤマゴボウ科	ヨウシュヤマゴボウ	<i>Phytolacca americana</i>	—	—	
150	タデ科	ギシギシ	<i>Rumex japonicus</i>	—	—	
151	タデ科	ミズヒキ	<i>Antenoron filiforme</i>	—	—	
152	タデ科	ママコノシリヌグイ	<i>Persicaria senticosa</i>	—	—	

	科	和 名	学 名	カテゴリー		頁
				京都府 RDB	環境省 RDB	
153	タデ科	ミソソバ	<i>Persicaria thunbergii</i>	—	—	
154	タデ科	アキノウナギツカミ	<i>Persicaria sagittata</i>	—	—	
155	タデ科	オオイヌタデ	<i>Polygonum lapathifolium</i>	—	—	
156	タデ科	イヌタデ	<i>Persicaria longiseta</i>	—	—	
157	タデ科	オオイタドリ	<i>Polygonum sachalinense</i>	—	—	
158	タデ科	ハルタデ	<i>Persicaria vulgaris</i>	—	—	
159	タデ科	イタドリ	<i>Polygonum japonica</i>	—	—	
160	タデ科	ヒメスイバ	<i>Rumex acetosella</i>	—	—	
161	タデ科	ヤナギタデ	<i>Persicaria hydropiper</i>	—	—	
162	ウマノスズクサ科	カンアオイ	<i>Heterotropa nipponica</i>	—	—	
163	ウマノスズクサ科	フタバアオイ	<i>Asarum caulescens</i>	—	—	
164	イラクサ科	ミヤコミズ	<i>Pilea kiotensis</i>	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅱ類	97
165	イラクサ科	サンショウソウ	<i>Pellionia minima</i>	—	—	
166	イラクサ科	ウバミソウ	<i>Elatostema umbellatum</i>	—	—	
167	イラクサ科	アカソ	<i>Boehmeria sylvestris</i>	—	—	
168	イラクサ科	クサマオ	<i>Boehmeria nipononivea</i>	—	—	
169	センリョウ科	フタリシズカ	<i>Chloranthus serratus</i>	—	—	
170	ドクダミ科	ドクダミ	<i>Houttuynia cordata</i>	—	—	
171	ドクダミ科	ハンゲショウ	<i>Saururus chinensis</i>	—	—	
172	ラン科	クマガイソウ	<i>Cypripedium japonicum</i>	絶滅寸前種	絶滅危惧Ⅱ類	98
173	ラン科	トンボソウ	<i>Tulotis ussuriensis</i>	—	—	
174	ラン科	ツチアケビ	<i>Galeola septentrionalis</i>	—	—	
175	ラン科	ネジバナ	<i>Spiranthes sinensis</i>	—	—	
176	ラン科	エビネ	<i>Calanthe discolor</i>	—	—	
177	ラン科	カマコリス	<i>Sarcochilus japonicus</i>	準絶滅危惧種	—	103
178	ラン科	シュンラン	<i>Cymbidium goeringii</i>	—	—	
179	ショウガ科	アオノクマタケラン	<i>Alpinia intermedia</i>	—	—	
180	ショウガ科	ミヨウガ	<i>Zingiber mioga</i>	—	—	
181	アヤメ科	シャガ	<i>Iris japonica</i>	—	—	
182	アヤメ科	ニワセキショウ	<i>Sisyrinchium angustifolium</i>	—	—	
183	ヤマノイモ科	タチドコロ	<i>Dioscorea gracillima</i>	—	—	
184	ヤマノイモ科	ヤマノイモ	<i>Dioscorea japonica</i>	—	—	
185	ユリ科	シライトソウ	<i>Chionographis japonica</i>	—	—	
186	ユリ科	ノギラン	<i>Metanarthecium luteo-viride</i>	—	—	
187	ユリ科	ショウジョウバカマ	<i>Heloniopsis orientalis</i>	—	—	
188	ユリ科	ホトトギス	<i>Tricyrtis hirta</i>	—	—	
189	ユリ科	オオバギボウシ	<i>Hosta sieboldiana</i>	—	—	
190	ユリ科	ヤブカンソウ	<i>Hemerocallis fulva</i>	—	—	
191	ユリ科	ノビル	<i>Allium grayi</i>	—	—	
192	ユリ科	ササユリ	<i>Lilium japonicum</i>	—	—	
193	ユリ科	ウバユリ	<i>Cardiocrinum cordatum</i>	—	—	
194	ユリ科	カタクリ	<i>Erythronium japonicum</i>	—	—	103
195	ユリ科	アマナ	<i>Tulipa edulis</i>	—	—	
196	ユリ科	ナルコユリ	<i>Polygonatum falcatum</i>	—	—	
197	ユリ科	チゴユリ	<i>Disporum smilacinum</i>	—	—	
198	ユリ科	ホウチャクソウ	<i>Disporum sessile</i>	—	—	

	科	和 名	学 名	カテゴリー		頁
				京都府 RDB	環境省 RDB	
199	ユリ科	ヤブラン	<i>Liriope muscari</i>	—	—	
200	ユリ科	ミヤマナルコユリ	<i>Polygonatum lasianthum</i>	—	—	
201	ユリ科	キツネノカミソリ	<i>Lycoris sanguinea</i>	—	—	
202	ユリ科	ヒガンバナ	<i>Lycoris radiata</i>	—	—	
203	イグサ科	イグサ	<i>Juncus effusus</i>	—	—	
204	イグサ科	スズメノヤリ	<i>Luzula capitata</i>	—	—	
205	ミズアオイ科	コナギ	<i>Monochoria vaginalis</i>	—	—	
206	ツユクサ科	イボクサ	<i>Murdannia keisak</i>	—	—	
207	ツユクサ科	ツユクサ	<i>Commelina communis</i>	—	—	
208	ツユクサ科	ヤブミョウガ	<i>Pollia japonica</i>	—	—	
209	ウキクサ科	ウキクサ	<i>Spirodela polyrhiza</i>	—	—	
210	サトイモ科	ウラシマンソウ	<i>Arisaema thunbergii</i>	—	—	
211	サトイモ科	オオマムシグサ	<i>Arisaema serratum</i>	—	—	
212	サトイモ科	カラスビシャク	<i>Pinellia ternata</i>	—	—	
213	サトイモ科	ホソバデナンショウ	<i>Arisaema serratum</i>	—	—	
214	サトイモ科	セキショウ	<i>Acorus gramineus</i>	—	—	
215	カヤツリグサ科	アブラガヤ	<i>Scirpus wichurae</i>	—	—	
216	カヤツリグサ科	カンスゲ	<i>Carex morrowii</i>	—	—	
217	カヤツリグサ科	ヒメカンスゲ	<i>Carex conica</i>	—	—	
218	イネ科	クサヨシ	<i>Phalaris arundinacea</i>	—	—	
219	イネ科	スズメノカタビラ	<i>Poa annua</i>	—	—	
220	イネ科	アシ	<i>Phragmites australis</i>	—	—	
221	イネ科	チヂミザサ	<i>Oplismenus undulatifolius</i>	—	—	
222	イネ科	チガヤ	<i>Imperata cylindrica</i>	—	—	
223	イネ科	アシボソ	<i>Microstegium vimineum</i>	—	—	
224	イネ科	ジュズダマ	<i>Coix lacryma-jobi</i>	—	—	
225	イネ科	イヌビエ	<i>Echinochloa crus-galli</i>	—	—	
226	イネ科	コブナグサ	<i>Arthraxon hispidus</i>	—	—	
227	イネ科	コバンソウ	<i>Briza maxima</i>	—	—	
228	オモダカ科	アギナシ	<i>Sagittaria aginashi</i>	—	—	
229	カヤツリグサ科	カヤツリグサ	<i>Cyperus microiria</i>	—	—	
230	オモダカ科	オモダカ	<i>Sagittaria trifolia</i>	—	—	
231	ガマ科	ヒメガマ	<i>Typha angustifolia</i>	—	—	
232	スベリヒユ科	スベリヒユ	<i>Portulacaceae oleracea</i>	—	—	
233	ツゲ科	フッキソウ	<i>Pachysandra terminalis</i>	—	—	
234	ハマウツボ科	ナンバンギセル	<i>Aeginetia indica</i>	—	—	
235	ヒシ科	ヒシ	<i>Trapa bispinosa</i>	—	—	
236	ヒルムシロ科	エビモ	<i>Potamogeton crispus</i>	—	—	
237	イチョウ科	イチョウ	<i>Ginkgo biloba</i>	—	—	
238	イチイ科	カヤ	<i>Torreya nucifera</i>	—	—	
239	ヒノキ科	ネズ (ネズミサシ)	<i>Juniperus rigida</i>	—	—	
240	イネ科	クマザサ	<i>Sasa veitchii</i>	—	—	
241	センリョウ科	センリョウ	<i>Chloranthus glaber</i>	—	—	
242	ブナ科	コナラ	<i>Quercus serrata</i>	—	—	
243	ブナ科	クヌギ	<i>Quercus acutissima</i>	—	—	

	科	和 名	学 名	カテゴリー		頁
				京都府 RDB	環境省 RDB	
244	ブナ科	シラカシ	<i>Quercus myrsinaefolia</i>	—	—	
245	ブナ科	アラカシ	<i>Quercus glauca</i>	—	—	
246	ブナ科	スダジイ	<i>Castanopsis sieboldii</i>	—	—	
247	ブナ科	イヌブナ	<i>Fagus japonica</i>	—	—	
248	ブナ科	アベマキ	<i>Quercus variabilis</i>	—	—	
249	ニレ科	エノキ	<i>Celtis sinensis</i>	—	—	
250	ニレ科	ムクノキ	<i>Aphananthe aspera</i>	—	—	
251	アケビ科	アケビ	<i>Akebia quina</i>	—	—	
252	アケビ科	ミツバアケビ	<i>Akebia trifoliata</i>	—	—	
253	アケビ科	ムベ (トキワアケビ)	<i>Stauntonia hexaphylla</i>	準絶滅危惧種	—	
254	ロウバイ科	ロウバイ	<i>Chimonanthus praecox</i>	—	—	
255	モクレン科	ホオノキ	<i>Magnolia Obovata</i>	—	—	
256	モクレン科	モクレン	<i>Magnolia quinquepeta</i>	—	—	
257	クスノキ科	クスノキ	<i>Cinnamomum camphora</i>	—	—	
258	クスノキ科	クロモジ	<i>Lindera umbellata</i>	—	—	
259	ユキノシタ科	ウツギ	<i>Deutzia crenata</i>	—	—	
260	バラ科	ウワミズザクラ	<i>Prunus grayana</i>	—	—	
261	バラ科	カナメモチ (アカメモチ)	<i>Photinia glabra</i>	—	—	
262	バラ科	クサイチゴ	<i>Rubus hirsutus</i>	—	—	
263	バラ科	ナワシロイチゴ	<i>Rubus parvifolius</i>	—	—	
264	バラ科	ニガイチゴ	<i>Rubus microphyllus</i>	—	—	
265	バラ科	フユイチゴ	<i>Rubus buergeri</i>	—	—	
266	バラ科	ヤマザクラ	<i>Prunus jamasakura</i>	—	—	
267	バラ科	ヤマブキ	<i>Kerria japonica</i>	—	—	
268	バラ科	ユキヤナギ	<i>Spiraea thunbergii</i>	要注目種	—	
269	ミカン科	イヌザンショウ	<i>Zanthoxylum schinifolium</i>	—	—	
270	ツゲ科	ツゲ	<i>Buxus microphylla</i>	—	—	
271	モチノキ科	クロガネモチ	<i>Ilex rotunda</i>	—	—	
272	モチノキ科	ソヨゴ	<i>Ilex pedunculosa</i>	—	—	
273	ブドウ科	ノブドウ	<i>Ampelopsis glandulosa</i>	—	—	
274	シナノキ科	ボダイジュ	<i>Tilia miqueliana</i>	—	—	
275	アオイ科	フヨウ	<i>Hibiscus mutabilis</i>	—	—	
276	アオイ科	ムクゲ	<i>Hibiscus syriacus</i>	—	—	
277	ツバキ科	サザンカ	<i>Camellia sasanqua</i>	—	—	
278	ツバキ科	ヒサカキ	<i>Eurya japonica</i>	—	—	
279	ツバキ科	ヤブツバキ	<i>Camellia japonica</i>	—	—	
280	キブシ科	キブシ	<i>Stachyurus praecox</i>	—	—	
281	ミソハギ科	サルスベリ	<i>Lagerstroemia indica</i>	—	—	
282	ウコギ科	タカノツメ	<i>Evodiopanax innovans</i>	—	—	
283	ウコギ科	タラノキ	<i>Aralia elata</i>	—	—	
284	ミズキ科	ハナミズキ	<i>Cornus florida</i>	—	—	
285	ツツジ科	ドウダンツツジ	<i>Enkianthus perulatus</i>	—	—	
286	ツツジ科	オオバスノキ	<i>Vaccinium smallii</i>	—	—	
287	ツツジ科	シャシャンボ	<i>Vaccinium bracteatum</i>	—	—	

	科	和 名	学 名	カテゴリー		頁
				京都府 RDB	環境省 RDB	
288	リョウブ科	リョウブ	<i>Clethra barbinervis</i>	—	—	
289	ヤブコウジ科	マンリョウ	<i>Ardisia crenata</i>	—	—	
290	ヤブコウジ科	ヤブコウジ	<i>Ardisia japonica</i>	—	—	
291	エゴノキ科	エゴノキ	<i>Styrax japonica</i>	—	—	
292	モクセイ科	キンモクセイ	<i>Osmanthus fragrans</i>	—	—	
293	モクセイ科	ネズミモチ	<i>Ligustrum japonicum</i>	—	—	
294	キョウチクトウ科	キョウチクトウ	<i>Nerium indicum</i>	—	—	
295	ナス科	クコ	<i>Lycium chinense</i>	—	—	
296	スイカズラ科	スイカズラ	<i>Lonicera japonica</i>	—	—	
297	スイカズラ科	オオデマリ	<i>Viburnum plicatum</i>	—	—	
298	スイカズラ科	ガマズミ	<i>Viburnum dilatatum</i>	—	—	
299	スイカズラ科	ヤブデマリ	<i>Viburnum plicatum</i>	—	—	
300	サルナシ科	サルナシ	<i>Actinidia arguta</i>	—	—	
301	ベニガクカ科	アマチャ	<i>Hidrangea macrophylla</i>	—	—	

植 物 ミヤコミズ (都水)

分 類：イラクサ科

被子植物（双子葉離弁花類）

学 名：*Pilea kiotensis*

◎京都府カテゴリー：絶滅寸前種

◎環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU）



（撮影：阪本 伊三雄）

解 説：岩石などの多い地形の山林地に自生する。京都府（特に南部）で発見されたことから、ミヤコミズと命名された。葉と茎はミズ独特の赤紫色を帯び、よほど注目しないと目立たない植物である。町内でも限られた一部にしか自生しておらず、特に大切に保存する必要がある。

植 物

クマガイソウ（熊谷草）

分 類：ラン科
被子植物（単子葉類）

学 名： *Cypripedium japonicum*

◎京都府カテゴリー：絶滅寸前種

◎環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU）



（撮影：阪本 伊三雄）

解 説：山地の林床や竹やぶに群生する多年草。葉は10～20 cmの扇円形で2枚が対生する。花は大きく径8～10 cm位で、淡黄緑色の花被片に紅紫色の脈がある大きな袋状の唇弁がある。武将 熊谷直実（くまがや なおざね）が背負った母衣にたとえて命名された。森林の伐採や乱獲により、絶滅の一途をたどる。町内でも絶滅が危惧されている。

植 物 ハシリドコロ（走所）

分 類：ナス科
被子植物（双子葉合弁花類）
学 名：*Scopolia japonica*

◎京都府カテゴリー：準絶滅危惧種
◎環境省カテゴリー：－



（撮影：阪本 伊三雄）

解 説

谷間の林内に生える多年草。全体に無毛で結節のある太い地下茎がある。葉は卵状楕円形で大きく軟らかな全緑。春に葉脇から暗紫色の花をつける。猛毒植物であり、もし誤って食すると幻覚症状をおこし、ところ構わず走り回るとの医学症例があり、命名もそこからきている。4～5月ごろに開花する。

植 物 カリガネソウ（雁草）

分 類：クマツツラ科
被子植物（双子葉合弁花類）
学 名：*Caryopteris divaricata*

◎京都府カテゴリー：準絶滅危惧種
◎環境省カテゴリー：－



（撮影：阪本 伊三雄）

解 説

山地の陽陰を好み、高さ1mほどの多年草。全体的に強い臭気があり、“丁字の魔法使い”と呼ばれている。上部の葉の脇から、長い柄をもつ集散花序をだし、青紫色の花をつけ、和名のカリガネソウは、花の形状から、雁草の意味からきたものである。町内での株数が非常に少なく、大切に保全する必要がある。花期は8～9月、山地に生育する。

植 物 センブリ (千振)

分 類：リンドウ科
被子植物 (双子葉合弁花類)
学 名： *Swertia japonica*

◎京都府カテゴリー：要注目種
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：阪本 伊三雄)

解 説

日当たりの良いところに生える2年草。根は黄色を帯び、茎は直立して枝分かれしている。10～20 cm位になる。花冠は白色で5深裂して、紫色の筋がある。古くから胃腸薬として煎じて服用されているが、千回振り出しても、まだ苦いのでこの名がある。町内でも、どんどん姿を消してきている。大切にしておきたい。

植 物 ハルリンドウ (春竜胆)

分 類：リンドウ科
被子植物 (双子葉合弁花類)
学 名： *Gentiana thumbergii*

◎京都府カテゴリー：絶滅寸前種
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：阪本 伊三雄)

解 説

日当たりの良いやや湿った山野に分布する2年草。全体に淡緑色を帯びており、高さ10 cmぐらになる。先端に青紫色の花を1個上向きにつける。花冠は2～3 cmで漏斗状をしている。花期は3～5月ごろ。年々減少の一途にあり、大切に保存しておきたいものである。

植 物 ノジスミレ（野地堇）

分 類：スミレ科
被子植物（双子葉離弁花類）

学 名： *Viola yedoensis*

◎京都府カテゴリー：準絶滅危惧種

◎環境省カテゴリー：－



（撮影：阪本 伊三雄）

解 説

日当たりの良い道端や里山の小道などに自生する。花はスミレによく似ているが、根は白く、葉は立たず、開花はスミレより早い。花は2 cmぐらい。淡紫色や青味がかかった紫色など、その自生する環境により多少の変化がある。よい芳香がある。花期は、3～4月ごろ。

植 物 キツリフネ（黄釣舟）

分 類：ツリフネソウ科
被子植物（双子葉離弁花類）

学 名： *Impatiens noli-tangere*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



（撮影：阪本 伊三雄）

解 説

山地や谷筋の湿り気のあるところに自生する1年草。高さ40～80 cm位になる。黄色の花が細かい花柄の先端に垂れ下がり、可憐である。紅紫色花のツリフネソウは多く見られるが、キツリフネはだんだんと姿を消しつつある。町内でも生植が限られてきている。

植 物 ニリンソウ（二輪草）

分 類：キンポウゲ科
被子植物（双子葉離弁花類）

学 名：*Anemone flaccida*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



（撮影：阪本 伊三雄）

解 説

林の縁や林内に合わせ、里山の土手などに生える多年草。町内で植生地がだんだんと減少しており、大切にしていきたい。花は白く、2輪つけるが1輪や3輪の時もある。

植 物 フクジュソウ（福寿草）

分 類：キンポウゲ科
被子植物（双子葉離弁花類）
学 名：*Adonis amurensis (ramosa)*

◎京都府カテゴリー：絶滅寸前種

◎環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU）



（撮影：阪本 伊三雄）

解 説

日本の固有種で北海道と本州に分布する多年草。落葉広葉樹の林縁や林床に生育する。花期が1～4月ごろと早いので、正月用の飾り盆鉢とされる。花は黄色で光沢がある。最近は観賞用の栽培種の野放しもあり、野生種との見分けが難しい。自生地の保護に注意していきたい。

植 物 カ ヤ ラ ン (榧蘭)

分 類：ラン科
被子植物 (双子葉離弁花類)

学 名： *Sarcochilus japonicus*

◎京都府カテゴリー：準絶滅危惧種

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：阪本 伊三雄)

解 説

森林内の樹幹に着生する多年草。葉は被針形で、2列に互生する。花茎は2～4 cmで5～6個の淡黄色の小さな花をつける。和名は樹木の榧（かや）の葉に似ているところから付けられた。3～5月ごろに開花し、最近は山野草の愛好として乱獲されている。大切に守っていききたいものである。

植 物 カ タ ク リ (片栗)

分 類：ユリ科
被子植物 (単子葉類)

学 名： *Erythronium japonicum*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：阪本 伊三雄)

解 説

山野に群生する多年草。高さ15 cmほどの茎の先に紅紫色の花を付ける。りん茎からはカタクリ粉を作ってきた。最近ではどんどん姿を消してきており、大切に守っていききたいものである。

菌 類

【調査結果の概要】

日本のきのこは記載されているものが約 2,000 種、おそらく 5,000 種以上が分布していると考えられており、全体の半数以上が不明種というのが現状である。環境省や京都府が野生生物のレッドデータを紹介しているが、菌類（きのこ）については過去の調査データが少なく、実際のレッドデータとはなっていない。例えば、京都府のリストには、様々な昆虫から発生する冬虫夏草類、発見することが難しく調査データが極めて少ない地下生菌、もともとあまり見られない種類などがあげられている。菌類リストについての日本の現状は、様々な地域で多くの調査を行い、得られたデータのデータベース化を進めて包括的に現状を把握すべき段階にある。今回の調査もそのための基礎データの充実に目的としたものである。

菌類の調査は、宇治田原町内できのこが発生しそうな場所を中心に、適宜行った。種類によって発生時期が異なり、また発生期間が短いものが多いため、すべてのものを調査することはできなかった。主な種類はリストアップできたと考えているが、今後はさらに調査を進めリストの充実を図りたいと思っている。確認できた種類は 115 種で、その内、京都府レッドデータブックに記載されているものは 3 種、すべて準絶滅危惧種であった。食用としてよく知られている種には、ハタケシメジ、マツタケ、エノキタケ、ヤマドリタケモドキ、クロカワ等があった。貴重な資源として繁殖させる試みも必要であろう。また、多くの毒きのこもみつかり、安全に関する教育も必要と思われる。

	科	和 名	学 名	カテゴリー		頁
				京都府 RDB	環境省 RDB	
1	ヒラタケ科	マツオウジ	<i>Neolentinus lepideus</i>	—	—	
2	ヌメリガサ科	トガリツキミタケ	<i>Hygrocybe acutoconica</i>	—	—	
3	ヌメリガサ科	ベニヒガサ	<i>Hygrocybe cantharellus</i>	—	—	
4	キシメジ科	ハタケシメジ	<i>Lyophyllum decastes</i>	—	—	110
5	キシメジ科	オオキツネタケ	<i>Laccaria bicolor</i>	—	—	110
6	キシメジ科	カレバキツネタケ	<i>Laccaria vinaceoavellanea</i>	—	—	
7	キシメジ科	キツネタケ	<i>Laccaria laccata</i>	—	—	
8	キシメジ科	カヤタケ属	<i>Clitocybe sp.</i>	—	—	
9	キシメジ科	ムラサキシメジ	<i>Lepista nuda</i>	—	—	111
10	キシメジ科	ムラサキシメジ属	<i>Lepista sp.</i>	—	—	
11	キシメジ科	マツタケ	<i>Tricholoma matsutake</i>	準絶滅危惧種	—	108
12	キシメジ科	キシメジ属	<i>Tricholoma sp.</i>	—	—	
13	キシメジ科	スギヒラタケ	<i>Pleurocybella porrigens</i>	—	—	111
14	キシメジ科	モリノカレバタケ属	<i>Collybia sp.</i>	—	—	
15	キシメジ科	ビロードツエタケ	<i>Oudemansiella pudens</i>	—	—	112
16	キシメジ科	スギエダタケ	<i>Strobilurus ohshimae</i>	—	—	112

	科	和 名	学 名	カテゴリー		頁
				京都府 RDB	環境省 RDB	
17	キシメジ科	オオホウライタケ	<i>Marasmius maximus</i>	—	—	
18	キシメジ科	シバフタケ	<i>Marasmius oreades</i>	—	—	
19	キシメジ科	ホウライタケ属	<i>Marasmius sp.</i>	—	—	
20	キシメジ科	シロホウライタケ	<i>Marasmiellus candidus</i>	—	—	
21	キシメジ科	チシオタケ	<i>Mycena haematopus</i>	—	—	
22	キシメジ科	ヒメカバイロタケ	<i>Xeromphalina campanella</i>	—	—	
23	キシメジ科	エノキタケ	<i>Flammulina velutipes</i>	—	—	113
24	テングタケ科	テングタケダマシ	<i>Amanita sychnopyraxis</i>	—	—	
25	テングタケ科	テングタケ	<i>Amanita pantherina</i>	—	—	113
26	テングタケ科	カバイロツルタケ	<i>Amanita fulva</i>	—	—	
27	テングタケ科	ツルタケダマシ	<i>Amanita spreata</i>	—	—	
28	テングタケ科	ドクツルタケ	<i>Amanita virosa</i>	—	—	114
29	テングタケ科	コタマゴテングタケ	<i>Amanita citrina var. citrina</i>	準絶滅危種	—	
30	テングタケ科	クロコタマゴテングタケ	<i>Amanita citrina var. grisea</i>	—	—	
31	テングタケ科	コテングタケモドキ	<i>Amanita pseudoporphyria</i>	—	—	114
32	テングタケ科	フクロツルタケ	<i>Amanita volvata</i>	—	—	115
33	テングタケ科	タマシロオニタケ	<i>Amanita abrupta</i>	—	—	
34	テングタケ科	シロオニタケモドキ	<i>Amanita hongoi</i>	—	—	
35	テングタケ科	シロオニタケ	<i>Amanita virgineoides</i>	—	—	115
36	テングタケ科	テングタケ属	<i>Amanita sp.</i>	—	—	
37	ハラタケ科	コガネキヌカラカサタケ	<i>Leucocoprinus birnbaumii</i>	—	—	
38	ハラタケ科	ザラエノハラタケ	<i>Agaricus subrutilescens</i>	—	—	116
39	ハラタケ科	ナカグロモリノカサ	<i>Agaricus praeclaresquamosus</i>	—	—	
40	ハラタケ科	ハラタケ属	<i>Agaricus sp.</i>	—	—	
41	ハラタケ科	ワタカラカサタケ	<i>Lepiota clypeolaria</i>	—	—	
42	ハラタケ科	コガネタケ	<i>Phaeolepiota aurea</i>	—	—	116
43	オキナタケ科	フミツキタケ	<i>Agrocybe praecox</i>	—	—	
44	オキナタケ科	ハタケキノコ	<i>Agrocybe semiorbicularis</i>	—	—	
45	モエギタケ科	ニガクリタケ	<i>Hypholoma fasciculare</i>	—	—	117
46	モエギタケ科	ニガクリタケモドキ	<i>Hypholoma gracile</i>	—	—	
47	モエギタケ科	ヒカゲシビレタケ	<i>Psilocybe argentipes</i>	—	—	117
48	フウセンタケ科	キイロアセタケ	<i>Inocybe lutea</i>	—	—	
49	フウセンタケ科	トビチャニセフウセンタケ	<i>Cortinarius fasciatus</i>	—	—	
50	フウセンタケ科	フウセンタケ属	<i>Cortinarius sp.</i>	—	—	
51	フウセンタケ科	ササタケ	<i>Dermocybe cinnamomea</i>	—	—	
52	フウセンタケ科	ケコガサタケ	<i>Galerina vittaeformis</i>	—	—	
53	イッボンシメジ科	キイボカサタケ	<i>Entoloma muraii</i>	—	—	118
54	イッボンシメジ科	シロイボカサタケ	<i>Entoloma murrai f. album</i>	—	—	
55	イッボンシメジ科	コンイロイッボンシメジ	<i>Entoloma subnitidum f. cyanonigrum</i>	—	—	
56	イッボンシメジ科	ヒメコンイロイッボンシメジ	<i>Entoloma coelestinus var. violaceus</i>	—	—	
57	イッボンシメジ科	ミイノモミウラモドキ	<i>Entoloma conferendum</i>	—	—	
58	ヒダハタケ科	ニワタケ	<i>Paxillus atrotomentosus</i>	—	—	
59	オウギタケ科	オウギタケ	<i>Gomphidius roseus</i>	—	—	
60	オウギタケ科	フサクギタケ	<i>Chroogomphus tomentosus</i>	—	—	
61	オニイグチ科	オニイグチモドキ	<i>Strobilomyces confusus</i>	—	—	
62	オニイグチ科	コオニイグチ	<i>Strobilomyces seminudus</i>	—	—	

	科	和 名	学 名	カテゴリー		頁
				京都府 RDB	環境省 RDB	
63	オニイグチ科	ミヤマベニイグチ	<i>Boletellus obscurecoccineus</i>	—	—	
64	オニイグチ科	ヤシャイグチ属	<i>Austroboletus</i> sp.	—	—	
65	イグチ科	キクハナイグチ	<i>Boletellus emodensis</i>	—	—	
66	イグチ科	ヌメリイグチ	<i>Suillus luteus</i>	—	—	118
67	イグチ科	チチアワタケ	<i>Suillus granulatus</i>	—	—	119
68	イグチ科	アミタケ	<i>Suillus bovinus</i>	—	—	119
69	イグチ科	イロガワリキヒダタケ	<i>Phylloporus bellus</i> var. <i>cyanescens</i>	—	—	
70	イグチ科	キッコウアワタケ	<i>Xerocomus chrysenteron</i>	—	—	
71	イグチ科	アワタケ近縁種	<i>Xerocomus spadiceus</i>	—	—	
72	イグチ科	ヤマドリタケモドキ	<i>Boletus reticulatus</i>	—	—	
73	イグチ科	ニセアシベニイグチ	<i>Boletus pseudocalopus</i>	—	—	
74	イグチ科	キアミアシイグチ	<i>Boletus ornatipes</i>	—	—	
75	イグチ科	アカジコウ	<i>Boletus speciosus</i>	—	—	
76	イグチ科	アケボノヤマドリタケ	<i>Boletus regius</i>	—	—	
77	イグチ科	ニガイグチモドキ	<i>Tylopilus neofelleus</i>	—	—	
78	イグチ科	ニガイグチ属	<i>Tylopilus</i> sp.	—	—	
79	イグチ科	スミゾメヤマイグチ	<i>Leccinum griseum</i>	—	—	
80	ベニタケ科	シロハツ	<i>Russula delica</i>	—	—	
81	ベニタケ科	シロハツモドキ	<i>Russula japonica</i>	—	—	
82	ベニタケ科	クロハツモドキ	<i>Russula densifolia</i>	—	—	
83	ベニタケ科	アカカバイロタケ	<i>Russula compacta</i>	—	—	
84	ベニタケ科	キチャハツ	<i>Russula sororia</i>	—	—	
85	ベニタケ科	ニオイコベニタケ	<i>Russula bella</i>	—	—	
86	ベニタケ科	ドクベニタケ	<i>Russula emetica</i>	—	—	
87	ベニタケ科	ベニタケ属	<i>Russula</i> sp.	—	—	
88	ベニタケ科	チチタケ	<i>Lactarius volemus</i>	—	—	120
89	ベニタケ科	アシボソチチタケ	<i>Lactarius gracilis</i>	—	—	
90	ベニタケ科	ニオイワチチタケ	<i>Lactarius subzonarius</i>	—	—	120
91	ベニタケ科	チョウジチチタケ	<i>Lactarius quietus</i>	—	—	
92	ベニタケ科	キチチタケ	<i>Lactarius chrysorrheus</i>	—	—	121
93	ベニタケ科	ハツタケ	<i>Lactarius lividatus</i>	準絶滅危惧種	—	109
94	スエヒロタケ科	スエヒロタケ	<i>Schizophyllum commune</i>	—	—	
95	シロソウメンタケ科	ベニナギナタタケ	<i>Clavaria aurantio-cinnabarina</i>	—	—	121
96	カノシタ科	カノシタ	<i>Hydnum repandum</i>	—	—	
97	イボタケ科	キブリイボタケ	<i>Thelephora multipartita</i>	—	—	
98	イボタケ科	ケロウジ	<i>Sarcodon scabrosus</i>	—	—	
99	イボタケ科	クロカワ	<i>Boletopsis leucomelaena</i>	—	—	
100	サルノコシカケ科	ニッケイタケ	<i>Coltricia cinnamomea</i>	—	—	
101	サルノコシカケ科	ヒイロタケ	<i>Pycnoporus coccineus</i>	—	—	122
102	サルノコシカケ科	カワラタケ	<i>Trametes versicolor</i>	—	—	122
103	サルノコシカケ科	ハカワラタケ	<i>Trichaptum bifforme</i>	—	—	
104	マンネンタケ科	コフキサルノコシカケ	<i>Ganoderma applanatum</i>	—	—	
105	コツブタケ科	コツブタケ	<i>Pisolithus tinctorius</i>	—	—	
106	クチベニタケ科	クチベニタケ	<i>Calostoma japonicum</i>	—	—	
107	チャダイコケ科	チャダイコケ属	<i>Cyathus</i> sp.	—	—	
108	ヒメツチグリ科	シロツチガキ	<i>Geastrum fimbriatum</i>	—	—	

	科	和 名	学 名	カテゴリー		頁
				京都府 RDB	環境省 RDB	
109	ヒメツチグリ科	エリマキツチグリ	<i>Gaestrum triplex</i>	—	—	
110	ヒメツチグリ科	ヒメツチグリ属	<i>Gaestrum sp.</i>	—	—	
111	ホコリタケ科	ノウタケ	<i>Calvtia craniiformis</i>	—	—	
112	ホコリタケ科	ホコリタケ	<i>Lycoperdon perlatum</i>	—	—	
113	スッポンタケ科	コイヌノエフデ	<i>Jansia borneensis</i>	—	—	
114	スッポンタケ科	スッポンタケ	<i>Phallus impudicus</i>	—	—	
115	キクラゲ科	アラゲキクラゲ	<i>Auricularia polytricha</i>	—	—	

菌 類 マ ツ タ ケ (松茸)

分 類：キシメジ科

学 名： *Tricholoma matsutake*

◎京都府カテゴリー：準絶滅危惧種

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩瀬 剛二)

解 説：秋に、アカマツ林内地上に群生する。まれに梅雨時にも見られる。その他、クロマツ、ツガ、コメツガ、アカエゾマツ、ハイマツ等の森林にも発生することが知られている。菌根菌の一種で、生きたアカマツの根に菌根をつくって共生しており、人工栽培は未成功。中国では、広葉樹のナラ類にも共生している。しばしばリング状に発生する(菌輪をつくる)。中型～大型で、傘は初め球形、のち饅頭形から平らになる。表面は褐色の繊維状鱗片で覆われる。柄は長さ10～30 cm、つばがあり、つばより上は白色で、下部は傘と同様の褐色の鱗片で覆われる。肉はかたくて緻密、縦に裂ける繊維からなる。マツタケ臭と呼ばれる特異な香気があり、主成分はマツタケオールと桂皮酸メチル。国内産が減少し、近縁種が様々な国から輸入されている。

菌 類 ハ ッ タ ケ

分 類：ベニタケ科

学 名：*Lactarius lividatus*

◎京都府カテゴリー：準絶滅危惧種

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩瀬 剛二)

解 説：秋に二針葉マツ（アカマツ、クロマツ）林内地上に見られる菌根菌。中型で傘は黄褐色、濃い環紋がある。中央部が凹みじょうご形に反り返る。ひだは密で柄に垂生する。ワイン紅色を帯びる。全体に傷つけると暗赤色の乳液を出し、後に青緑色に変色するため、傘の裏側などに青緑色のしみが見られる場合が多い。柄は傘と同色で内部は中空。茨城県等で好まれ、秋のきのこ採集の標的となっている。名前の由来は秋に他のきのこよりも早く発生することに由来する。京都府 RDB では準絶滅危惧種に指定されているが広く見られる種類である。これまで、学名は長く *L. hatsudake* が使われてきたが、最近過去の文献が調べ直され、*L. lividatus* に訂正された。

菌 類 ハタケシメジ

分 類：キシメジ科

学 名：*Lyophyllum decastes*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩瀬 剛二)

解 説

春から秋、特に秋に道ばた、庭園などの埋もれ木から発生するとされている木材腐朽菌。実際には掘っても埋もれ木を発見することは難しい。通常、数本が束になって発生する。菌根性のホンシメジとよく似た場合もある。中型から大型で、傘は灰褐色から暗褐色。傘は開くと中央部がやや窪み、縁部が反り返る。ひだは密で類白色。柄は傘と同色かやや薄く、上部は淡色。肉は白色で柄は中実。大変美味しいきのこで、工場生産が始まっているが、手間がかかるのと収量が安定しないため、広く流通しているとは言えない。

菌 類 オオキツネタケ

分 類：キシメジ科

学 名：*Laccaria bicolor*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩瀬 剛二)

解 説

夏から秋に林縁や道路沿いの放尿跡や小動物の死体分解跡などに発生する菌根菌。傘は茶褐色から肉色。ひだは傘と同色でやや疎。柄は傘と同色で縦に繊維状の模様がある。根元には紫色の菌糸が見られる。近縁種に小型のキツネタケやキツネタケモドキがある。

菌 類 ムラサキシメジ

分 類：キシメジ科

学 名：*Lepista nuda*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩瀬 剛二)

解 説

10月～11月下旬に、雑木林内に群生する。中型～大型で、最初全体がきれいな紫色だが、老成するに従って色があせる。周囲の落ち葉をめくるときれいな紫色の菌糸マットが見られる。ある程度分解が進んだ落ち葉や腐植を養分にして成育する腐生菌。多くの落ち葉がたまった場所を好み、腐葉土などを使って栽培が可能。食用になるが、多少粉くさいので、好みが分かれる。

菌 類 スギヒラタケ

分 類：キシメジ科

学 名：*Pleurocybella porrigens*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩瀬 剛二)

解 説

夏から秋に主として針葉樹(多くはスギ)の古い倒木や切り株に重なって発生する木材腐朽菌。多くの場合、発生が見られるのはコケむした古い切り株である。小型で、傘はほとんど柄がない。粘性はなく全体が白色。ひだは幅が狭く、分岐してきわめて密。肉は白色で薄い。これまで、多くの図鑑類で食用として記載されてきたが、2004年度に腎臓病を患っている患者が食した場合、高頻度に急性脳症を発症し、死に至ることが報告され、現在注意を必要とするきのこである。

菌 類 ビロードツエタケ

分 類：キシメジ科

学 名：*Oudemansiella pudens*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩瀬 剛二)

解 説

夏から秋に広葉樹林内地上に発生する木材腐朽菌。小型から中型で傘表面は灰褐色の地に褐色のビロード状の細毛を密生する。ひだは疎、柄も密毛に覆われる。柄の基部は根状となり、地中深くもぐり、基質となる木材に直結する。

菌 類 スギエダタケ

分 類：キシメジ科

学 名：*Strobilurus ohshimae*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩瀬 剛二)

解 説

秋から初冬に主としてスギの落枝から発生する木材腐朽菌。傘は白色から灰色で表面には微毛がある。ひだは白色。柄は微毛に覆われ、橙黄褐色で中空。スギ林内に生える数少ない食用きのこの一種だが、小型なので食用としては利用しづらい。

菌 類 エノキタケ

分 類：キシメジ科

学 名：*Flammulina velutipes*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩瀬 剛二)

解 説

秋から初夏、特に冬に様々な広葉樹の枯れた幹や切り株状に多数が束生する。小型から中型で、傘は粘性が著しく、黄色から黄褐色。ひだはやや疎で白色からクリーム色。柄は軟骨質でかたく、表面は傘と同色からやや濃いものや暗褐色のものなどがあるが、暗褐色のものが普通。柄の上部はやや淡色となる、短い密毛に覆われている。栽培品は低温、弱光下で栽培されるため、白色もやし状となり、野生のものとは形態が大きく異なるが、野生のものも未熟なものは薄クリーム色で栽培品とよく似た感じである。野生のものはめめりがあり、非常に美味。

菌 類 テングタケ

分 類：テングタケ科

学 名：*Amanita pantherina*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩瀬 剛二)

解 説

夏から秋にブナ科広葉樹林内地上に発生する菌根菌。中型で傘は暗褐色から暗黄土褐色。全面に白色扁平状のいぼを散布する。柄は白色でささくれ状になる。上部につばがあり、根元には一重の白色のつばがある。毒きのこ。アカマツなどの針葉樹林には、やや大型でよく似たイボテングタケが生える。両者は混同されてきたが、最近の研究で分けられた。

菌 類 ドクツルタケ

分 類：テングタケ科
学 名： *Amanita virosa*

◎京都府カテゴリー：－
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩瀬 剛二)

解 説

夏から秋に針葉樹林や広葉樹林内地上に発生する菌根菌。中型から大型で傘は白色で条線はない。ひだは白色で密。柄は白色で表面にささくれ模様がある。上部に膜質状のつばがあり、基部には袋状の大きなつばがある。猛毒きのこととして有名で、毒性分はアマトキシシンやファロトキシシン類の環状ペプチドで、肝臓の細胞を破壊することで、死をもたらす。白色で非常に美しいきのこだが、最も危険度の高い毒きのこである。毒性分は熱に強く、調理しても分解されないので、要注意。

菌 類 コテングタケモドキ

分 類：テングタケ科
学 名： *Amanita pseudoporphyria*

◎京都府カテゴリー：－
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩瀬 剛二)

解 説

夏から秋にシイ、カシなどの広葉樹林内地上に発生する菌根菌。かなり大型になるきのこで、群生することが多い。傘は暗褐色から灰褐色。柄は白色で膜質のくずれやすいつばを持つ。また、基部には袋状のつばがある。これまでコテングタケモドキとされていたものの中には、形態的に似ている別種が混在していることがわかってきた。胃腸系と神経系の中毒を起こす毒きのこ。

菌 類 フクロツルタケ

分 類：テングタケ科
学 名： *Amanita volvata*

◎京都府カテゴリー：－
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩瀬 剛二)

解 説

夏から秋、特に夏に多く見られる菌根菌で、主にブナ科樹木（コナラやシイ、カシ類）の林内地上に発生する。中型。傘は白色から帯褐色で白色から淡紅褐色の粉状から綿屑状の小鱗片が付着する。ひだは白色で密。柄は白色で傘と同様の鱗片が付着したり、ささくれが見られる場合もある。つばはない。柄の基部には膜質状のつばがある。肉は傷つけると帯紅色に変色する。ドクツルタケと同様の猛毒きのこである。

菌 類 シロオニタケ

分 類：テングタケ科
学 名： *Amanita virgineoides*

◎京都府カテゴリー：－
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩瀬 剛二)

解 説

夏から秋にブナ科樹林内に発生する菌根菌。大型で、傘は白色、微粉に覆われる。錐状のいぼを多数つけるが脱落しやすい。ひだはクリーム色で密。柄は白色で綿質の細かい鱗片に覆われる。基部は棍棒状に膨らむ。乾燥すると独特の強くくさい臭いを発する。毒きのこ。

菌 類 ザラエノハラタケ

分 類：ハラタケ科

学 名：*Agaricus subrutilescens*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩瀬 剛二)

解 説

夏から秋、雑木林や針葉樹林ない地上に発生する腐生菌。落葉の堆積した部分から発生することが多い。中型から大型で、傘は暗赤褐色から紫褐色の繊維状。ひだは密で、初め白色だが成熟するとチョコレート色に変わる。柄にはつばがあり、つばからは綿屑状のささくれがある。胃腸系の中毒を起こすため、食べてはいけない。

菌 類 コガネタケ

分 類：ハラタケ科

学 名：*Phaeolepiota aurea*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩瀬 剛二)

解 説

夏から秋に庭園、道端に群生する腐生菌。かなり大型になる。全体がきなこに似た濃い黄土色の粉に覆われる。柄は縦じわがあり、大きな膜質のつばがある。食用とされてきたが、胃腸系の中毒を示す毒性分を含むので、注意が必要。

菌 類 ニガクリタケ

分 類：モエギタケ科

学 名：*Hypholoma fasciculare*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩瀬 剛二)

解 説

春から秋にほぼ一年中各種広葉樹や針葉樹の切り株、枯れた幹、登山道の木製階段等から発生する木材腐朽菌。群生することが多い。食用のクリタケと比べると黄色みが強い。ひだは硫黄色から暗紫褐色。肉は黄色で極めて強い苦みがある。死亡例もある猛毒きのこ。

菌 類 ヒカゲシビレダケ

分 類：モエギタケ科

学 名：*Psilocybe argenteipes*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩瀬 剛二)

解 説

夏から秋に林内地上に見られる腐生菌で、通常数本から10数本が束になって発生する。小型で傘は円錐状から釣り鐘形。中央部が突出する場合が多い。表面は暗褐色から黄土褐色。ひだは成熟すると紫褐色となる。柄は細長く、傘と同色で白色の繊維状鱗片が付着する。傷つけると青く変色する毒きのこ。幻覚性物質であるシロシビン類（シロシビン、シロシン）を多く含む。シロシビン類を含むきのこ類は厚生労働省によって麻薬原料植物として指定されており、採取し保持すると罪になる。

菌 類 キイボカサタケ

分 類：イッポンシメジ科
学 名： *Entoloma muraii*

◎京都府カテゴリー：－
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩瀬 剛二)

解 説

夏から秋に様々な林内地上に群生する腐生菌。スギ、ヒノキの植林地でも見られる。小型で傘中央部に鉛筆の芯状の突起を備える。全体が黄色で乾くと淡色になる。ひだは初め黄色だが、胞子が熟するとピンク色を帯びる。柄は中空、繊維状でねじれることが多い。食べると消化器系の中毒を起こすので、要注意。シロイボカサタケは本種の品種とされており、全体が黄白色である以外、本種と同じ。

菌 類 ヌメリイグチ

分 類：イグチ科
学 名： *Suillus luteus*

◎京都府カテゴリー：－
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩瀬 剛二)

解 説

夏から秋に二針葉マツ（アカマツ、クロマツ）林内地上に発生する菌根菌。傘は暗赤褐色から黄褐色。著しい粘性がある。管孔はレモン色から帯褐黄色。柄には膜質状のつばがあるが、消失することも多い。柄には褐色の細かい粒点がある。アルゼンチンでは非常に好まれているが、消化器系の中毒を起こすことがわかり、要注意。

菌 類 チチアワタケ

分 類：イグチ科

学 名： *Suillus granulatus*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩瀬 剛二)

解 説

夏から秋に二針葉マツ（アカマツ、クロマツ）林内地上に見られる菌根菌。若いマツ林に見られることが多い。傘は栗色で粘性がある。傘の裏側は管孔になり、淡黄色。若いときは、黄白色の乳液を分泌する。柄は淡黄色で褐色の細かい粒点が見られる。ヌメリイグチに似ているが、柄につばはない。毒性分は不明だが、胃腸系の中毒を起こす。

菌 類 アミタケ

分 類：イグチ科

学 名： *Suillus bovinus*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩瀬 剛二)

解 説

夏から秋に二針葉マツ（アカマツ、クロマツ）林内地上に発生する菌根菌。若齢林よりも成熟が進んだマツ林に見られることが多い。傘は薄いオレンジ色、肉桂色から黄土色で粘性がある。傘の裏側は管孔となる。柄は傘と同色かやや淡色。煮ると紫色になるが、食用としてよく知られている。近くにオウギタケが見られることも多い。

菌 類 チ チ タ ケ

分 類：ベニタケ科

学 名：*Lactarius volemus*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩瀬 剛二)

解 説

夏から秋に広葉樹林内地上の発生する菌根菌。中型で傘ビロード状で黄褐色から赤褐色。ひだは密で白色から淡黄色。傷つけると白色の乳液が多量に出て、後に褐色のしみとなる。柄は傘より淡色。乾燥させると干しニシンのような臭いが強くなる。栃木県ではチタケと呼び、うどんに入れて食す。

菌 類 ニオイワチチタケ

分 類：ベニタケ科

学 名：*Lactarius subzonarius*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩瀬 剛二)

解 説

夏から秋に広葉樹林内地上に発生する菌根菌。小型で傘は褐色と暗赤褐色の環紋が交互に見られる。ひだは柄に垂生し、密。傷つけると白色半透明の乳液が出るが、変色せず辛くない。特に、乾燥させるとカレー粉の臭いがあり、本種を特徴づける。

菌 類 キ チ タ ケ

分 類：ベニタケ科

学 名：*Lactarius chrysorrheus*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩瀬 剛二)

解 説

夏から秋にマツやコナラ等の雑木林内地上に発生する菌根菌。腐植がたまった林内に見られることも多い。傘は薄いオレンジ色から茶褐色で、同心円状の環紋が見られ、弱い粘性がある。柄は白色で中空。傷つけると初め白色でレモン色に変わる乳液が出る。乳液の味は辛い。毒性分は不明だが、胃腸系の中毒を起こす。

菌 類 ベニナギナタタケ

分 類：シロソウメンタケ科

学 名：*Clavulinopsis miyabeana*

◎京都府カテゴリー：－

◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩瀬 剛二)

解 説

夏から秋に林内地上に群生する腐生菌。円筒形から長い紡錘形。全体に鮮紅色だが退色しやすい。肉は鮮紅色から淡紅色でいくぶん強靱。形態のよく似た種類が複数知られており、再検討が必要なグループである。

菌 類 ヒイロタケ

分 類：サルノコシカケ科
学 名：*Pycnoporus coccineus*

◎京都府カテゴリー：－
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩瀬 剛二)

解 説

広葉樹や針葉樹枯れ木上に発生する木材腐朽菌（白色腐朽菌）。小型から中型で傘は半円形から扇形。表面は朱色で無毛。肉も朱色。傘の裏側は管孔となり、孔口はきわめて微細。

菌 類 カワラタケ

分 類：サルノコシカケ科
学 名：*Trametes versicolor*

◎京都府カテゴリー：－
◎環境省カテゴリー：－



(撮影：岩瀬 剛二)

解 説

夏から秋に、広葉樹や針葉樹の枯れ木に多数重なり合って発生する木材腐朽菌（白色腐朽菌）。小型から中型で傘は半円形から扇形で、薄く強靱。傘表面は暗褐色、濃青色、黒色など変異が大きい。短毛に覆われ、環紋を示す。肉は白色で、傘の裏側は管孔状。孔口は微細。抗ガン作用を示す成分を含み、このきのこから抗ガン剤クレスチンがつくられている。

さ く い ん

和 名		頁	和 名		頁
アオアシシギ	(鳥)	15	アベマキ	(植物)	95
アオイトトンボ	(陸棲昆虫)	65	アマゴ	(魚)	53・56
アオイトンボ	(水棲昆虫)	83	アマサギ	(鳥)	15
アオカナブン	(陸棲昆虫)	64	アマチャ	(植物)	96
アオゲラ	(鳥)	16	アマツバメ	(鳥)	16
アオサギ	(鳥)	15	アマナ	(植物)	93
アオジ	(鳥)	17	アマタケ	(菌)	106・119
アオスジアゲハ	(陸棲昆虫)	63	アメリカザリガニ	(甲殻)	86
アオダイショウ	(は虫)	41	アメリカセンダングサ	(植物)	90
アオノクマタケラン	(植物)	93	アメンボ	(陸棲昆虫)	65
アオバズク	(鳥)	16	アメンボ	(水棲昆虫)	83
アオハダトンボ	(陸棲昆虫)	65	アユ	(魚)	53・56
アオバト	(鳥)	16・22	アラカシ	(植物)	95
アオマツムシ	(陸棲昆虫)	65	アラゲキクラゲ	(菌)	107
アカカバイロタケ	(菌)	106	アワタケ近縁種	(菌)	106
アカゲラ	(鳥)	16・27	イカリソウ	(植物)	92
アカザ	(魚)	53・55	イカル	(鳥)	17
アカジコウ	(菌)	106	イカルチドリ	(鳥)	15
アカシジミ	(陸棲昆虫)	63	イグサ	(植物)	94
アカソ	(植物)	93	イソシギ	(鳥)	16・34
アカタテハ	(陸棲昆虫)	64・73	イタドリ	(植物)	93
アカネ	(植物)	90	イチモンジセセリ	(陸棲昆虫)	64
アカネズミ	(哺乳)	7・13	イチモンジチョウ	(陸棲昆虫)	64・71
アカハラ	(鳥)	17	イチョウ	(植物)	94
アカモズ	(鳥)	16	イトアメンボ	(水棲昆虫)	83
アキアカネ	(陸棲昆虫)	66	イナゴ	(陸棲昆虫)	65
アキギリ	(植物)	91	イヌガラシ	(植物)	92
アギナシ	(植物)	94	イヌザンショウ	(植物)	95
アキノウナギツカミ	(植物)	93	イヌタデ	(植物)	93
アゲハチョウ	(陸棲昆虫)	63	イヌナズナ	(植物)	92
アケビ	(植物)	95	イヌノフグリ	(植物)	90
アケボノソウ	(植物)	91	イヌビエ	(植物)	94
アケボノヤマドリタケ	(菌)	106	イヌブナ	(植物)	95
アサギマダラ	(陸棲昆虫)	63・70	イノコスチ	(植物)	92
アシ	(植物)	94	イボクサ	(植物)	94
アシボソ	(植物)	94	イロガワリキヒダタケ	(菌)	106
アシボソチチタケ	(菌)	106	イワツバメ	(鳥)	16
アトリ	(鳥)	17	イワナシ	(植物)	91
アブラガヤ	(植物)	94	ウキクサ	(植物)	94
アブラコウモリ	(哺乳)	7	ウグイス	(鳥)	17
アブラゼミ	(陸棲昆虫)	64	ウシガエル	(両生)	46・51
アブラハヤ	(魚)	53・57	ウシハコベ	(植物)	92

和 名		頁	和 名		頁
ウスバキトンボ	(陸棲昆虫)	66	オオバコ	(植物)	90
ウスラシギ	(鳥)	15	オオバスノキ	(植物)	95
ウソ	(鳥)	17	オオバニガナ	(植物)	90
ウツギ	(植物)	95	オオホウライタケ	(菌)	105
ウツボグサ	(植物)	90	オオмамシグサ	(植物)	94
ウド	(植物)	91	オオヤマカワゲラ	(水棲昆虫)	83
ウバタマムシ	(陸棲昆虫)	64	オオヨシキリ	(鳥)	17・38
ウバユリ	(植物)	93	オオルリ	(鳥)	17
ウラギンシジミ	(陸棲昆虫)	63	オカタツナミソウ	(植物)	90
ウラシマソウ	(植物)	94	オカトラノオ	(植物)	91
ウワバミソウ	(植物)	93	オカヨシガモ	(鳥)	15
ウワミズザクラ	(植物)	95	オケラ	(植物)	90
エゴノキ	(植物)	96	オシドリ	(鳥)	15・19
エソビタキ	(鳥)	17	オトギリソウ	(植物)	91
エゾムシクイ	(鳥)	17	オトコヨシ	(植物)	90
エダナナフシ	(陸棲昆虫)	65	オドリコソウ	(植物)	90
エナガ	(鳥)	17	オナガガモ	(鳥)	15
エノキ	(植物)	95	オニイグチモドキ	(菌)	105
エノキタケ	(菌)	105・113	オニノゲシ	(植物)	90
エビネ	(植物)	93	オニヤンマ	(陸棲昆虫)	65
エビモ	(植物)	94	オビカゲロウ	(水棲昆虫)	83
エリマキツチグリ	(菌)	107	オミナエシ	(植物)	90
エルタテハ	(陸棲昆虫)	64	オモダカ	(植物)	94
エルモンヒラタカゲロウ	(水棲昆虫)	83	オランダガラシ	(植物)	92
エンマコオロギ	(陸棲昆虫)	65	オランダミナグサ	(植物)	92
オイカワ	(魚)	53・57	オンパッター	(陸棲昆虫)	65
オウギタケ	(菌)	105	カイツブリ	(鳥)	15・29
オオアカゲラ	(鳥)	16	ガガイモ	(植物)	91
オオイタドリ	(植物)	93	カキドオシ	(植物)	90
オオイトトンボ	(水棲昆虫)	83	カケス	(鳥)	17
オオイヌダデ	(植物)	93	カジカガエル	(両生)	46
オオイヌノフグリ	(植物)	90	カシラダカ	(鳥)	17
オオオナモミ	(植物)	89	カスミサンショウウオ	(両生)	46～48
オオカマキリ	(陸棲昆虫)	65	カタクリ	(植物)	93・103
オオカワトンボ	(陸棲昆虫)	65・77	カタバミ	(植物)	91
オオカワトンボ	(水棲昆虫)	83	カダヤシ	(魚)	53・60
オオキツネタケ	(菌)	104・110	カッコウ	(鳥)	16
オオクチバス	(魚)	53・61	カナブン	(陸棲昆虫)	64
オオゴミムシ	(陸棲昆虫)	64	カナメモチ	(植物)	95
オオシオカラトンボ	(陸棲昆虫)	65	カネタタキ	(陸棲昆虫)	65
オオジシギ	(鳥)	16	カノシタ	(菌)	106
オオジュリン	(鳥)	17	カバイロツルタケ	(菌)	105
オオシロカゲロウ	(水棲昆虫)	83	カブトムシ	(陸棲昆虫)	64
オオタカ	(鳥)	15・20	ガマズミ	(植物)	96
オオデマリ	(植物)	96	カマドウマ	(陸棲昆虫)	65
オオバギボウシ	(植物)	93	カヤ	(植物)	94

和 名		頁	和 名		頁
カヤクグリ	(鳥)	16	キチョウ	(陸棲昆虫)	63
カヤタケ属	(菌)	104	キッコウアワタケ	(菌)	106
カヤツリグサ	(植物)	94	キツネアザミ	(植物)	90
カヤネズミ	(哺乳)	7・12	キツネタケ	(菌)	104
カヤラン	(植物)	93・103	キツネノカミソリ	(植物)	94
カラカネトンボ	(陸棲昆虫)	65	キツネノボタン	(植物)	92
カラスノエンドウ	(植物)	92	キツリフネ	(植物)	91・101
カラスビシャク	(植物)	94	キビタキ	(鳥)	17
カリガネソウ	(植物)	91	キブシ	(植物)	95
カルガモ	(鳥)	15	キブリエボタケ	(菌)	106
カレバキツネタケ	(菌)	104	キュウリグサ	(植物)	91
カウウ	(鳥)	15	キョウチクトウ	(植物)	96
カワガラス	(鳥)	16・36	キランソウ	(植物)	90
カワセミ	(鳥)	16・26	キリギリス	(陸棲昆虫)	65
カワトンボ	(水棲昆虫)	83	キレンジャク	(鳥)	16・36
カワニナ	(淡水産貝)	86	キンクロハジロ	(鳥)	15
カワムツ	(魚)	53・58	ギンブナ	(魚)	53・59
カワヨシノボリ	(魚)	53・62	キンボウゲ	(植物)	92
カワラタケ	(菌)	106・122	キンモクセイ	(植物)	96
カワラナデシコ	(植物)	92	キンモンガ	(陸棲昆虫)	64
カワラヒワ	(鳥)	17	ギンヤンマ	(陸棲昆虫)	65・79
カンアオイ	(植物)	93	ギンリョウソウ	(植物)	91
カンサイタンポポ	(植物)	90	クイナ	(鳥)	15・32
カンスゲ	(植物)	94	クコ	(植物)	96
カンタン	(陸棲昆虫)	65	クサイチゴ	(植物)	95
キアゲハ	(陸棲昆虫)	63	クサガメ	(は虫)	41・42
キアシシギ	(鳥)	16	クサキリ	(陸棲昆虫)	65
キアミアシグチ	(菌)	106	クサシギ	(鳥)	16
キイトトンボ	(陸棲昆虫)	65	クサノオウ	(植物)	92
キイボカサタケ	(菌)	105	クサマオ	(植物)	93
キイロアセタケ	(菌)	105	クサヨシ	(植物)	94
キイロカワカゲロウ	(水棲昆虫)	83	クズ	(植物)	92
キイロスズメバチ	(陸棲昆虫)	64	クスノキ	(植物)	95
キオン	(植物)	89	クチベニタケ	(菌)	106
キクイタダキ	(鳥)	17	クヌギ	(植物)	95
キクハナイグチ	(菌)	106	クマガイソウ	(植物)	93・98
キケマン	(植物)	92	クマザサ	(植物)	94
キシ	(鳥)	15・32	クマゼミ	(陸棲昆虫)	64
ギシギシ	(植物)	92	クマネズミ	(哺乳)	7
ギジバト	(鳥)	16	クロアゲハ	(陸棲昆虫)	63
ギジムシロ	(植物)	92	クロガネモチ	(植物)	95
キシメジ属	(菌)	104	クロカワ	(菌)	106
キセキレイ	(鳥)	16	クロゲンゴロウ	(水棲昆虫)	83・84
キタテハ	(陸棲昆虫)	64	クロコタマゴテングタケ	(菌)	105
キチチタケ	(菌)	106・121	クロジ	(鳥)	17・40
キチャハツ	(菌)	106	クロシジミ	(陸棲昆虫)	63

和 名		頁	和 名		頁
クロツグミ	(鳥)	17・38	コバンソウ	(植物)	94
クロハツモドキ	(菌)	106	コヒルガオ	(植物)	91
クロヒカゲ	(陸棲昆虫)	64	コフキサルノコシカケ	(菌)	106
クロモジ	(植物)	95	コフキトンボ	(陸棲昆虫)	65・80
ケコガサタケ	(菌)	105	コブナグサ	(植物)	94
ケリ	(鳥)	15	ゴマダラチョウ	(陸棲昆虫)	64・74
ケロウジ	(菌)	106	コミスジ	(陸棲昆虫)	64
ゲンゲ	(植物)	92	コムクドリ	(鳥)	17・40
ゲンジボタル	(陸棲昆虫)	64	コムラサキ	(陸棲昆虫)	64・74
ゲンジボタル	(水棲昆虫)	83・85	コヤマトンボ	(水棲昆虫)	83
ゲンノショウコ	(植物)	92	コルリ	(鳥)	17・37
コアオハナムグリ	(陸棲昆虫)	64	コンイロイッポンシメジ	(菌)	105
コアジサシ	(鳥)	16	サカハチチョウ	(陸棲昆虫)	64・72
コイ	(魚)	53・58	サカマキガイ	(淡水産貝)	86
ゴイサギ	(鳥)	15	サクラスミレ	(植物)	91
コイヌノエフデ	(菌)	107	ササゴイ	(鳥)	15・29
コウベモグラ	(哺乳)	7	ササタケ	(菌)	105
コウモリソウ	(植物)	90	ササユリ	(植物)	93
コウヤボウキ	(植物)	89	サザンカ	(植物)	95
コオイムシ	(水棲昆虫)	83	サシバ	(鳥)	15
コオニグチ	(菌)	105	サホコカゲロウ	(水棲昆虫)	83
コオニタビラコ	(植物)	90	サメビタキ	(鳥)	17
コオニヤンマ	(陸棲昆虫)	65	ザラエノハラタケ	(菌)	105・116
コオニヤンマ	(水棲昆虫)	83	サルスベリ	(植物)	95
コガタシマトビゲラ	(水棲昆虫)	83・85	サルナシ	(植物)	96
コガネキヌカラカサタケ	(菌)	105	サワオグルマ	(植物)	89
コガネタケ	(菌)	105・116	サワガニ	(甲殻)	86
コガモ	(鳥)	15	サンコウチョウ	(鳥)	17・28
コクワガタ	(陸棲昆虫)	64	サンショウソウ	(植物)	93
コグラ	(鳥)	16	シオカラトンボ	(陸棲昆虫)	65
コサギ	(鳥)	15	シオカラトンボ	(水棲昆虫)	83
コサナエ	(陸棲昆虫)	65	シオヤトンボ	(陸棲昆虫)	65
コサメビタキ	(鳥)	17・39	シシウド	(植物)	91
コシアカツバメ	(鳥)	16	ジシバリ	(植物)	90
コシアキトンボ	(陸棲昆虫)	66・82	シジュウカラ	(鳥)	17
コシボソヤンマ	(陸棲昆虫)	65・78	シハイスミレ	(植物)	91
コシボソヤンマ	(水棲昆虫)	83	シバフタケ	(菌)	105
コジユケイ	(鳥)	15	シマイシビル	(水棲昆虫)	83
コスミレ	(植物)	91	シマドジョウ	(魚)	53・59
コタマゴテングタケ	(菌)	105	シマヘビ	(は虫)	41・45
コチドリ	(鳥)	15	シメ	(鳥)	17
コツブタケ	(菌)	106	シャガ	(植物)	93
コテングタケモドキ	(菌)	105・114	ジャコウアゲハ	(陸棲昆虫)	63・69
コナギ	(植物)	94	シャヤンボ	(植物)	96
コナラ	(植物)	94	ジュウイチ	(鳥)	16
コノハズク	(鳥)	16・23	ジュズダマ	(植物)	94

和 名		頁	和 名		頁
シュレーゲルアオガエル	(両生)	46・52	センダイムシクイ	(鳥)	17
シュンラン	(植物)	93	センチコガネ	(陸棲昆虫)	64
ショウジョウトンボ	(陸棲昆虫)	65	センニンソウ	(植物)	92
ショウジョウバカマ	(植物)	93	センブリ	(植物)	91・100
ショウドウツバメ	(鳥)	16	センボンヤリ	(植物)	89
ショウビタキ	(鳥)	17	センリヨウ	(植物)	94
ショウリョウバッタ	(陸棲昆虫)	65	ソヨゴ	(植物)	95
シライトソウ	(植物)	93	ダイサギ	(鳥)	15
シラカシ	(植物)	95	ダイミョウセセリ	(陸棲昆虫)	64
シロイボカサタケ	(菌)	105	タカサブロウ	(植物)	89
シロオニタケ	(菌)	105・115	タカチホヘビ	(は虫)	41・44
シロオニタケモドキ	(菌)	105	タカノツメ	(植物)	95
シロスミレ	(植物)	91	タカハヤ	(魚)	53・57
シロタニガワカゲロウ	(水棲昆虫)	83	タカブシギ	(鳥)	16
シロチドリ	(鳥)	15	タガメ	(水棲昆虫)	83・84
シロツチガキ	(菌)	106	タケニグサ	(植物)	92
シロハツ	(菌)	106	タゲリ	(鳥)	15
シロハツモドキ	(菌)	106	タゴガエル	(両生)	46
シロハラ	(鳥)	17	タシギ	(鳥)	16
シロホウライタケ	(菌)	105	タチイヌノフグリ	(植物)	90
スイカズラ	(植物)	96	タチチコサ	(植物)	89
スエヒロタケ	(菌)	106	タチドコロ	(植物)	93
スギエダタケ	(菌)	104・112	タツナミソウ	(植物)	90
スギヒラタケ	(菌)	104・111	タネツケバナ	(植物)	92
スジエビ	(甲殻)	86	タヒバリ	(鳥)	16
スジグロシロチョウ	(陸棲昆虫)	63	タマシギ	(鳥)	15・33
スジシマドジョウ	(魚)	53・54	タマシロオニタケ	(菌)	105
スズムシ	(陸棲昆虫)	65	タラノキ	(植物)	95
スズメ	(鳥)	17	ダルマガエル	(両生)	46・49
スズメウリ	(植物)	90	チガヤ	(植物)	94
スズメノカタビラ	(植物)	94	チゴユリ	(植物)	93
スズメノヤリ	(植物)	94	チシオタケ	(菌)	105
スダジイ	(植物)	95	チチアワタケ	(菌)	106・119
スッポン	(は虫)	41	チチコグサ	(植物)	89
スッポンタケ	(菌)	107	チチタケ	(菌)	106・120
スベリヒユ	(植物)	94	チヂミザサ	(植物)	94
スミゾメヤマイグチ	(菌)	106	チャダイゴケ属	(菌)	106
スミレ	(植物)	91	チュウサギ	(鳥)	15・30
スミレサイシン	(植物)	91	チュウジシギ	(鳥)	16
セイヨウタンポポ	(植物)	90	チュウシャクシギ	(鳥)	16
セキショウ	(植物)	94	チョウゲンボウ	(鳥)	15
セグロアシナガバチ	(陸棲昆虫)	64	チョウジタデ	(植物)	91
セグロセキレイ	(鳥)	16	チョウジチチタケ	(菌)	106
セスジイトトンボ	(陸棲昆虫)	65	チョウセンイタチ	(哺乳)	7
セッカ	(鳥)	17	チョウセンカマキリ	(陸棲昆虫)	65
セリ	(植物)	91	チョウトンボ	(陸棲昆虫)	66・82

和 名		頁	和 名		頁
ツクツクボウシ	(陸棲昆虫)	64	ナナフシ	(陸棲昆虫)	65
ツグミ	(鳥)	17	ナベブタムシ	(水棲昆虫)	83
ツゲ	(植物)	95	ナルコユリ	(植物)	93
ツチアケビ	(植物)	93	ナワシロイチゴ	(植物)	95
ツチガエル	(両生)	46・51	ナンバンギセル	(植物)	94
ツツドリ	(鳥)	16	ニイニイゼミ	(陸棲昆虫)	64
ツバメ	(鳥)	16	ニオイコベニタケ	(菌)	106
ツボスミレ	(植物)	91	ニオイスミレ	(植物)	91
ツマキチョウ	(陸棲昆虫)	63・69	ニオイワチタケ	(菌)	106・120
ツマグロヒョウモン	(陸棲昆虫)	64	ニガイグチモドキ	(菌)	106
ツマグロヨコバイ	(陸棲昆虫)	64	ニガイグチ属	(菌)	106
ツミ	(鳥)	15	ニガイチゴ	(植物)	95
ツユクサ	(植物)	94	ニガクリタケ	(菌)	105・117
ツリガネニンジン	(植物)	90	ニガクリタケモドキ	(菌)	105
ツリフネソウ	(植物)	91	ニガナ	(植物)	90
ツルタケダマシ	(菌)	105	ニシキゴロモ	(植物)	90
ツルリンドウ	(植物)	91	ニセアシバニイグチ	(菌)	106
テングタケ	(菌)	105・113	ニッケイタケ	(菌)	106
テングタケダマシ	(菌)	105	ニホンアカガエル	(両生)	46・50
テングタケ属	(菌)	105	ニホンアマガエル	(両生)	46・50
テングチョウ	(陸棲昆虫)	63	ニホンイシガメ	(は虫)	41・43
トウダイグサ	(植物)	91	ニホンイタチ	(哺乳)	7・12
ドウダンツツジ	(植物)	95	ニホンイノシシ	(哺乳)	7
トガリツキミタケ	(菌)	104	ニホンイモリ	(両生)	46
トキワハゼ	(植物)	90	ニホンカナヘビ	(は虫)	41
ドクセリ	(植物)	91	ニホンザル	(哺乳)	7・10
ドクダミ	(植物)	93	ニホンジカ	(哺乳)	7・10
ドクツルタケ	(菌)	105・114	ニホンツキノワグマ	(哺乳)	7・8
ドクベニタケ	(菌)	106	ニホントカゲ	(は虫)	41
トゲナナフシ	(陸棲昆虫)	65	ニホンリス	(哺乳)	7
トノサマガエル	(両生)	46	ニリンソウ	(植物)	92・102
トノサマバッタ	(陸棲昆虫)	65	ニワゼキショウ	(植物)	93
ドバト (孵化鳥)	(鳥)	18	ニワタケ	(菌)	105
トビ	(鳥)	15	ニンギョウトビケラ	(水棲昆虫)	83
トビチャニセフウセンタケ	(菌)	105	ヌマエビ	(甲殻)	86・87
ドブネズミ	(哺乳)	7	ヌマガエル	(両生)	46
トモエガモ	(鳥)	15	ヌママツ	(魚)	53
トラツグミ	(鳥)	17・37	ヌメリイグチ	(菌)	106・118
ドンコ	(魚)	53・62	ネキトンボ	(陸棲昆虫)	66・81
トンボソウ	(植物)	93	ネコノメソウ	(植物)	92
ナカグロモリノカサ	(菌)	105	ネコハギ	(植物)	92
ナガサキアゲハ	(陸棲昆虫)	63・67	ネジバナ	(植物)	93
ナガバノスミレサイシン	(植物)	91	ネズ	(植物)	94
ナズナ	(植物)	92	ネズミモチ	(植物)	96
ナツアカネ	(陸棲昆虫)	65	ネナシカズラ	(植物)	91
ナツトウダイ	(植物)	91	ノアザミ	(植物)	90

和 名		頁	和 名		頁
ノアズキ	(植物)	92	ハンミョウ	(陸棲昆虫)	64・75
ノウサギ	(哺乳)	7・13	ヒイロタケ	(菌)	106・122
ノウタケ	(菌)	107	ヒオドシチョウ	(陸棲昆虫)	64・73
ノギカワガラ	(水棲昆虫)	83	ヒカゲシビレタケ	(菌)	105・117
ノギラン	(植物)	93	ヒガラ	(鳥)	17
ノコギリクワガタ	(陸棲昆虫)	64	ヒガンバナ	(植物)	94
ノゴマ	(鳥)	17	ヒキオコシ	(植物)	90
ノササゲ	(植物)	92	ヒクイナ	(鳥)	15・33
ノシスミレ	(植物)	91・101	ヒグラシ	(陸棲昆虫)	64・75
ノシメトンボ	(陸棲昆虫)	66	ヒサカキ	(植物)	95
ノスリ	(鳥)	15・31	ヒシ	(植物)	94
ノビタキ	(鳥)	17	ヒダサンショウウオ	(両生)	46～48
ノビル	(植物)	93	ヒツジゲサ	(植物)	92
ノブドウ	(植物)	95	ヒトリガカゲロウ	(水棲昆虫)	83
ノボロギク	(植物)	89	ヒドリガモ	(鳥)	15
ノリウツギ	(植物)	92	ヒバカリ	(は虫)	41・44
ハイタカ	(鳥)	15・31	ヒバリ	(鳥)	16
ハカワラタケ	(菌)	106	ヒミズ	(哺乳)	7
ハクセキレイ	(鳥)	16	ヒメアカタテハ	(陸棲昆虫)	64
ハグロトンボ	(陸棲昆虫)	65	ヒメアカネ	(陸棲昆虫)	65・81
ハグロトンボ	(水棲昆虫)	83	ヒメアマツバメ	(鳥)	16
ハシビロガモ	(鳥)	15	ヒメウラナミジャノメ	(陸棲昆虫)	64
ハシブトガラス	(鳥)	18	ヒメオドリコソウ	(植物)	90
ハシボソガラス	(鳥)	18	ヒメカバイロタケ	(菌)	105
ハシリドコロ	(植物)	90・99	ヒメガマ	(植物)	94
ハタケキノコ	(菌)	105	ヒメカンスゲ	(植物)	94
ハタケシメジ	(菌)	104・110	ヒメコンイロイッポンシメジ	(菌)	105
ハタネズミ	(哺乳)	7	ヒメジョオン	(植物)	89
ハチクマ	(鳥)	15	ヒメスイバ	(植物)	93
ハツカネズミ	(哺乳)	7	ヒメスミレ	(植物)	91
ハツタケ	(菌)	106・109	ヒメタニシ	(淡水産貝)	86
ハナアブ	(陸棲昆虫)	64	ヒメツチグリ属	(菌)	107
ハナウド	(植物)	91	ヒメトビイロカゲロウ	(水棲昆虫)	83
ハナミズキ	(植物)	95	ヒメヒラタカゲロウ	(水棲昆虫)	83
ハハコグサ	(植物)	89	ヒメフタオカゲロウ	(水棲昆虫)	83
ハマシギ	(鳥)	15	ヒメモノアラガイ	(淡水産貝)	86
ハヤブサ	(鳥)	15	ヒヨドリ	(鳥)	16
ハラタケ属	(菌)	105	ヒヨドリジョウゴ	(植物)	90
ハラヒロトンボ	(陸棲昆虫)	65・79	ヒヨドリバナ	(植物)	89
ハラヒロトンボ	(水棲昆虫)	83	ヒラタドROMシ	(水棲昆虫)	83
ハリオアマツバメ	(鳥)	16	ヒルガオ	(植物)	91
ハルジオン	(植物)	89	ヒレンジャク	(鳥)	16・36
ハルタデ	(植物)	93	ビロードツエタケ	(菌)	104・112
ハルリンドウ	(植物)	91・100	ピンズイ	(鳥)	16
バン	(鳥)	15	フウセンタケ属	(菌)	105
ハンゲショウ	(植物)	93	フキ	(植物)	89

和 名		頁	和 名		頁
フクジュソウ	(植物)	92・102	マシジミ	(淡水産貝)	86
フクロウ	(鳥)	16・24	マツオウジ	(菌)	104
フクロツルタケ	(菌)	105・115	マツタケ	(菌)	104・108
フサクギタケ	(菌)	105	マツムシ	(陸棲昆虫)	65
フシグロセンノウ	(植物)	92	マツヨイグサ	(植物)	91
フタクサ	(植物)	89	マヒワ	(鳥)	17
ブタナ	(植物)	90	ママコノシリヌグイ	(植物)	92
フタバアオイ	(植物)	93	マミチャジナイ	(鳥)	17
フタバカゲロウ	(水棲昆虫)	83	マムシ	(は虫)	41・45
フタリシズカ	(植物)	93	マメコガネ	(陸棲昆虫)	64
フッキソウ	(植物)	94	マルタニシ	(淡水産貝)	86・88
フミツキタケ	(菌)	105	マルバコンロンソウ	(植物)	92
フモトスミレ	(植物)	91	マルミノヤマゴボウ	(植物)	92
フユイチゴ	(植物)	95	マンリョウ	(植物)	96
フヨウ	(植物)	95	ミイノモミウラモドキ	(菌)	105
ブルーギル	(魚)	53・61	ミカエリソウ	(植物)	90
ヘイケボタル	(陸棲昆虫)	64	ミコアイサ	(鳥)	15
ヘクソカズラ	(植物)	90	ミサゴ	(鳥)	15・30
ベニカミキリ	(陸棲昆虫)	64	ミシシippアカミミガメ	(は虫)	41・43
ベニシジミ	(陸棲昆虫)	63	ミズカマキリ	(水棲昆虫)	83
ベニタケ属	(菌)	106	ミズヒキ	(植物)	92
ベニナギナタタケ	(菌)	106・121	ミゾカクシ	(植物)	90
ベニヒガサ	(菌)	104	ミソサザイ	(鳥)	16
ベニマシコ	(鳥)	17	ミゾソバ	(植物)	93
ヘビイチゴ	(植物)	92	ミソハギ	(植物)	91
ヘビトンボ	(水棲昆虫)	83	ミツカドコオロギ	(陸棲昆虫)	65
ホウチャクソウ	(植物)	93	ミツバアケビ	(植物)	95
ホウライタケ属	(菌)	105	ミドリヒョウモン	(陸棲昆虫)	64・71
ホオアカ	(鳥)	17	ミヤコミズ	(植物)	93・97
ホオジロ	(鳥)	17	ミヤマアカネ	(陸棲昆虫)	66・76
ホオノキ	(植物)	95	ミヤマカタバミ	(植物)	91
ホコリタケ	(菌)	107	ミヤマカラスアゲハ	(陸棲昆虫)	63・68
ホシハジロ	(鳥)	15	ミヤマカワトンボ	(陸棲昆虫)	65・78
ホシミスジ	(陸棲昆虫)	64・72	ミヤマクワガタ	(陸棲昆虫)	64
ホンバテンナンショウ	(植物)	94	ミヤマタニガワカゲロウ	(水棲昆虫)	83
ホソミオツネントンボ	(陸棲昆虫)	65・77	ミヤマナルコユリ	(植物)	94
ボダイジュ	(植物)	95	ミヤマベニイグチ	(菌)	106
ホタルブクロ	(植物)	90	ミヤマホオジロ	(鳥)	17
ボタンツル	(植物)	92	ミヨウガ	(植物)	93
ホトケノザ	(植物)	90	ミンミンゼミ	(陸棲昆虫)	64
ホトトギス	(鳥)	16・35	ムギワラトンボ	(陸棲昆虫)	65
ホトトギス	(植物)	93	ムクゲ	(植物)	95
ホンダギツネ	(哺乳)	7・11	ムクドリ	(鳥)	17
ホンダヌキ	(哺乳)	7・11	ムクノキ	(植物)	95
ホンドテン	(哺乳)	7	ムササビ	(哺乳)	7・9
マガモ	(鳥)	15	ムナグロ	(鳥)	15・34

和 名		頁	和 名		頁
ムベ	(植物)	95	ヤマドリ	(鳥)	15・21
ムラサキカタバミ	(植物)	92	ヤマドリタケモドキ	(菌)	106
ムラサキケマン	(植物)	92	ヤマネコノメソウ	(植物)	92
ムラサキサギゴケ	(植物)	90	ヤマノイモ	(植物)	93
ムラサキシジミ	(陸棲昆虫)	63	ヤマブキ	(植物)	95
ムラサキシメジ	(菌)	104・111	ヤママユガ	(陸棲昆虫)	64
ムラサキシメジ属	(菌)	104	ヤモリ	(は虫)	41
メシロ	(鳥)	17・39	ユキノシタ	(植物)	92
メダカ	(魚)	53・60	ユキヤナギ	(植物)	95
メヌグロヒョウモン	(陸棲昆虫)	64・70	ユリカモメ	(鳥)	16
メボソムシクイ	(鳥)	17	ヨウシュヤマゴボウ	(植物)	92
メマツヨイグサ	(植物)	91	ヨシガモ	(鳥)	15
モクレン	(植物)	95	ヨタカ	(鳥)	16
モズ	(鳥)	16	ヨツボシトンボ	(陸棲昆虫)	65・80
モノアラガイ	(淡水産貝)	86・88	ヨメナ	(植物)	89
モノサシトンボ	(陸棲昆虫)	65	ラショウモンカズラ	(植物)	90
モノサシトンボ	(水棲昆虫)	83	リョウブ	(植物)	96
モリアオガエル	(両生)	46・52	リンドウ	(植物)	91
モリノカレバタケ属	(菌)	104	ルコウソウ	(植物)	91
モンカゲロウ	(水棲昆虫)	83	ルリソウ	(植物)	91
モンキアゲハ	(陸棲昆虫)	63	ルリタテハ	(陸棲昆虫)	64
モンキチョウ	(陸棲昆虫)	63	ルリビタキ	(鳥)	17
モンシロチョウ	(陸棲昆虫)	63	ロウバイ	(植物)	95
ヤエムグラ	(植物)	90	ワタカラカサタケ	(菌)	105
ヤクシソウ	(植物)	90	ワルナスビ	(植物)	90
ヤシャイグチ属	(菌)	106	ワレモコウ	(植物)	92
ヤナギタデ	(植物)	93			
ヤブカンソウ	(植物)	93			
ヤブコウジ	(植物)	96			
ヤブサメ	(鳥)	17			
ヤブジラミ	(植物)	91			
ヤブタバコ	(植物)	90			
ヤブタバコ	(植物)	90			
ヤブツバキ	(植物)	95			
ヤブツルアズキ	(植物)	92			
ヤブデマリ	(植物)	96			
ヤブミョウガ	(植物)	94			
ヤブラン	(植物)	94			
ヤマアカガエル	(両生)	46			
ヤマカガシ	(は虫)	41			
ヤマガラ	(鳥)	17			
ヤマザクラ	(植物)	95			
ヤマサナエ	(陸棲昆虫)	65			
ヤマシギ	(鳥)	16・35			
ヤマセミ	(鳥)	16・25			
ヤマトシジミ	(陸棲昆虫)	63			



宇治田原町の野生生物

発行／平成 18 年 3 月

編集／宇治田原町循環型社会推進室

監修／宇治田原環境生物研究会

〒610-0289

京都府綴喜郡宇治田原町大字荒木小字西出 10

TEL. 0774-88-6635(直通)

FAX. 0774-88-3231

<http://www.town.ujitawara.kyoto.jp/>